

---

# 悪役だと知らなかった

< -

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

悪役だと知らなかった

### 【Nコード】

N5511W

### 【作者名】

くー

### 【あらすじ】

蜘蛛に入ってからH×Hの世界に転生したと知る男の話。悪の消極的肯定を家族編で、積極的肯定を蜘蛛編で書き、原作に入る悪役編は大分あとになります。基本暗いです。お知らせ：原作キャラと能力がぶりそうです。この話には登場しないキャラですので大目にみて下さい。

## 終わって始まる（前書き）

設定に矛盾が出てきましたので、家族編のゾルディック家執事関連に修正を加えます。話の大筋は変えません。尚、修正は執筆意欲の関係で蜘蛛編が終わってからになります。ご了承ください。

## 終わって始まる

享年二十六歳。

仲がさして良くない両親や二丁街道まっしぐらついでに脳味噌腐りかけていた姉は、俺の死に涙した、のかもしれない。営業のイロハを懇切丁寧に時折熱血指導を交えて教えてくれた先輩や、大きな失敗をした時に強引に飲みに入れて行って慰めてくれた同僚。彼らもきつと都合が合えば葬式くらいは顔を出してくれたんじゃないか、と希望する。小学校から高校まで同じだった幼馴染み、大学のサークルやゼミの仲間。中々に変人が多かった気もするが、彼らだって一足どころか十歩以上早い旅立ちに色々な想いを巡らせてくれているはずだ。

全て願望妄想。

だって、俺はもう死んでいる。幽霊になって皆を見守るとか無理です。不可能です。期待しないで下さい。

けれど、死んだはずの俺がこうして思考出来る理由。魂だけの存在は思考出来るのか出来ないのか、そんな小難しい事は分からないが、どうやら魂と身体は別物だったらしい。そんな結論に至ってしまった。

だって俺は、死んだはずの一人の男の記憶を持って、今生きている。

確かに俺の身体は一度死んだ。電車が横転したのだ。何が原因か、そんな事を検討する意味はない。死んだ俺は、それを知り得ない。ただ、覚えている。

ぺしゃんこになった電車。座席と何かに挟まれて、身動きが取れ

なかった。

脇腹からどくどくと勢い良く生命を構成するのに必要な何かが流れていく。何処が痛いかも分からなくなる程全身が苦痛に苛まれ。血が足りていないのか頭の回転も鈍くなり。それでも助けを呼ぼうと口を開けば血が飛び出た。動けと命令しても四肢は勝手に痙攣を繰り返すばかり。視界が滲む。情報を得る事を諦めて瞼を閉じる。最後に残ったのは聴覚だった。

助けて下さい助けて下さい助けて。

ひきつった女性の声。生命がある事を主張するように激しく泣く赤ん坊の声。

耳障りだなと、早く泣き止めよと、母親何してんだよと、普段なら思っただけだ。

真つ暗な視界に、涙の予感。情けなかった。叫びたかった。苦しかった。全て本当で、でも一番強い想いは別のもの。

助けたい。

出来るものなら助けたいさ。ヒーローなんかじゃないけれど、そんな柄じゃないけれど、助けたいって思うこと自体は多分人として間違っていないし、俺だって最期くらいは格好付けたい。最期だって、分かっているからこそ。

それでも奇跡は起きなくて。身体は微塵も言う事を聞いてくれない。痛みを段々感じなくなつて。

もう死ぬな、そんな予感がした。

助けて。

それを最後に女性の声が聞こえなくなる。新たに男の呻き声が耳に届いたが、赤ん坊の泣き声にすぐかき消された。

まだまだ勢いのある小さな命の叫びに胸が絞め付けられる。助か

つてくれ。そんな他力本願に走ってみた。だって仕方ないよな。俺、もう無理だし。多分もうすぐ死ぬし。ああ、けれど。

助けたかった。

助けたくて、でも無力な自分を思い知って。助かりたくて、でも都合良く助けなんて来ない現実を噛み締めて。そんなどうしようもなく絶望に満ちた最期を、俺は確かに覚えている。

全て妄想だったら良いのにな。

それでも俺は生きている。ろくでもない記憶を抱えて。

目覚めた時には車の中で、膝枕されていた。ぐすぐすと誰かがすすり泣く気配がする。誰だっけ、と混乱しながらゆるゆると瞼を上げれば、見慣れた女性が目に飛び込んできた。

そうだ、これは母親だ。視界の隅でぐずついている少女は、俺の妹。運転席にいるのは俺の父親。彼らは今の、俺の家族。やっと現実を認識して、母親に視線を戻す。

「あら、起きたの？」

心配そうに顔を覗きこまれ、小さく頷く。

「うん」

一気に流れこんできた男の記憶の渦にのまれた頭はなかなか動いてくれない。何かを言わなくては、そう思っても頭痛が邪魔をする。

「まだ寝てて良いわよ」

何も聞かずに頭を撫でてくれるその優しさに、睡魔が押し寄せて

きた。抗わず、瞼を閉じる。

そして再び、男の記憶を巡る旅に出た。

「起きた？」

そして目覚めれば、枕元に母親が座っていた。栗色の髪をした、白人系で彫りの濃い美しい女性。

そう、この人が今の母親。

言い聞かせなければならぬ程に、まだ記憶が混乱していた。瞼の裏に浮かぶ黄色人種で黒髪の、母親を、頭を軽く振ることで頭の隅に追いやる。途端に目眩に襲われベッドに逆戻りする羽目になった。

「大丈夫？ ルーク。貴方、一日寝込んでたのよ」

そう、俺はルーク。

母さんと父さんの息子。姉じゃなくて、双子の妹がいる五歳の少年。記憶をすり合わせて、五年の人生を確認する。変な男の一生を詰め込んだ記憶に飲み込まれそうなか、ルークという自己を保っていることに、ひどく安堵した。

「大丈夫、母さん。此処は？」

母さんと、そう呼ぶことに違和感を抱いたことに眉をしかめる。きつとすぐに慣れる。そう思いたかった。

「新しいお家よ」

額に手を当てながら、熱はなさそうね、と呟く母親。後ろめたさから視線を外せば、確かに見知らぬ部屋に寝かされているのだと漸

く気付いた。

段々と記憶が甦ってくる。

今日は、いや昨日は、お出掛けをしたのだ。頻繁に行われるお出掛けは、引越しのこと。そんなものかとも受け入れていたが、引き出された男の常識が変だと訴えかけてくる。五歳にもなるのに極力家の外に出ない生活も、大抵家にいる父親の職業が分からないことも、色々とおかしい。けれど、今はそれより重要なことがあった。

思い出す。家族で荷物を抱えながら向かった駅。プラットホームに入ってきた列車。それを見て、俺は倒れた。

一体何なのだろう。すぐくリアルティーのある男の最期。その時々抱いた感情さえ鮮やかに思い起こすことの出来る男の一生の記憶。俺はおかしくなってしまうのだろうか。電車で死んだ霊にとりつかれてもしたのだろうか。考えて、首を振る。だってこうして思考しているのはルークであり、そして死んだ男でもある。二十六年分生きた男も確かに俺だ、そんな確信があった。

「どうしたの？」

かけられた声に母親の存在を思い出す。途端、喉に張り付いたかのように声が出なくなつた。息だけで喘ぐ。

自分が何者か断言できなかつたのだ。五歳の少年なのか、それとも二十六歳の男なのか。本当に自分は、彼女の「息子」なのか。

「あらあら。まだ具合が悪そうね。もう少し眠れそう？」

ふるふると弱く首を振り、俯きながら左手を持ち上げた。行き着く先は、女性の腕。服をぎゅっと掴み、正体不明の不安を訴える。横から嬉しそうに笑う気配がした。

「甘えん坊さんね、ルークは」

ゆっくりと体重をかけないように覆い被さる柔らかい身体。抱き締められているのだと理解した瞬間、緊張がほどけていく。

「大丈夫よ。お母さんが一緒にいるから。もう怖くないわ」

穏やかな声が、温もりが、身体の芯に染み入り、思ってしまった。自分が何者かは分からない。けれど、多分母さんの息子であるという事実は、それだけは信じても良いのだと。

「母さん」

「何？」

「なんでもない」

呼び掛けに答えてくれただけで、充分だった。込み上げそうになる涙の気配を誤魔化すため、温かな身体に身を預け顔を埋める。ゆるると背を撫でてくれる母さんの優しさを全身で感じながら、再び襲ってくる睡魔に従った。

どれだけ寝れば気が済むのだろう、と自身に呆れたのは、起きたら夜だったからだ。真っ暗な部屋。寝過ぎて重い頭をゆっくりと起こす。

と、主に足に違和感を覚えて手を伸ばす。何かが絡みついている気がしたのだ。

すぐに手はそれを捉えた。柔らかい、髪のような。

「ん」

恐怖に駆られて叫びだす前寸前、聞こえてきた吐息に安堵の息を吐き出す。

「アリスか」

起こさないよう囁くように双子の妹の名を口にする。暗闇に目が慣れたのか、横に眠る少女をはつきりと認識できた。足どころか胴体にもがっしりと腕と足が巻き付いており、抱き枕状態。時々一緒に眠ることはあるものの、ここまで拘束されるのは初めてだ。

「お兄ちゃん？」

抱きつく力が弛み、寝ぼけた声で呼び掛けられる。ちょうど良い位置にあった手で頭を撫でた。

「起こしちゃった？ まだ寝てて良いから」

するとアリスは一層身を寄せてくる。

「あのね、こわいゆめをみたの」

「どんな？」

顔を此方に向ける気配。暗闇の中、うつすらと見えたアリスは目尻に涙を浮かべていた。

「まえのとき、ゆめ。いたくてね、くるしいの。しんじやったの。わたし、でんしゃきらい」

頭を撫でる手が止まる。

「前の時」？

「うん」

「つまり前世？」

「うん？」

前世の意味が分からなかったのか、首を傾げたアリス。手首に髪が当たってくすぐったい、じゃなくて。

「前世。前世か」

「うん？ ぜんせ？」

「うわあ。なんかしっくりきた」

そうなのだ。何故その可能性を考えつかなかったのかと不思議に思う程に納得してしまったのだ。

「うっ」

無視するなど不満気に唸り声をあげる妹の頭を宥めるように撫でつけながら、己に起きた不可思議な出来事に納得し。そして遅れてやってきた衝撃に再び手が固まった。

「え？ アリスも前世の記憶あるの？」

「ええ？ なに？ お兄ちゃん」

問いの意味が分からなかったのか不思議そうな声をあげる。

「だからさ、アリスも一度死んで、生まれ変わったの？」

「うっ？」

やはり意味が分からなかったのか、軽く唸るその声は既に話題へ

の興味を失っていた。

「それよりねむい」

宣言されてしまえば、それ以上強要することは出来ない。

「分かったよ、アリス。また明日。お休み」

「うん、おやすみね」

ぼんぼんと頭を叩けば、先程までのようにすり寄ってくる。そしてすぐに寝息が聞こえてきた。

「前世。生まれ変わり、か」

吐息だけで呟く。

輪廻転生でもしたかと思うも、前世でそこまで善行をした覚えもない。現状を把握しただけで、原因がさっぱり分からない。

アリスにも明日詳しく話を聞かなくては。両親には今は黙っておこう。混乱は収まらないが、そう方針を定めたことで少し落ち着きを取り戻し、目を閉じる。

こうして、気付いた時には俺の人生はもう終わっていて、いつの間にか第二の人生の幕が上がってきていたのだった。

終わって始まる（後書き）

11/1 加筆修正して一話と二話を纏めました  
変更点 主人公の享年 前世の記憶の覚醒具合 覚醒した時の年齢

## 第二の家族

前世の記憶が甦り、妹も同じ境遇だと判明してから二年後。七歳の時、俺は両親に告白した。

「実はさ、俺もアリスも前世の記憶を持っているんだ」

若干視線をさ迷わせながら。怪しい事この上ないが、こういう時どろろという態度を取れば正解か分からない。

机の向かいに座る両親を上目遣いで見やれば、母さんは驚いたように目を見開き、父さんは難しい顔で腕を組んでいた。

嘘だろう、と決め付けられてはいないが、困惑している雰囲気は伝わってくる。申し訳なさから益々縮こまり、今回こんな暴露をする原因となった物を睨み付ける。

俺と両親の間、机に置かれたノート。

切っ掛けは妹と前世を共有した事だった。色々と話を引き出した結果、妹も俺と同じ日本で前世を過ごしたことが判明した。

その事実にすぎりたかった。一人ではないという物証が欲しかった。前世の記憶が薄れていくのが恐ろしかった。そんな独り善がりな思いが、日本語での交換日記に繋がった。

妹には恐らくそこまでの強い思いはないだろう。彼女の記憶は酷く曖昧で、日本語もあまり覚えていなかった。平仮名カタカナは読めるが初めは書けなかった上、漢字に至っては俺が一から教えている。

それに、妹の精神年齢は歳相応だ。日本語での交換日記も、他の誰にも読めないという秘密めいた要素に惹かれただけだろう。

そんな幼い妹に我が儘を押し付け、そのツケを払う時がきたのだ。

アリスは決して悪くない。秘密だけお母さんにだけは教えてあげる、という小さな子供にとって実に当たり前の行動に出るのを予想出来なかった俺が悪い。

ただ、心の準備をする時間くらいは欲しかった。

いきなり両親に呼ばれ、目の前に日本語で書かれたノートを広げられた俺は固まった。そして言い訳しなくてはと焦るあまり、つい正直に告げてしまったのだ。俺とアリスにとっての事実を。

「ルーク？」

父さんの呼び掛けに肩が震える。

「ごめんなさい」

反射的に謝ったのは、恐怖からだ。今の俺を構成する大事な要素である前世を否定されることが怖かった。そして荒唐無稽な話を信じてもらえると僅かでも思い、その期待を裏切られるのがとてつもなく怖かった。

「冗談だよ、冗談。それは暗号。アリスと二人で作ったんだ。よく出来てるでしょう？」

口端を持ち上げ笑みを作って、前から言い訳として用意していた台詞を口にする。最初からこれを言えていればこんなに苦しい思いしなくて済んだのに。内心の悔しさがばれないよう歯を食い縛る。

子供らしい遊びだと大人に受け入れられる案として考えたのが暗号だった。幸いというべきか、母さんに教わったこの世界の文字は平仮名やカタカナによく似ていた。特にその音の数。だからこそ暗号で押し切れると思った。日本語と言語体系がよく似ていて、俺の知らない言語が存在する。それが指し示す事実、今は見ない振り。

「ルーク」

今度は母さんの声。

「あのね、アリスは、前の時、の文字だつて言つてたの」

今この場に妹がいない事の意味をやつと理解する。成る程、既に妹の事情聴取は終わつていた訳だ。

小さく息を吐ききる。茶番だと理解した途端、さつきまで焦つていた自分がとつともなく愚かに思えた。

「アリスは他に何か言つてた？」

「そうむくれるな」

父さんに宥められても不機嫌は抑えられない。二十六年分の記憶はあるものの、感情の発露は子供そのものだ。そんな自分が嫌になることもあるが、八歳のルークも確かに俺なのだから、と既に開き直つていたりする。

「あのね、アリスは、前の時、にこの文字を使つていて、それはルークも同じだつて言つてたわ。ニホン」という所で自分は生きていたつて」

「それで母さんはアリスの言うことを信じるの？」

卑怯な聞き方だと思つた。たとえ否定されても、それはアリスが否定されただけで俺が否定されたことにはならない。そんな逃げ道を作つた自分が嫌で、言い直す。

「ごめん、今の無し。さつき言つたように、俺とアリスは日本で暮

らしたっていう前世の記憶がある。この交換日記に書かれているのは日本で使われていた言語。この話を、母さん達は信じてくれる？」

半ば自棄になっていた。これで否定されたらどうしようという恐怖が消えた訳ではない。けれどもアリスから話を聞いたという事実を隠しての事情聴取には、やっぱり納得出来なかった。

怒りを感じ取ってはいるだろうに、母さんは呑気に両手を合わせ、そして苦笑した。

「信じるわ」

「え？」

あまりにあっさりとした返答に、こっちが動揺した。

「さっき驚いたのはアリスと同じことを言ってたからよ。不安にさせたならごめんなさい。母さん謝るわ」

次いで父さんを見れば、落ち着いた素振りで一つ頷かれる。

「納得した」

「へ？」

予想していなかった言葉の意味を、上手く理解出来なかった。

「納得したって、何を？」

つまり、俺は前世の記憶があると匂わせるような言動を取っていたと、そういう事なのだろうか。

「ルークの言動はその歳にしては大人びている。それに二人とも奇

怪なことをよく口にしていた」

大人びているというのはまあ納得できるが。

「奇怪なこと？」

一応気を付けていたつもりなだけけれど。しかしそれは自信過剰だったらしい。疑問はすぐに解決された。

俺は覚えていないが、言葉を喋り始めた頃妹と共に色々やらかしていたのだ。母さんと父さんは違つと両親を丸ごと否定してみせたり、存在も知らないはずの海に行きたいと言い出したり、米が食べたいと言ってみたり。

暫く続いたが、両親が誤りを訂正し変な事を言うのは止めなさいと根気強く言い続けたら、二人とも言わなくなつたという。

思わず額を押さえて奇声を発したくなつた。どれだけ迂闊なんだ、過去の自分。この件では絶対アリスを責められない。

息を吐ききる。過去は過去だ、と失態を受け入れる。それがあつたから今受け入れてもらえそうなんだと前向きに捉えてみる。

「変なこと言う子供でごめんなさい。信じてくれて有難う、父さん、母さん」

「どう致しまして。ルークが上手く世の中に適応できるよう、お母さんも協力するわ」

「長年の謎が解けてすっきりした」

母さん、今の俺は社会不適合者ですか。そして父さんはあつさりし過ぎ。

そんな突つ込みを入れようとしたけれど。弾けそうな涙腺に邪魔されて下手くそな笑みを浮かべる事しか出来なかつた。

母さんが労るように頭を撫でてくれるもんだから、尚更。

「それにしても、二ホン、って何処にあるのかしらね」

空気を和ますためだろうか。母さんが口にした話題に、身体が固まる。敢えて考えないようにしていたのに。

でも、良い機会かもしれない。今まで知る為の方法が無かったと自分に言い訳しながら目を背けていた現実に向き合うべき時がきたのだ。

震えそつになる唇を、何とか動かす。

「あのさ、日本を知らないならアメリカとかヨーロッパは？ あと中国、チャイナとか。あ、日本じゃなくてもジャパンとか」

「さあ、聞いた事ないわ」

「ジャポンなら聞いた事あるが」

二人の台詞に確信を持ってしまった。諦念を溜め息として吐き出す。

「なんか、世界自体が違うみたい」

元々荒唐無稽な話に更なる胡散臭さが加わってしまった。

ああ、色々とおかしい点は見え隠れしていたさ。あまり変わらないう生活水準。使われている文字が日本語に酷似している。つまりこの世界は日本文化を根幹とした平行世界なんじゃないか、と。そんな馬鹿なことがあって堪るか、と頭の中で何度も否定した。けれどもジャポンという国があると聞けば、それで充分だった。

「ジャポンについて父さんは何か知っている？」

「忍者がいると聞いたことがある。あとは着物という民族衣装がある」と

ほら、やっぱり。俺の知る日本の面影がちらほらと。でも、ジャポンは日本ではないのだろう。だから、前世で俺の知る人は一人もいない。その証拠がもう一つ。

「最後の質問なんだけど。俺の誕生年月日は？」

今更過ぎる質問に首を傾げた母さん。けれど律儀に答えてくれる。

「三月三日よ。1973年の」

おかしいんだ。同じ世界に生まれ変わったのなら、命日の後じゃなきゃおかしいだろう？

何故、前世の誕生年月日とぴつたり一致するのか。平行世界に生まれ変わったから。そう考えなきゃおかしいんだ。

「教えてくれて有難う、母さん。父さん」

席を立つ。一人になりたかった。この絶望はきつと、両親には伝わらないだろうから。泣きそうになるのを堪えて子供部屋に駆け込む。後ろで動く気配があったけれど、結局気を遣ってくれたのか両親が入ってくることはなかった。

部屋の隅で体育座りをしながらいじけて十分くらいが経っただろうか。そろりと扉が開く気配に視線を上げる。

「アリス」

もじもじと俯きながらアリスが近寄ってきた。横にぺたんとは足を崩して座り込んでくる。

「あのね、お兄ちゃん。わたし、母さんに言っちゃった。ひみつだつてやくそくしたのに。おこった？」

上目遣いで伺ってくるアリスに、自然と笑みがもれた。

「怒ってないよ。アリスは何も悪いことしてない」

「ほんとう？」

「本当」

「ぜったい？」

「絶対」

断言すれば、安心したようにアリスは顔を弛ませる。そしてぴつと寄り添ってきた。

「じゃあ、なんでお兄ちゃんそんなにかなしいの？」

至近距離で覗きこまれ、言葉に詰まってしまった。深呼吸して、気持ちを落ち着かせる。アリスにこれを言って良いのか少し迷ったけれど口にしたのは、単に俺が弱いからだ。解消法が見出だせない苦しみを、吐き出したかった。

「前の時、一緒に過ごした人と、もう会えないんだ。それが寂しい」

友達がいた。同僚が、先輩がいた。嫌な思い出も多いけれど、一番長い時間を共にした家族がいた。確かにあった繋がりには、もう手の届かないところにある。

「わたしがいるよ」

自信に満ちた台詞にアリスを見やる。真っ直ぐな眼差しが注がれていた。

「お兄ちゃんがかなしくないように、いてあげる」

「アリスは寂しくないの？」

思わずと言った形で考えるより先に言葉が飛び出した。

アリスは不思議そうに首を傾ける。

「なんで？」

「だって、前の時、一緒だった人ともう会えないのはアリスも同じだよ？」

唸り声を上げて考え込んだアリスは、やがて顔を上げた。嘘のめない晴れやかな顔で笑いかけてくる。

「母さんと父さんがいてね。お兄ちゃんがいるの！ だからわたしさびしくないよ」

アリスから前世の家族の話聞いたことはない。以前尋ねたところ、知らないと言われた。アリスの知らないは、まだ思い出していないということ。これから思い出せば、また違う考えが出てくるかもしれない。俺と同じように絶望するかもしれない。

けれども、救われた。同じ境遇の者が今を受け入れ生きている。その事実には、確かに俺は救われた。

「そっか」

「うん」

嬉しそうに頷く妹。俺の家族。

「じゃあ、俺もアリス達がいれば寂しくない」

半分強がり半分願望の、どうしようもない台詞だった。けれど、アリスが笑って頷いてくれたから、言って良かったと思えてしまう。

「お兄ちゃんがさびしくないように、ずっといっしょにいてあげる」

抱き付いてくるアリスに、感謝を。

「有難う」

得意気に笑う妹は、多分感謝の意味を分かっている。けれど、ただ嬉しかったのだ。独りぼっちじゃない、そう思えたことが。

## 第二の家族（後書き）

11 / 1 加筆修正しました  
追加項目 前世の誕生日

## 父さんの正体

それから折をみて、両親から詳しくこの世界の話を聞いた。世界地図が違った。教わった文字は世界共通語だった。魔獣がいた。

淡々と語る様子に、両親にとっては全てが当たり前の事柄なのだと理解してしまう。一々驚く俺の方がおかしいのだと理解してしまう。

話を聞く度に心が折れそうになった。けれど頑張れたのは、家族がいたからだ。変な質問にも、決して笑わず答えてくれる両親。そして辛い時は傍にいて、分からないながらも話を聞こうとしてくれる妹。

充分じゃないか。

だって、俺は一度死んだんだ。もがき苦しんで、これ以上ないってくらいの痛みと絶望を味わって、確かに死んだんだ。

前の世界と繋がる事が出来ないのは辛いけれど。悲しいけれど。奇跡を求めて足掻きたくなるけれど。都合の良い救いなんて存在しないということ、俺は知っている。

同じように人が生き。集まって国を作り。長い歴史が存在する。そして日本と似た国が存在する、そんな世界。何より、たとえ世界が違おうと今の俺がもつ唯一の小さな世界、家族は変わらない。

それで、充分。繰り返し自分に言い聞かせて納得させて、そうして小さな自我を保つことに漸く成功した頃合い。

その小さな世界にヒビが入った。

話がある。重い口調で父さんがそう切り出したのは、俺とアリスの八歳の誕生日の夜のことだった。

小さな机を四人で囲む。最近はやがて貧乏になって、椅子は手放したから地べたに直座り。けれど普段は食べられない甘い物、プリンが夕飯の後誕生日ケーキの代わりに出されたからか、アリスはご機嫌だ。にこにこ朗らかな笑みを浮かべながら父さんを見詰めている。父さんはそんなアリスの視線から逃れるように俯く。そんならしくない仕草に疑問を持った俺の耳に、低い声が届いた。

「実はな、俺はお前達の父親じゃない」

横でアリスが息を呑む。こくんというその音がいやに響いた、気がした。

こちらの衝撃を無視して父さんの告白は続く。

「本当の父親はお前達が産まれる前に死んだ。俺はそいつの兄貴みたいなものだ。今までは許していたが、これからは俺を父さんと呼ぶ事を禁止する。良いな」

勝手に言い放ち、勝手に席を立つ。そのまま寝室へと消える後ろ姿を、呆然と眺める事しか出来なかった。

「うそ」

高くか細い声が横で上がる。

「うそだ!」

「嘘じゃないの」

そこで始めて発言した事で漸く母さんの存在を思い出す。ぎくしやくと機械的な動きで首を動かし視界に入れた母さんは、心持ち俯きぎゅっと拳に力を入れて何かを必死に耐えていた。

それは、罪悪感？

「ごめんね。お母さんが悪いの。お母さんと本当のお父さんが。ヘンデスさんはただ私達を助けてくれただけなの」

何か事情があるのだろう。母さんだって辛かったのだろう。思い至ってしまい、沈黙を選択した俺。

「ばか！ 母さんもうそつきなんだ！ 母さんなんてきらい！ 父さんもきらい！ みんなみんなどっか消えちやえ！」

裏切られた。その思いのまま癪癢を起こし、泣き出す妹。きつと皆正しい。

よく分からないけれど、父さん、じゃなかった。ヘンデスさんは俺達の父親の代わりに父親役を演じてくれた。母さんはヘンデスさんの好意に甘えた。けれどヘンデスさんは最後まで嘘を突き通す気はなくて、物心つく頃には真実を話す気だった。それが今だったっただけ。

びやかーと発音が怪しくなりながらも罵倒を尽くし泣き続けるアリスの頭を抱き締め、その背をさする。

「本当に、ごめんなさい」

断罪される事を前提とした謝罪の声は、ひどく暗く重々しい。

溜め息を吐きたくなかった。実際吐いた。けれど胸の内に溜まる澱みはちつとも動こうとせず、その存在を主張し続けるだけ。

そこに至って漸く気付いた。俺も傷付いているんだな、と。

子供にとって家族とはすなわち世界だ。特に我が家のようなあまり外と交流のない家では。

それが偽りだった。ヘンデスさんがもう父と呼ぶなと宣言した。それは家族ごっこを続けるつもりはないという意思表示でもある。始めから、偽りの家族だったのだ。

その事実には傷付いているということは。俺は自分で思っていたよりずっと家族に依存していたってということだ。この第二の家族を俺の一部として受け入れ、精神の支えとしていた。悟った時には既に失っているあたり、救えないのだが。

自分の心を再確認している間にアリスは泣き疲れたらしい。肩に重みがかかり、全体重をかけてきた。寝息も聞こえる。

「ねえ、母さん」

うんしょ、とアリスを抱え直して体勢を整える。ちよつと重かったので早々に諦め、その頭を膝に乗せる事で妥協してみた。ついでに正座していた足を伸ばして長時間話せる姿勢をつくる。

「騙してた事、まだ許せない。だからさ、話してくれないかな？ 母さん達の事情。全部。母さん達は何から逃げているのか、ついでうのものも含めて」

色々、頃合いだったのだろう。俺が平穩の為に今まで敢えて目を瞑っていた事。きつと今回の事に繋がっている。

しかし尚も言い淀む母さんの、背をそつと押した。

「大丈夫。俺ただの八歳じゃないから。前世の、俺、は母さんより歳上だったよ」

そんな事を言いつつ普通の八歳児程度には家族に依存している矛盾には気付いている。だからこそその気恥ずかしさを滲ませた台詞だったのだが、空気を和ますという効果はあったらしい。

母さんは気が抜けたように笑いを溢して。

「そうだったわね。うちのルークは中身おじちゃんだったわ」

せめて大人と言って、なんて不満に思いつつ、口には出さなかった。多分、安心したから。いつもの天然入った能天気な物言いに。その明け透けな笑顔に。

「どこから話そうかしら」

そんな定番ともいえる語り出しから始まった語り話。

母さんは終始穏やかな様子を崩さず、そして俺もただじっと聞き耳を立てていた。

ずっとアリスの頭を重しとしていたせいで若干痺れている膝を酷使して向かったのは両親の寝室。じゃなかった、母さんとヘンデスさんの寝室。母さんは子供達の寝室でもある居間でアリスの寝顔を眺めているから、二人きり。

「ルークか」

電気も付けず真つ暗闇の中、ヘンデスさんは此方に背を向けて座禅を組んでいた。

「全部聞いた、ヘンデスさん」

そろそろと彼の背後に近寄り、正座する。そして上体を曲げ、頭を床につけた。

「有難うございます。今まで赤の他人である俺達を守ってくれて」

ヘンデスさんは、本当に赤の他人だった。母さんともあまり関係のない。ただ、本当の父親との約束を守ってくれているだけだった。

母さんと父親は恋愛関係にあった。そして俺達を身籠った。そこまではごくありふれた話。

違ったのは母さんと父親の生い立ちであり、職場。二人共、さる暗殺一家の使用人の家に生まれ、その生き方に疑問を持ちながらも使用人の仕事をこなしていた。流されるように命令に従い惰性で生きてきて。二人だけの時はそれでも我慢できたのだという。お互いに苦しみを共有する事で愛も深まった、と。

契機は、俺達が出来たこと。

二人共、自分の子供達が自分達と同じような生き方をせざるを得ないことが許せなかった。別の、普通の、平穏な生活を送らせてやりたかった。

結果、暗殺一家からの逃亡を二人は選ぶ。

それは、父親の死という犠牲を払って成された。

ヘンデスさんにとって父親は部下であり、小さい頃から面倒をみてきた弟のような存在。本当の弟のように可愛がっていたと、母さんは言っていた。

そして逃亡計画に反対した人でもある。両親の計画を察したヘンデスさんは父親を説得した。けれど父親は譲らなかった。

そこら辺の詳細を、母さんは知らない。

だが、結果としてかけおちの待ち合わせ場所に現れたのはヘンデスさんで、父親の死を母さんは告げられた。そして引き返そうとする母さんを強引に連れて逃亡したのもヘンデスさん。

父親との約束だ、ヘンデスさんはそれだけを繰り返し、今もあるかも分からない暗殺一家の報復から俺達三人を守り続けている。

全てを聞いて。母さんを怒鳴りつけたくなつた。ヘンデスさんという他人を巻き込んで。俺とアリスを逃亡生活に巻き込んで。結局俺達は”普通の”生活なんて送れていない。

全ては両親の自己満足に過ぎないのではないか。そんな思いをぶつけようと息を吸い込んだのだけれど。

無理だった。出来なかった。

俺とアリスとヘンデスさんに謝罪を繰り返す。死んだ父親に面目が立たないと詫び。俺達を愛しているのだと訴えて。子供達に好きな道を選ばせてやりたかったと後悔を口にする。

そんな母さんの自分勝手な言葉に、納得なんて出来やしない。許せやしない。アリスが羨ましいという気持ちだつてある。感情の俣に泣き叫び、自分の痛みを表現できるアリスが。

だけど、俺は知っていた。自分勝手に傲慢で独りよがりだけれど、確かな愛情があつた。前世の記憶があるなんていう変な子供達を受け入れてくれた。守ろうと、必死に頑張ってくれていた。あまり良い母ではなかつた前世の母親を知っているから、それだけは断言できる。

そして、ヘンデスさんの愛情も偽りではない。

だからこそ、それが分かるからこそ、俺は母さんを責めないし、ヘンデスさんに対して心から感謝を口にする。

「礼は言うな」

ひどく突き放した冷たい口調。自然と口許が緩む。

やっぱり、俺この人好きだ。

「言わせてよ。もう父さんとは呼ばないから。代わりに礼くらい言わせて下さい」

返事は何となく分かつてる。

「約束だから守ってるだけだ。お前達の為じゃない」

予想通り。

敢えて指摘はしないけどさ。小さい俺達が父さんと呼んで返事をしていたのは、父親代わりになってくれていたのは、約束には入っていないと思う。つまり、それはやっぱり俺達の為にした行為であり、愛情だと思っんだ。

「うん、分かった」

背中が向けられている事を良いことに、遠慮なくにやけ崩れながら口先でヘンデスさんの言葉を肯定する。

そしてもう一度深く頭を下げた。

俺はこの人を尊敬する。

母さんの話だと、弟分の嫁に対して愛情を持つとかはないのだから。ただ男同士の約束を守る為、それだけの為に腹に子がいる母さんを連れて逃げ、その後も放り出さず面倒をみてくれている。責任なんて欠片もないのに。

「父親の事、聞きたいか？」

背中を向けたままなのでヘンデスさんの表情は何えない。いつも通りの無表情を、少し緩めてくれていれば良い。そんな事を考えながら首を振った。

「ううん。聞かない」

聞く必要はなかった。

多分、偽りであっても、自分勝手な思いでも、それでも父親とい  
って顔が浮かぶのはヘンデスさんだと思ったから。

## 欠けた家族 1

今日もアリスは不機嫌継続中だ。

「アリス、ご飯の時間」

夕飯になっても寝室のクローゼットに籠ったままの幼い妹に声をかける。が、返事はない。

ヘンデスさんの告白から一月が経った。にも関わらずあれからずっとアリスはヘンデスさんと母さんを無視したままだ。

俺とは多少話していたのだが、俺が二人の味方をしていると感じたらしく、無視の対象にめでたく仲間入り。

正直ここまで手強いとは思っていなかった。

気持ちは分からないでもないんだけどな。どうしても俺はヘンデスさんの味方をしてしまう。無関心を装いながらもアリスの暴挙に心痛めているのを感じるから。

そんな俺の気持ちをアリスも敏感に感じ取っているのだろう。八歳児といえど侮れない。

途方に暮れながら、声をかけ続けていたら、クローゼットの扉の隙間からすつと何かが出てきた。

無視されて以来アリスの番で止まっていた交換日記。

読むよ、と一声かけてから開いたそれにはみっちり日本語が書き込まれていた。

余談だが、アリスの文字はすごく達筆だ。お手本が俺の字とは思えないくらい。やはり前世の記憶が影響しているのだろう。そして一日中家の中で過ごして他にやる事がないせいかな漢字の習得率も中

々のもの。

アリスの日記を要約するところだ。  
嘘をついていたヘンデスさんと母さんを許せない。二人の肩を持つばかりかヘンデスさんになつく俺も許せない。ヘンデスさんは家族ではないのだからもう話さない。ヘンデスさんと話す母さんとも俺とも話さない。でも一人は寂しいから母さんと俺はもうヘンデスさんと話すな。そしたら許してやる。

読みきって出るのは溜め息。

あの後話し合ってアリスには真実を話さないと決めた。少なくとも妹がもう少し大きくなるまでは。まだ妹は幼すぎる。大人の事情とやらを理解出来るとは思えない。

しかしそうなってくると、真実を知らないアリスの主張は至極真つ当なものになってしまう。彼女の中でヘンデスさんは加害者、自分は被害者、という構図が出来上がっているのは明白だ。

本当は、ヘンデスさんが一番の被害者のようなものなのにな。俺と母さんはヘンデスさんにどうしても負い目というものを感じてしまい、アリスの絶対的な味方にはなれない。

可哀想だな、とは思ふ。大人の都合に巻き込まれて。孤独な戦いを強いられて。

「アリス」

アリスの気持ちが終わった日記を隙間からそっと押し返した。  
ごめん。

心の中で謝罪し、けれど別の事を口にする。

「俺も母さんも、それから勿論ヘンデスさんも、皆アリスの事を愛してるんだ。それだけは分かってくれ」

クローゼットの扉をどんっと強く叩く音。それが返事だった。

「ご飯、冷める前に早く来いよ」

頃合いだな、と感じ腰を上げる。これ以上はお互い意固地になるだけだ。

「アリスはどう？」

不安気な母さんに首を振る。それだけで充分だった。

「頂きます」

前世の影響で俺だけ日本式の習慣を口にして、食事は始まった。

三人共無言で食事を進める。アリスが引きこもってから我が家の空気は一気に重くなった。俺とヘンデスさんはもっぱら聞き役だし、いつも喧しい程話題を提供するアリスはいない。母さんもあの日から上の空だ。いつもの毒舌入った天然発言が恋しい。

「ごめんなさい」

ふと顔を上げれば、母さんは食事の手を止めて俯いていた。

「母さん？」

「貴方達の為、なんて言いながら結局色々嫌な思いさせちゃってるわ。ヘンデスさんにも。ごめんなさい。貴方が昔言った通りね。逃げたって普通の暮らしが出来る訳じゃない。分かっていたつもりなんだけど」

確かにな。心中で思いつきり同意してしまった。

かけおち。響きだけは格好良いかもしれぬ。けれど、何もかも捨てた事でゼロからのスタートになるわけではない。逃げた時点で精算仕切れていないマイナスのものを抱えてのスタート。過去はいつか自分の足を引っ張ることになる。

それを、やっと母さんは実感したのだろう。

普通の生活なんて出来やしない。俺だって現時点で自分の道を自由に選べる気が全くないのだし。いつ報復されるのかと神経を尖らせる生活はそう遠くない未来破綻する。

「あいつは、お前の能天気な笑顔が好きだと言っていた」

唐突に響きわたる低い声。

二人の視線を集めたヘンデスさんは、食事の手を休めないまま言葉が続けた。

「あそこではお前は笑えなかつたんだろう？ だから外へ出た。なら笑う事はお前の義務だ。あいつの死を想うならば苦しくても笑え。子供に落ち込んだ顔を見せるな。謝るな」

落ち着いた声音だった。感情がこもっていないようでもあり、叱咤するようでもあり、また励ますようでもある。受け取り手次第でどうとでも取れる、深く染み入る声。

不思議と俺は安心してしまった。

「ルーク、お前はお前の感じるまま行動しろ。アリスはお前の娘じゃない。親はちゃんという」

敵わないな、と思う。この人は父親ではないけれど、家族を支え

る人なんだな、と思う。そうしたら自然と肩の力が抜けた。この一月ずっと緊張でこり固まっていた身体が解れていく。

「俺の事は気にするな。お前はアリスの母親なんだろう？」

母さんに向かい、アリスの事を第一に考えると挑発的に吐き捨てたヘンデスさん。好きだな、と心から思う。

「ヘンデスさんの言う通りだよ、母さん。母さんはアリスの味方をしてやって。寂しがってる。因みに俺はヘンデスさんの味方するから」

「ルーク」

たしなめるように低く渋い声がかかるが、そっぽを向く。子供らしい仕草だな、と少し自分に笑みがもれた。

でもさ、二人の前では子供っぽくても良いのかな、なんて都合の良い事を考えてしまうんだ。

「ヘンデスさんが言ったんだよ？俺の思うように行動しろって」

感情に素直になれば、俺はヘンデスさん寄り。それはやっぱり変わらない。

諦めたようにヘンデスさんが溜め息を吐き。吹っ切れたように母さんが笑顔を見せて。

「有難う。ルーク、ヘンデスさん」

あとは我が妹がいれば完璧。

同様に思ったのだろう。すっと立ち上がった母さんが寝室へと向かう。

多分、もうすぐ四人が揃う。そんな安心感に満ちた余裕が出来て、自然と口許が綻んだその時だった。

「アリス!？」

甲高い叫び声。ヘンデスさんが眉をしかめて立ち上がったのを視界の端に収めながら、俺も母さんの元へと急いだ。

狭い家故すぐに母さんの小柄な後ろ姿が目に入る。横に並び立ち、ようやくと異変の正体を悟った。

「アリスは外か」

すぐ背後からかけられた声は確信に満ちている。

その言葉が指す通り、アリスがこもっていたはずのクローゼットは藻抜けの空。自然と目がいったのは寝室の窓。アリスの身体なら充分出られるサイズの小さなそれは開け放たれていて、冷たい風が身体を撫でる。

鳥肌が立った。全身が凍りついたように動いてくれない。

「ルーク」

肩を叩かれ、漸く時が動き出す。あまりにも優しい掌の温もりに、すがりたいのを必死で堪えて振り向いた。

「ヘンデスさん」

助けて欲しい。その身勝手な言葉を何とか喉元で堪える。

散々ヘンデスさんに悪態を吐いたアリスを助けて欲しいだなんて、あまりにも失礼だ。

「俺、アリスを探しに行くから。だからヘンデスさんは」

家にいて、とは最後まで口に出来なかった。

肩を掴む手に力が込められる。痛む程の強い力。見上げれば、ひどく険しい眼差しが注がれていた。

「俺が行く。外は危険だ。ルーク、お前は弱い。力不足だって分かるな？」

端的に事実を指摘され、唇を噛み締める。

悔しくて、惨めで。とても覚えのある感情が胸を占めた。魂に染み付いた、前世の最期の記憶。無力な自分はもう嫌だと、こんな思いを味わうのはあの時で充分だと、そう心に決めたはずなのに。結局、俺は何も変わっていない。

口の中に錆びついた味が広がる。

違う。こんなんじゃないかった。前世の最期の時は、もっと苦しかった。身体中から込み上げる血で呼吸困難になる程の量だった。

手に意識を向ければ、ぎゅっと強く拳を握っていた。試しに右手を上げれば簡単に持ち上がる。

なんだ、動くじゃん。

口許に笑みが浮かぶ。まだまだ絶望するのは早いと言い聞かせる。だって、俺は生きている。

おし、と自分に気合を入れて視線を上げれば、既にヘンデスさんは玄関を出ようとしていた。

急いでそちらに向かう。一回こけそうになったけれど、見ない振り。

「ヘンデスさん！俺も行く！」

扉に手をかけていたヘンデスさんが振り向き、そして俺を視界に入れて。分かりにくいながらも、笑った気がした。無表情ながらも口端が僅かに上がっている。目が若干細まる。

その常のない反応に戸惑っている俺の頭を、ヘンデスさんはぐしゃぐしゃに掻き混ぜた。

久しぶりの触れ合い。彼が父親でないと告白して以来、こういう事をしてくれなくなったのに。

「アリスは必ず連れ帰る。家の事は頼んだ、ルーク」

一方的に言い放ち、ヘンデスさんはもう此方を振り向きもせず出て行った。

その後ろ姿は、とても頼もしく。ヘンデスさんに任せればもう大丈夫だと。助けてくれる人がいるのだと。頼っても良いのだと。そう安心したら、何故か泣きたくなった。

アリス、もう大丈夫。ヘンデスさんはお前の味方だ。

そう心の中でアリスに呼び掛けた。

## 欠けた家族2

ヘンデスさんがいなくなり、静けさが戻った。  
深く息を吐けば、小さなはずのそれは狭い我が家に響き渡る。

「母さん」

未だクローゼットの前で微動だにしない母さんは、ゆっくりと振り返る。そして無表情でその手に握られた日記を差し出してきた。

「ルーク。これ、なんて書いてあるの？」

ひどく穏やかな声音で問われ、小さな罪悪感が沸き上がる。

世界共通語も書けるアリスが敢えて日本語で書いた不満。それは見方を変えれば、母さんとヘンデスさんを拒んでいるということ。分かり易い反抗の手段をアリスに与えたのは俺な訳で。

別に俺が直接悪い訳ではないが、妙な居心地の悪さを感じながら受け取った日記。

感情の乱れが表れたかのように雑な筆跡で、大きく書かれていた。

「私はこの家の子じゃない」

言葉にするのは、かなりの気力が必要だった。ぷるぷると日記を持つ手が震えている。

「そう」

母さんの表情を見るのが怖くて俯いた先で、日記のページが濡れ

ているのに気付いてしまった。色の濃くなった丸い点。

あいつ、一人で泣いていたんだな。

クローゼットの中なんていう暗く狭い空間で一人うずまくりながら涙を溢すアリスの姿が、脳裏に鮮明に浮かんできてしまう。どんなに寂しかっただろう。どんなに心細かっただろう。想像するだけで、胸が締め付けられる。

「ルーク」

声をかけられ、母さんの存在を思い出した。

きつと母さんだつて悲しんでる。慰めなくては。そう頭では考えるのに、上手い具合に言葉が浮かんでこない。結局俯いたまま、口を開いて。また閉じて。

そんな事をしていたら、唐突に温もりが降ってきた。

「大丈夫よ、ルーク」

穏やかな声。思い出す。俺が前世の最期を思い出して倒れた時も、母さんはこうして抱き締めて、大丈夫だと言ってくれた。

「貴方は何も悪くないから、そんな顔しなくて大丈夫」

でもさ、母さん。俺、悪いんだ。悪い子なんだ。

「夕飯の前、アリスが日記に自分の気持ち書いてくれたんだ。俺、それ突き返した」

きつと、あれは最後のSOSだった。無視されたと感じたから、アリスは家を出た。

「良いのよ、ルーク。本当はお母さんがアリスの気持ち、聞かなくちゃいけなかったの。辛い役、させちゃってごめんね」

その台詞を聞いた瞬間、激情が沸き上がった。  
今更？ それをこの場で言うのか？

辛かった。何で俺がアリスの機嫌を取らなくちゃならなくて、ヘンデスさんに申し訳ない気持ちを感じているのか、途中からその苛立ちが母さんへ向きそうになるのを必死で堪えていた。俺は悪くない。母さんがかけおちなんてしたのが悪い。そう喚きたくなる時がこの一月一体何回あったか。

それを耐えて耐えて。表に出す気なんて、欠片もなかったのに。

「アリスもルークも、私の可愛い子供達だわ」

「馬鹿！」

労りに溢れた声に今までの努力を否定された気がして、反射的に吠えた。瞬間、不味い、と思ったのに。

「そうね。お母さん馬鹿ね」

あんまりにも優しく肯定しながらぎゅっと強く抱き締めてくるから。

「そうだよ。馬鹿だよ。なんだよ暗殺一家の使用人って。そんな危なそうな所から逃げてくるなんて馬鹿げてる。ヘンデスさんまで巻き込んで」

爆発してしまった。ヘンデスさんの告白以来溜まっていたもやもやを、母さんにぶつけてしまった。

どんつと腹立ち混じりに母さんの背中を叩く。お返しとばかりに

背中を温かな手で撫でられて、もっと強く叩いた。

「ルークは優しい子ね。大好きよ」

どンドン叩く力を強くするのに、母さんは微塵も動じてくれない。

「良いのよ、もっと責めて。子供は親を選べないんだもの。その代わりに、甘えて良いの」

そうだ。子供は親を選べない。俺は、こんな家に産まれたかったわけじゃ。それ以上は、たとえ頭の中でも続ける事が出来なかった。あまりにも優しい思い出に邪魔された、という要素もある。けれども一つ、思い至ってしまった。母さんだって、同じ思いを強く抱いていた一人なんだってこと。

未来を決められた家に産まれた。使用人だっていつても、実際にその手を血に染めたこともあったのかもしれない。想像したら、堪らなく母さんを哀れに思ってしまった。

再び行き場の無くなった感情をもてあまし、最後に一回母さんの背中を叩く。そしておずおずと呟いた。

「なんで母さんはそんな厄介な家に産まれたんだよ」

母さんを責めあぐねて、母さんの生家に矛先を向けてしまった。

子供っぽい発想に恥ずかしくなり、ちょうど良い位置にあった母さんの服をぎゅっと握る。

母さんはゆるゆると背中を撫でる手を止めないまま、穏やかに同意してくれた。

「そつね。お母さんもそつ思つ」

その言葉を最後に、再び沈黙が落ちた。

興奮のせいか火照った頬を隠すように、母さんの柔らかい身体に体重をかければ、心臓の音が耳に入ってくる。とくんとかん、と規則正しいそれに、ゆっくりと熱が冷めていくのを感じる。

「母さん」

「なに？」

ちよつと言い淀んで。でも、一拍置いてそれを口にした。

「ごめんなさい」

色んな意味をこめた謝罪だった。

愚痴を吐いて、子供っぽい怒り方をして、母さんを責めて、全てにごめんなさい。

母さんは小さく笑った。

「たまにはこうして甘えなさい、ルーク。貴方がいくら大人びていても、私の可愛い息子だっていう事実は一生変わらないんだから」

頷きながら、嬉しさで口許がにやけるのを止められなかった。甘えを許してもらえたからっていうのもある。けれど、それよりも、いつもの母さんだった。元気で前向きな母さんだった。やっと、俺の家族が戻ってきた。そんな安堵が胸一杯に広がる。

「アリス、大丈夫かな」

明らかに照れ隠しの為に発した話題。母さんは察しているだろう。それでも何も言わずにのっけてくれる。

「大丈夫。ヘンデスさんが必ず連れ帰ってくれるわ」

「そうだね。ヘンデスさんだし」

「そうよ。いけすかない男だけどすつごく強いのは確かだから」

ちよつとした疑問が頭をよぎる。もしかして、母さんとヘンデスさんはあまり仲が良くないんじゃないか。

考えてみれば、簡単な話かもしれない。ヘンデスさんからしたら、母さんは自分の弟分をたぶらかした女な訳で。母さんからしたら、ヘンデスさんは愛する人の死の真相を教えてくれない人物な訳で。今まで仲が良いと信じきっていた夫婦像が崩れていく。

「あの人、約束は絶対守る人だから大丈夫。安心しなさい、ルーク」

けれど、母さんの声には確かな信頼がありありとのせられていたから。

そっか、と納得する。ヘンデスさんは母親としての母さんを信頼して。そして母さんは守る人としてのヘンデスさんを信頼している。そこに愛はなくても、俺やアリスが夫婦だと錯覚する程の確固な絆が存在しているのだ。

願わくは、俺やアリスとヘンデスさんの間にも、親子と錯覚するような絆ができますように。

そう、祈った時だった。

母さんが素早く動く。

「母れ」

どんつと押され、寢室の床に転がる。聴覚が扉の音を捉える。頭を持ち上げ、視界に入ったのは母さんではなく、閉まった扉だった。

「ルーク」

扉越し、くぐもった声が届いた。

這うように扉まで進み、がちゃがちゃとノブを回す。内開きのそれを引こうとするのに、全く動いてくれない。

「母さん？」

アリスの不在を知った時よりも強い不安。

未知の状態の要因が掴めないことが、混乱を深めていく。

「愛してるわ」

状況にそぐわない台詞が、不安を掻き立てる。

「何言ってる」

「アリスにも愛してるって伝えてちょうだい」

自分で言えば良いじゃないか。その一言がどういしても言葉に出来なかった。どんな返事がくるか、予想が出来るからこそ、それを明らかにしたくない。

みつともない悪足掻きを嘲笑うかのように、見知らぬ声が響いた。

「アン・ヘルゲン？」

玄関が開く音はしなかった。それなのに高めの声は確かにすぐその居間から発せられ、そして母さんの名を口にした。

「すぐにヘンデスさんが来てくれるから、だいじょ」

質問を無視した母さんの声が途中で切れ、代わりに何かが空を切る音を拾った。

静まりかえる室内。

どくんどくと心臓が鼓動を刻む音だけを感じる。

「ああ、さん？」

情けなくなるほど、上擦った声だった。

返事はない。

震えが止まらない手に力を籠める。恐る恐るノブを捻れば、先程までの抵抗が嘘のように扉は勝手に手前へと傾いた。ぎいと立て付けの悪い我が家らしい聞き馴染みのある音が響く。

そして、扉が開ききつたと同時にどさつと温かい物体が倒れこんできた。

「母さん？」

穏やかな表情で瞼を閉じる母さん。尻餅をつきながら支えた身体から温もりが伝わってくる。傷付けられた様子は微塵もない。

寝てる？

混乱気味の脳に浮かんだ疑問。

「綺麗に取れた」

その言葉に侵入者の存在を思い出して。

勢い良く上げた視線の先に映った光景は、俺の間抜けな疑問を否定していた。

居間に我が物顔で佇むのは、俺とあまり歳の変わらない少年。瞳

が印象的だった。真っ黒な、感情のこもる余地がない無機質な光を宿した瞳。その瞳に映っているのは、少年が手に握るもの。

小さな手にもてあまし気味の、赤黒い、それは。

確かに脈打ち。

「終わり」

簡潔な宣言と共に、ぐちゃりと潰れ、弾け。その瞬間、少年は僅かに笑んだ、気がした。

ひゅうつと咽が鳴る。勝手に身体が痙攣し出す。

支えきれなくなった母さんがどさりと床に投げ出された。傷なんてないのに。温かいのに。ぴくりとも動かない身体。

さつき見た物体の正体を言語化するのを脳が拒む。

「あ」

意味を成さない単なる音が勝手に飛び出す。反射的に手で口許を覆うが、その動作が逆に侵入者の注意を引いてしまった。

予備動作もなく、人形のように少年が此方を振り向く。薄気味悪いその眼球と、視線がかちりと合った瞬間だった。

ぞわりと全身に走った悪寒。がたがたと歯がかち合うのを止められない。早く逃げろ、そう脳が指令を下すのに、神経が麻痺したように力が入らない。

殺される。

それしか考えられなかった。

動かない母さんは死体で、さつきアレを潰されて、アレは母さんのアレで、きつと俺のアレも同じように弾け飛ぶから。そしたら俺は母さんと同じ死体になる。

死ぬ。

混乱しきつた脳裏に死という単語がびっしりとひしめき、正常機能を端に追いやる。おかげで視神経もやられたらしい。

視界に映るもの全てが一枚膜を張られた向こうの景色のように感じられ、現実味を失った。

少年が俺を見て首を傾げる。

次の瞬間勢い良く玄関を振り返り、脇に飛びのく。

銃声が鳴り、俺の耳がやられる。

少年の肩から血が飛び出る。

俺の視界を誰かの背中が占拠する。

もう一回銃声がして、誰かがいなくなる。

部屋の隅で少年に誰かが馬乗りになっている。

少年が俺に何かを投げつけてきて。

死んだ。

そう、死んだと思って意識を投げ出したのに。

「ルーク」

ぺちんと音がして、頬に痛みが走った。

「あ」

死ぬ。死ぬ。死ぬ。殺される。

ひたすらそれだけで占められていた頭が、一気に覚醒した。めまぐるしく色々な光景が瞼の裏をよぎり。

「ルーク」

再び頬を軽く叩かれる。

それと同時に脳に流れ込んだのは、最悪な記憶だった。全身が動かなくて、赤ん坊の泣き声が何も出来ない俺を責めるように耳をつんざき、死の臭いだけが周囲を支配する。そんな、前世の最期。

ひゅうつと咽が鳴る。あの時に戻ったかのように、上手く呼吸が出来なかった。

「ルーク、息を吐け」

出来ないんだ。答えたいのに、苦しくて言葉にならない。代わりに出てきたのは涙だった。

そういえば、俺死ぬ時泣いてたのかな。変な方向に思考が飛ぶ。幾ら思い出そうとしても、分からない。

ひたすら呻いて、泣いて、そうしていたら口に何かが当てられた。苦しくて跳ね退けようと手を振り回すのに、誰かが邪魔をする。ついには身体を拘束された。

殺されるんじゃないか、そんな予感に全身が強張る。

「ゆっくり息を吐け。吐き出せるはずだ。そうすれば楽になる」

息を吐き出せば、苦しみから開放されて楽に死ねる？

霞みがかかった思考でそう考えて、呼吸に全神経を集中させた。

だって、苦しいのは嫌だ。来もしない助けを信じてしまいなからゆるゆると死を待つのは、ひどく苦痛だった。いつそ殺してくれと念じながら拷問のような痛みを耐え続けた。そんな最期の記憶。

前世の時は誰も助けてくれなかったけれど。楽に殺してくれるならば。今俺の隣にいる死神に、感謝したくなる。

「そうだ。ゆっくりで良い。吐いて。吸って」

穏やかな低い声に、何も考えず従った。

吐いて。吸って。繰り返す内に呼吸が楽になっていく。未だ涙腺が壊れたように涙は止まらないけれど、時折しゃくりあげる程度におさまった。

朦朧とする頭で死神を見上げる。今から殺されるなら、その顔を見ておこう。そんな諦めきつた意思の上に成り立った行為だったのに。

「ヘンデスさん？」

スキンヘッドの頭に、切れ長の瞳。よくよく見知った顔に、安堵するでなく、疑問を持った。

「ヘンデスさんが、俺を殺すの？」

その可能性は考えていなかった。甘かったかな、俺。ヘンデスさんを無条件に信用し過ぎた？

でも、ヘンデスさんに殺されるなら良いかも。理由なくそんな結論に至り、身体力を抜いたのだが。ごつんと頭の天辺に衝撃が走った。

「った」

小さく呻く。本当は叫び出したい程の痛みだったけれど、そこまでの体力は既に無かった。

頭を押さえながら、おずおずと見上げる。

ヘンデスさんは眉根を寄せ、静かに口を開いた。

「間に合わなくて、悪かった」

何に間に合わなかった？

一瞬頭が真っ白になる。思考回路が噛み合わなくて。

不思議そうな表情を浮かべていたのだろう。ヘンデスさんは重い口を開いた。

「アンを守れなかった」

アン。母さん。母さんは、そうだ、母さんは。

跳ねるように身体が勝手に動いた。横に倒れ伏したままの母さんをゆする。

「母さん。ねえ、母さん。起きてよ」

強くゆすり過ぎたのだろう。横向きの身体がごろんと此方に転がってきて仰向けになった。左胸に視線が引き寄せられる。

じわりと血が滲んでいたそこから、目が離せない。

「う、そだ」

最初に母さんが倒れてきた時には赤色なんてついていなかった。だから、俺は、それを、必死に、否定して。

「止める、ルーク」

制止を無視して手を伸ばす。触れた掌にべっとりと何かが付着する。温かい。

「ルーク」

ヘンデスさんの声が陰しさを増している。それでも、止められなかった。

恐る恐る上体を屈めて、耳をつける。

ついさっきまでとくりとくりと音がしたのに。さっきはこの行為が俺に安心を与えてくれたのに。

「もう死んでいる、ルーク」

うん。そうだね。

だって、心臓を取り出されて潰されたんだ。

### 欠けた家族3

母さんの死体に温もりを求めて引っ付いている俺をそのままに、ヘンデスさんは色々動き回っていた。

きっとこの家を出る準備をしているのだろう。また引越した。でも、今回は母さんがいないから俺がその分荷物を持たなきゃ。

変に冷静な思考回路が働いて、荷造りしなきゃと頭では考えるのに、身体は吸い寄せられたように母さんの傍から離れてくれない。動く切欠が、掴めない。

「ルーク」

それが合図だった。踏ん切りをつけるように、母さんの頬にキスして立ち上がる。

せがまれても生前は絶対にしなかった行為。恥ずかしさから拒んでいたけれど、こんな事になるんならやっておけば良かった。こんな事で喜んでくれたなら。笑顔になつてくれたなら。

深い後悔を胸に抱き、ゆるゆると立ち上がる。

「アリスは？」

渡された荷物を背負い、この後何処に行くのだろうかと考えて。そこで漸くアリスの存在を思い出した。

我ながら薄情な兄だ。

「公園に隠れてる」

薄情なんだけれど、それは認めるけれど、その一方で深く安堵し

た。

アリスはまだ失われていない。その事實は、今の俺にとって確かに救いだっただ。

「行くぞ」

俺の何倍も大きな荷物、けれど今までの引越より随分と小さくなったそれを持ったヘンデスさんに従い、母さんに背を向ける。

「辛いなら離れている」

玄関を出るなりそんな事を言ったヘンデスさんは、次に行く事を仄めかすようにいつもの無表情でライターをかちゃかちゃと鳴らした。

今更だが、部屋に変な臭いが蔓延していた気がする。あれは、ヘンデスさんがガソリンを撒いていたのかもしれない。

「最後まで見る」

「そうか」

言葉と同時にヘンデスさんは開け放った玄関の内にライターを投げつけた。

「だが、最後までは無理だ。すぐに逃げるぞ」

手を取られ、強い力で引き摺られる。

抵抗はせず、ただ繰り返し振り返る。すぐに視界は真っ赤に染まった。

母さんが、燃えていた。

「ねえ、ヘンデスさん」

小さくなった炎が視界から見えなくなり、いつの間にか繋がれていた手は離され、自分の足で歩いていった。

黙々と歩き続ける大きな背中話しかける。無言を発言の許可と受け取り、勝手に疑問を口にする。

「さっきの子」

何者？ ヘンデスさんは、殺したの？

どっちにしようか悩んだ末、空に溶けた続きを、ヘンデスさんは察してくれた。

「ゾルディック家当主の息子だ。また来るだろう」

「ゾルディックが、例の暗殺一家？」

「ああ」

ヘンデスさんと母さんと、それから父親が仕えていた家。話は聞いていたけれども。

無機質な殺意。思い返すだけで、身体に震えが蘇る。

また来る、とヘンデスさんは言った。まだあの少年は生きている。その事実がひどく恐ろしい。

ヘンデスさんが殺してくれたら良かったのに。そんな、澱みきつた願いが胸の内に湧き出た事に少し驚く。

でも、あの少年が、母さんを。

「ルーク」

どす黒く、その一方で抗えない魅力をもった、明確な殺意。そ

れが、ヘンデスさんの声で一瞬霧散した。

「強くなりたいか？」

気付けば、ヘンデスさんは立ち止まっていた。遙か上方にあるその顔を仰ぎ見る。

「あいつは、お前達に、普通、を望んでいた」

、普通、ってなんだろう？

「だが、強くならなければ、お前達は死ぬ」

その通りだ。さっきだってヘンデスさんの到着が少し遅ければ、俺は死んでいた。

「守るつもりではいる。だが、今の無力なお前達は守りきれない」

すごく正直な人だと思った。自分の力量をしっかりと把握しているからこそその発言であり、それだけあの少年が強いということ。

「さつきは追い払えた。だが、次は期待するな」

次があると確信した声だった。

次は俺が殺されるかもしれない。もしかしたら、アリスが殺されるかもしれない。

想像の中で、動かなくなつた母さんと、アリスが重なる。赤ん坊の泣き声と、アリスの泣き声が重なる。

嫌だ、と瞬時に脳は答えを弾き出した。

だってさ、アリスは本当に幼いんだ。死を理解出来ない、まだ生

を謳歌していない、本当に唯の子供なんだ。我が儘ばかり口にして、すぐ泣き喚いて、でも笑うととっても可愛くて、俺を好きだと臆面なく言ってくれるような、本当に憎たらしくて愛らしい妹なんだ。

死んで欲しくない。殺されて欲しくない。もう、俺の人生を死という文字で汚されたくない。

その為に必要ならば。

「強くなれば、アリスを守れるかな」

母さんは、俺の目と鼻の先で殺された。暗殺者と対峙した時も、俺はただみつともなく震えていただけだった。俺は、何も出来なかった。限りなく無力だった。

「強くなりたい」

言葉にしたら違和感があつて、言い直す。

「絶対、強くなる」

「普通の、平穏な暮らしとは程遠い人生になる。覚悟は良いか？」

母さんと父親の望みとはかけ離れた人生、か。多分それは、前世の俺が送つたような人生を指すのだろう。

けれど、そんな前世の俺は死の間際何も出来なかった。今回と同じように、ただ迫ってくる死を受け入れることしか出来なかった。

ごめんなさい。心中で母さんに謝罪する。やっぱり、もう嫌なんだ。何も出来ず、無力感だけを噛み締め、その上で再び迫り来るであろう脅威をただ待つだなんて、耐えられない。

「強くなる、手伝いをしてくれる？ヘンデスさん」

少しだけ不安だったので心持ち声が小さくなった。

覚悟は出来ている。けれど、ヘンデスさんがこれから俺達に付き合ってくれるだなんて盲信する事は出来ない。

ヘンデスさんは地面に膝を付け、俺と視線を合わせてから口を開いた。

「約束だ。俺はお前達を強くする。次に彼が来た時も、力の限りお前らを守る。お前は、何をしても生き抜け」

最後、短い言葉の裏に隠された意図を推し量る。

何をしても生き抜け。それはあの少年を自らの手で殺す事か、それともヘンデスさんを囷にして逃げるといふ事態を想定しての事か。どちらにしても、簡単に頷くなんて出来やしない。

「約束出来るか？」

それなのに、容赦なく返答を迫ってくるヘンデスさん。子供としてでなく、一人の人間として、覆しようのない意思を求められていると感じた。

一度口にしたら、もう撤回出来ない。

母さん。本当にごめんなさい。もう一度だけ謝って。

「約束する」

強くなって家族を、アリスを守る。その為ならば、なんだって出来る気がした。

アリスは公園の植木の中で蹲っていた。

「アリス！」

微動だにしない姿が母さんと重なり、焦りと不安が険しい声となつて飛び出した。

「お、にいちゃん？」

間延びした声。目を頻りにこする様に、寝ていただけだと気付く。安心して、勝手に騙された事が恥ずかしくて、呑気に寝ていたアリスに理不尽な怒りがわいてきて、でもやっぱり生きているという事実<sup>じつじ</sup>に感謝しなくなった。

力が抜けて地面にへたり込む。アリスのとろんとした蒼い瞳が目の前にくる。

「アリス、お出掛けしよう」

引越しの時の恒例の台詞。意味は伝わっただろう。一拍置いてこくと頷き、けれどアリスは違和感に気付いてしまった。きよろきよると辺りに視線が飛ぶ。

「母さんは？」

母さんを求めて立ち上がろうとするアリスの手を両手で掴む。

「お兄ちゃん、痛いよ」

普通にアリスが俺と喋っている。無視されない。

多分、家出して寂しかったんだろ。ヘンデスさんが迎えに来てたけ<sup>re</sup>どすぐ置いて行かれて心細かったんだろ。だから迎え

が来て、嬉しくて、家族を無視してた事なんて忘れちゃったんだろ  
うな。

すごく健全で、子供らしい思考を想像してみた。日常に、逃げ込  
みたかった。

「俺が伝えるか？」

アリスの手を握ったまま黙りこんだ俺に、ヘンデスさんが救いの  
手を差し伸べる。その手を取るのはひどく容易い。お願い、の一  
言で良い。

だけど俺は、俺が母さんの子供なんだから。俺が伝えなきゃ。

「アリス、母さんは一緒に来ないんだ」

アリスの元々大きな目が更に見開かれる。限界一杯まで広がって、  
これ以上無理ですって瞳に水の膜が張られる。膜から水滴がぼろぼ  
ろ生み出される。

「わたしっ。私がつそついたから。母さん怒った？」

嘘？ 思い返して、納得する。自分はこの家の子ではないと、家  
族を丸ごと否定した事を、悔やんでいるのだから。

違う。アリスのせいじゃない。伝わるように、しっかりと視線を  
合わせてから首を振る。

「違うよ。大丈夫。母さんはアリスの事、愛してる」

伝言、確かに伝えました。

だから、その後は俺の好きにして良いよね？ 母さん。

「母さんはちょっと遠いところにいる知り合いに会いに行ったんだ。母さんが大好きな人のところに」

愛していた父親のところに、母さんは逝ってしまった。

「良い子にしてたらむかえに来てくれる？」

「もちろん」

嘘を、付きました。

アリスの為じゃない。四人揃った家族という幻想をアリスに押し付けたい、そんな自分勝手な、俺の為の嘘。

俺はもう夢を見られないから。

「それまで俺の傍にいてくれる？アリス」

卑怯でごめんなさい。でも一人になりたくないから、もう家族を失いたくないから。お願いだから騙されて。

「お兄ちゃん、怒ってない？」

無視された事？

「全然怒ってない」

逆に聞きたかった。日記を突き返した事、怒ってないのか。

「私の事、好き？」

不安気に、上目遣いで此方を伺うアリス。

笑え、と脳に指示を出す。泣くな、不審な行動をとるな、と必死

に戒める。上手くいったか分からなかったから、誤魔化すようにアリスを抱き締めた。

「愛してるよ、アリス」

母さんは最後、笑顔でこの台詞を言えたのだろうか。穏やかな表情をした最期を思い出して、胸が詰まる。

俺は無理だ。自己欺瞞に満ちた愛の台詞しか吐く事が出来ないから。

「じゃあ私、ずっとお兄ちゃんと一緒にいてあげる！」

明るさに満ちたアリスの言葉。

アリスがいれば、この妹さえ、普通でいてくれれば、それを守る為ならば、きっと母さんも許してくれる。

何を許してくれるのかさえ明解には分からなかったけれど、漠然とそう思った。

「行くぞ」

ずっと沈黙を保ち傍観していたヘンデスさんが動き出す。アリスの手を取って促す。

早々此方に背を向けたヘンデスさんの元へ駆け足で追い付き、その手を無理矢理握った。

「今日だけ。お願いだから」

子供っぽい自分に、羞恥心が込み上げる。

けれど今日は、今日だけは、誰かに導いて欲しかった。

何も言わずにヘンデスさんは俺を見下ろし、そして荷物を持ち直してから歩き出した。俺と繋いだ手はそのまま。有難う、と不器用な優しさに心中で感謝する。

右手に小さなアリスの手。左手に大きなヘンデスさんの手。歩きにくかったけれど、その温もりにすがって、ただ足を動かした。母さんを置き去りにして。

## 逃亡生活

あれから小さな街に辿り着いた。そこで初めて、今まで住んでいたところは治安が良かったのだと知る。汚物の臭い、路上を住みかとした人々、補修した跡がない崩れそうな住宅群。前世の時、スラム街といって想像するような、そんな街。世界が違っててもこういうところは変わらないのだと、切なくなる。そして生活水準もぐっと下がった。

今までのようにベッドも蒲団もない。寝る時は正体不明の染みがついた床に横たわり、アリスと一枚の毛布を分け合う。ヘンデスさんは自分の上着で我慢しているから文句なんて言えない。

食事は一日三回から二回へ。朝固いパンを食べて、夕方はパンと意外にも手慣れた風でヘンデスさんが作るスープの二品。甘い物を食べられない事へ不満を持っていた以前の生活が懐かしい。

時々ヘンデスさんは外出し、お金を持って帰って来る。真つ当に働いているとは思えない額のお金を持って。

我が家の秘密を知って、逃亡生活は嫌だと思っていた。けれど、違った。今までの生活は、少しでも普通に平穏な暮らしに近付けようという母さんの必死の努力の上に成り立っていたのだ。外に出られないなんていう不満がとてもちっばけなものに思えてくる。家族で笑って暮らせた幸福を、なくなって初めて思い知る。

今まで臆気だった敵が実体を成し、母さんという犠牲を出して。俺達の本格的な逃亡生活は幕を上げた。

もう一つ、今までの生活と大きく変わったことがある。

「もう嫌だ!」

体力作り。実戦訓練。

強くするとの言葉通り、ヘンデスさんは俺達を鍛え始めた。そう、俺とアリスを。

指示されたのは、俺は腹筋背筋腕立て二百回ずつ、アリスは百回ずつ。アリスも十回ずつ三セットまでは頑張った。だが、今までの引きこもり生活の弊害で絶望的なまでに体力がない。俺は健康の為に軽く体力作りしていたからまだついていけるけれど。

「ヘンデスさん」

泣きが入っているアリスはもう勘弁してやってくれ、という哀願のこもった呼び掛けは、すげなく無視された。

ヘンデスさんは睨み付けてくるアリスの敵意を意に介さず、淡々と話しかける。

「母親と会いたくないのか?」

完全に家族ごっこを放棄したヘンデスさんの物言いは、ひどく冷たい。

そしてアリスのヘンデスさんへの対応も日に日に剣呑さを増している。

「あんたには関係ない!」

汗にまみれながら、酷使したせいでがくがくと震える腕を必死に

持ち上げながら、アリスは叫ぶ。

「まだまだ元気だな」

ヘンデスさんは幼稚な怒気をさらりと受け流す。そのままアリスに背を向けたのだけれど。

「良い子にしていれば母親が迎えに来るんだろう？」

ぼつりと水面に餌を投げ込むように、無造作に、ヘンデスさんはアリスへと希望を落とした。俺の嘘を前提とした脆い希望を。

アリスはヘンデスさんの背中を睨み付け、思いつきり舌を出してから体力作りに戻る。静かに、一点を睨み付け、黙々と腹筋を再開するアリスの様子に嫌な感じを覚えた。

「アリス。少し休む？」

相当ストレスが溜まっているだろう。幼い身体にかかる負荷を思い、声をかけたのだが。

アリスは身体を動かしながら荒い呼吸の合間、声を発する。

「良い子につ、してたらっ、母さんっ、来るもん！」

必死なその様子に何も言えなくなった。

「ヘンデスさん」

「終わったか？」

「うん。アリスはもうちょっとかかりそう」

別室で新聞を読んでいたヘンデスさんは、煙草を消して立ち上がる。

逃亡生活が始まってから、母さんが死んでから、ヘンデスさんは煙草を吸い始めた。今までも俺の知らない所で吸っていたのかもしれない。

真相は分からないけれど、煙草を吸うという行為だけで今までと別人のように感じてしまう自分がいる。自分の知るヘンデスさんがとても限定的なものだったという事実を突き付けられているようで、少し嫌だ。

本人には言えないけどさ。

「好きにやれ」

始まるのは実戦訓練。俺が攻撃を仕掛けて、ヘンデスさんはそれを避けるだけ。反撃は来ない。

それでも俺はヘンデスさんに一発入れる事さえ出来ないのだけだ。

「相手の動きをよく観察しろ」

「直線的な攻撃だけじゃ駄目だ」

「軽過ぎる。体重をもっと乗せろ」

「脇を締めろ」

次々と指示が飛んでくる。未だ褒められた事は一回もない。ただ、厳しい視線を向けられるだけ。

これも、新たなヘンデスさんの一面だ。今までの無口ながら穏やかな優しさを見せていたヘンデスさんが、この時ばかりは別人に変わる。少し雰囲気や母さんを殺した少年に似てくるから、この時間のヘンデスさんは苦手だ。

「今日は終わりだ」

結局全ての攻撃が防がれ、へとへとになった頃終了の声がかかる。

「アリスを連れて来い」

瞬間身体が強張る。毎日行われる日課だからこそ、与えられるだろう痛みを勝手に身体が予想して身構える。

「はい」

無い気力を振り絞って、アリスの元へ向かう。

アリスは全身汗まみれで俯せに倒れていた。

「アリス！」

走り寄ればアリスは視線だけを此方に向けて笑った。

「百五十回ずつやったの。私偉い？ 良い子？ 母さんほめてくれるかな？」

ふうと息を吐いて、込み上げたやりきれなさを、罪悪感を逃してやる。

そうしてからでないと、アリスの顔を見られなかった。

「アリスは偉いな。すっごく良い子だ」

髪をすき、表情筋を駆使して笑みを作った。つられたように、アリスも笑う。それだけで、嬉しくなる。俺は、俺達は、まだ笑える。

アリスに手を貸して、ヘンデスさんの元へと戻った。アリスは、再び親の仇を見るような殺気をこめてヘンデスさんを睨み付けている。

「ルークからいくぞ」

宣言が入り、ヘンデスさんが素早く動く。顔だ、と判断して両手を顔の前にクロス、また衝撃を逃がす為タイミングを合わせて後ろに飛ばうとしたのだが。寸前で軌道が変わり、胸部に衝撃が走る。予想していなかったからか、壁まで吹っ飛んだ。

「甘い。次はアリス、いくぞ」

朦朧とする視界に、腹部への攻撃を受けて咳こんでいるアリスが映る。尻餅をついているが、それは体力が尽きたせいだろう。まだヘンデスさんを睨み付けているあたり、上手い具合に衝撃に備える事が出来たようだ。

こうして、最後にヘンデスさんは一発ずつ俺達に攻撃を加える。気絶させないぎりぎりの力加減。

始めの一週間は何処を攻撃するか宣言され、箇所に応じた受け身の取り方を教わった。次は宣言なく攻撃されるようになり、ヘンデスさんの動きを予測して受け身を取るよう反射神経を鍛えられた。

一ヶ月毎日されたお陰で直線的な攻撃には対応出来るようになったのだが。今日からは俺に対してフェイントが入ってくるらしい。最近漸く身体が綺麗になってきたのに、明日からはまた暫く痣や内出血が絶えない生活となりそうだ。悔しいが、このフェイントを明日からの組み手で使ってやって絶対ヘンデスさんに一発入れてやるうと心に誓った。

最後の一撃を受けたら訓練は終了。アリスとシャワーを浴びる。風呂が恋しい。

「髪洗うよ」

自分でもどうかと思うが、アリスの髪を洗うのが最近数少ない癒しとなっている。

従順に頭を預けて来るアリスの茶色の髪を優しくシャンプーでこする。

この生活を始めた当初は石鹸しか無かったのだけけれど。シャンプーが欲しいなあ、と呟いたのをヘンデスさんが聞いていたのか、次の日には机の上に安物のシャンプーが置かれていた。そういうところ、ヘンデスさんは本当に優しいんだ。だから、貧しい生活にも厳しい訓練にも耐えてしまう。

アリスの身体に多く残る痣を見れば悲しくなるけれど。決してアリスの顔には傷を付けないというヘンデスさんの無言の気遣いが透けてみえるから、憎めない。

ただ、時々思う。この生活はいつまで続くのだろう。アリスは、いつまで、普通<sup>ノーマル</sup>のままではいられるのだろう。

「アリス。辛くない？」

絡まった髪を丹念に解きほぐしながら、問いかけた。

辛い、と言って欲しかったのかもしれない。甘えて欲しかったのかもしれない。だって、それが俺の考える、普通<sup>ノーマル</sup>の子供だから。

けれどアリスは自分の身体を洗いこすりながら、何でもないような口調で答えた。

「ん〜。お兄ちゃんいるから平気」

正直、嬉しかった。嘘を付いて、後ろめたい事を抱えて、それでもアリスには求められている。必要とされている。アリスを守るといふ目的を、保っていられる。それが堪らなく嬉しい。

アリスは唐突にくるりと回り、俺を正面から見詰めてきた。まだ背丈は全く変わらないから、視線がかちりと合う。目前でアリスはにやりと意地悪く笑う。

「分かった！ お兄ちゃん寂しいんでしょ？ 母さんに会えなくて寂しいんだ！」

勝ち誇ったように胸を張るその姿が、愛しかった。もう二度と母さんには会えないという真実を知らないこそ、見せる天真爛漫な姿を、それをずっと見ていたいからこそ、俺はまだアリスに真実を告げられない。

「うん。寂しいんだ」

だけど、口にした感情は本物。慰めて欲しいな、という醜い下心を、アリスは正確に読み取ってくれた。

「もう。私がいるでしょう？ 一緒に良い子で母さんが迎えに来てくれるの、待ってようね」

お姉さんぶるアリスの台詞に、安心して、申し訳なくなった。

「うん。そうだった、アリス。一緒に待とう」

それからくるりとアリスの身体を回し、水かけるよ、と一言注意してから髪についたシャンプーを洗い流した。そこら中水滴が跳ね

ているから、泣いてもバレないよな、と溢れ出る涙をそのままにする。

この時間が堪らなく好きだ。

アリスと触れ合えるし、一杯話せるし、泣いても良い。

俺の癒しの時間。

## 悪事 1

「今日は別メニューだ。アリスはいつもの体力作り。ルーク、お前はついて来い」

コートを着込み、俺にも子供用のコートを渡しながらヘンデスさんはそう宣言した。

初めてだった。アリスを一人置いて二人で出掛けるのは。

不安と不満が表情に出ていたのだろう。一つ溜め息をもらし、ヘンデスさんは言葉を付け足す。

「中にいれば安全だ」

それでも素直に頷けない自分がいた。

だって母さんは、家の中で。俺は何も出来なくて。

押し黙った俺に何を言っても駄目だと思ったのか、ヘンデスさんは標的を変更した。

「アリス。良い子なんだからもう一人で留守番出来るな？」

魔法の言葉。`良い子`というキーワードは、母さんの帰りを一途に待ちわびるアリスに対してきめんの効果を発揮する。

案の定アリスは敵意剥き出しに、それでも留守番を頼まれたのが嬉しいのか少し誇らし気に頷いた。

「それくらい出来るもん！」

ほらみる、と云わんばかりにヘンデスさんが此方を見やる。俺の

思いを分かっているはずなのに。アリスの前で母さんの話題を出せない事だつて分かっているくせに。

「分かった」

むっつりと、不満をありありと乗せた不貞腐れた声での同意。アリスへの対応で分かっていたけどさ。ヘンデスさんは無反応で、後について来いとばかりにさっさと背を向けた。

家を出て、アリスがいなくなつて初めて不満を明確に口にする。

「ヘンデスさん。アリス、本当に大丈夫なの？」

知らない間に妹が失われてしまうこと。俺の目の前で妹が殺されること。この二つが、今の俺にとって最大の恐怖だ。

「まだ大丈夫だ」

確信に満ちた声。絶対に大丈夫だと信じてしまう。それならば、良いのだけれど。

しかし、それと同時に新たな疑問が沸き上がった。`まだ`って、いつまで？ 何でヘンデスさんはそんな事が分かるの？ 貴方は何を知っているの？

それらを言葉にしようとした直前、ヘンデスさんが立ち止まる。高いところから見下ろされる。

これは真剣な話をする合図。経験で分かっていたから、気を引き締めた。

「ルーク。お前は子供でいたいのか？」

案の定、重い質問。今更だなんて思っただけ、すぐにその考えを否定した。

俺は自分を一人前だと、アリスを守る存在だと捉えていたけれど、同時に、まだヘンデスさんに守られている。甘えている。その甘さをこれからは許さない、そういう意味なのだろうか？

「今ならまだ戻れる。ルーク。俺は、お前を大人として扱って良いのか？」

真っ直ぐな視線なんだけど。いつもと同じ無表情なんだけど。固い声なんだけど。

不思議と、迷いを感じた。

ヘンデスさんの方も俺を扱いかねている。前世の記憶があるなんていう変な子供。賢しい面がある一方で、子供っぽく家族に依存している。もしかしたら、よくシャワーを浴びながら泣いている事にも気付かれているのかもしれない。

大人として接したら良いのか、子供として接したら良いのか、ヘンデスさんも迷っている。そんな事に、今更ながら思い至った。

本音を言えば、子供でいたい。守られて、思う存分不安も不満も吐き出して、慰めて欲しい。まだまだ頼らせて欲しい。

けれど、前世の記憶がそれを阻む。中途半端に現実を見てしまい、子供でいる事の弊害を考えてしまう。真実を知らせてもらえない。大事な場面で大切なものを守れない。そんな無力な子供でいる事を、俺は拒否したい。ならば。

「大人として、接して下さい」

今日から一切ヘンデスさんに甘えられなくなるかもしれない。泣くことも出来なくなるかもしれない。弱音も愚痴も、吐き出すこと

さえ出来なくなるかもしれない。

覚悟しよう。決意しよう。けれども、一つだけ譲れない我が儘があった。

「でも、お願いだから。アリスだけは、子供でいさせて下さい」

妹だけは、子供でいて欲しい。それを確約してくれば、頑張れる気がした。

「分かっている」

「約束して」

強く主張すれば、ヘンデスさんは苦笑い。ごめんなさい。信用してない訳じゃないんだけど、約束の方が信頼度は格段に上がる。特にヘンデスさんに対しては。

「約束だ」

言質を取って、漸く安心出来る。

それから再びヘンデスさんは歩き出した。その後ろを小走りで行き、辿り着いたのは人通りの少ない路地裏に位置するぼろい一軒家。

「黙ってついて来い。足音も立てるな」

ヘンデスさんは返事も確認しないまま、すたすたと荒れ果てた庭に侵入する。慌てて追い掛けたけれど、一言も聞いたかった。

不法侵入なんじゃない？

がちやっと割合大きな音を立てて窓ガラスが割れる。予想していなかったから肩が跳ねた。そんな俺をよそに悠々と割れて出来た穴

から手を入れて鍵を開けるヘンデスさん。  
不法侵入っていうかさ。

「泥棒？」

静かにしるとばかりに睨まれて、反射的に口を覆ったけれど。明らかに泥棒です。しかも俺、泥棒の片棒担がされる予感がします。

一応前世では犯罪とは無縁の人生送ってたんだけどな。一体何なんだろう。八歳の誕生日を迎えてから三ヶ月弱で色々危ない経験を積み上げている気がする。行っちゃいけない方向に突っ走ってる気がする。

静かに窓を開けて侵入を図るヘンデスさんに、俺も続くべきなのか？　これが大人として扱われるってことなのか？　犯罪行為するのが大人ってこと？

いや違うだろ。どう考えたってやっぱり犯罪は犯罪で。前世、平和な暮らしを営んできた二十六年、そして母さんの元で暮らした八年、そこで培ってきた常識が俺に叫ぶ。犯罪はいけませんよ、と。悪いことしようとしている人がいたら止めてあげましょうね、と。

「ヘンデスさん！」

制止のため、あげた大声。ヘンデスさんは億劫そうな仕草で振り返り、窓から引き返してきて。

いきなり殴られた。拳は見えなかった。ただ、何が起こったか分からない内に右の頬に衝撃が走って、庭の植木に背中から突っ込む結構な距離を飛ばされたはずなのに、何時の間にかヘンデスさんが目の前にいて、襟ぐりを掴まれた。至近距離で目の合ったヘンデスさんは、俺を真っ直ぐ見つめていた。

「アリスの身体を売るか？」

何を言われたか、分からなかった。

「小さい身体を好む下種野郎は腐るほどいる。それともお前が身体を売るか？」

ロリコンってこと？ 俺？ 俺が身体を？ どういう意味？

「ア、アリスは駄目」

分からないながら、拒否しなきゃいけないと感じた。アリスに変なこと、させたくない。

「じゃあルーク。お前がホモ野郎に身体を売るか？」

そういう事？ 身体を売るって、つまり売春？ 俺がその対象になるの？ 想像して、想像しきれなくて、ただ気持ち悪いと感じる。反射的に首を振る。

「なら文句は受け付けない。ついて来い」

やっぱり意味が分からなかった。けれど、恐怖に突き動かされて機械的に身体を動かした。

ただただヘンデスさんが怖かった。今までの訓練中の攻撃は強くなる為という目的があったけれど。さっき殴られたのは、本当にただの暴力だった。俺を黙らせる為だけにふるわれた暴力。威力は訓練と同じくらいだったのに。そこにこめられた意味に気付いてしまったからこそ、身体が勝手に萎縮する。何か言えばまた殴られると本能が怯えてしまう。

侵入した屋内。ヘンデスさんは台所まで来て強引に俺に袋を持たせた。

「好きな物を入れる。持てる範囲でな」

そして金目のものを探しにか、消えたヘンデスさん。

一人きりになった空間で、堪らずへたりこんだ。泣きたかった。泣いて、許しを請いたかった。悪いこととしてごめんなさい。いるかも分からないし、普段信じてもないけれど、神様助けてと叫びたくなった。

「もう嫌だ」

ぼつりと独り言がもれる。誰にも聞かれていないと分かるからこそ、吐き出した本音。

限界だった。母さんが殺されて、不便な生活を強いられて、アリスに嘘をつき続けて。ずっと悲鳴をあげていた心を、初めて正面から認めてあげて。

「でも」

やっぱり見ないふりをした方が良いのかと迷う。

だって、ヘンデスさんと約束しちゃったんだ。大人として扱えて。俺が我慢すれば、いや、我慢しなければアリスに皺寄せがいくかもしれない。さっきヘンデスさんが仄めかしたように、アリスが酷い目に合うかもしれない。

アリスだけは、汚しちゃ駄目だよな？

自己暗示。辛いけれど、苦しいけれど、アリスの為ならば何をしても構わない。そう言い聞かせて弱い心を封印する。

悪いことだけど、犯罪だけど、今はヘンデスさんの言うことを聞

かなきや生きていけないんだ。もしアリスと二人投げ出されたら、それこそ身体を売る羽目に陥るかもしれない。それを防ぐ為だから、仕方ないよね？

心の中の母さんに問いかけて、無理矢理想象上の母さんを頷かせる。

途端にせりあがるのは罪悪感。

「ごめんなさい、ごめんなさい。母さん、ごめんなさい」

母さんを汚してしまった気がした。母さんの望みは違った。俺とアリスに同じように愛を注ぎ、同じように普通に普通に平穏な暮らしを望んでいた。決して母さんは、今の俺を喜ばない。頭では分かっていたけれど。

「どついたら良いの」

何をすれば正解？　ここから逃げる？　アリスを連れてヘンデスさんから離れる？　暗殺者から一人きりでアリスを守る？

無理だ。俺一人じゃアリスを守れない。だって俺、弱い。あの少年が目の前にいるのを想像して、想像上の彼に身体が震え上がるくらい弱っちい。

じゃあヘンデスさんの犯罪を手伝う？　悪いことしちゃう？　盗んじゃう？

前世、空き巣に入られた事があった。独り暮らしを始めたばかりの頃、家に帰ったらそこら中に物が散乱して、通帳が盗まれていた。警察を呼んで、銀行に確認したら全ての金が引き落とされた後だった。真つ当に稼いだ金だった。苦しい思いをしながら、幾度も会社を辞めたくなりながら、それでも必死に、それこそ汗水垂れ流して働いて得た金だった。それが一夜にして失われた。一年後、犯人は見付かった。ただ金が欲しかった、そう犯人は動機を話したという。

真つ当に働けよ、と叫びたくなつた前世の俺。

その犯人と同じところまで墮ちなくてはならないのか？ 何の為に？ 生きる為？ 本当に？ もっと別の手段があるんじゃないのか？ 逃亡生活中だから継続的な仕事は無理かもしれない。でも短期とか。肉体労働だつて別に構わない。何故か前世より筋力がつきやすく、今の俺は普通の大人並には力持ちだ。

大丈夫。まだ、普通<sup>〃</sup>の思考回路が繋がっている。俺は正常だ。そう確認して、やっと一息つけた。身体の震えがゆっくりとおさまっていく。そして漸く周囲の状況を確認する余裕が生まれた。

ごみで溢れかかえつた台所。けれどシンクには水につけられた汚れた食器と、洗って乾かしている食器があり、生活臭がある。誰かがここで生活をしている。やっぱり、その生活を壊すことなんて出来ない。

手をつけず、ただ辺りを見渡す。と、一つ目についたものがあつた。床に無造作に置かれた食材の中、転がったプリン。

母さんがよく作ってくれた。材料費があまりかからず、手早く作れる甘いもの。そういえば、この前の誕生日にも食べたな、と思いついて。その時見たアリスの満面の笑みを最近見ていないと気付く。吸い寄せられるように、手が伸びた。まるでプリンが平和の象徴のように思えて。それを手に入れれば、持ち帰ったらアリスの笑顔が戻ってくるんじゃないか、そんな風に思えて。

欲しいな。

そう、確かに欲望が芽生えた時だつた。

玄関の方からがちゃつと扉が開く音が聞こえて慌てて手を戻す。腰を浮かせて侵入者に備える。

じゃなくて、侵入者は俺の方で。でも俺は、まだ何も盗つてない。んだから悪くなくて。でも盗ろうとか一瞬考えたかもしれない。

そうじゃなくて不法侵入した時点で既に犯罪で。じゃあ一個くらい罪状増えても、プリン一個くらいなら別に、じゃなくて！

混乱してる。どうして良いか全く分からない。早くヘンデスさん戻って来てよと祈るのに、その気配は欠片もない。隠れなくてはと思いつのに、身体がすくんで動かない。そうしている内に乱暴な足音が近付いてくる。そして、音の主は姿を現した。

「あつ？ 何でこんなところに餓鬼がいやがんだ？」

街でよく見る柄の悪そうな男。両手をポケットに入れたまま睨まれる。

「い、ごめんなさいっ」

反射的に出たのは謝罪だった。頭を下げて、ただただ縮こまる。ずっと男が目前に座り込んで、強引に顎を掴まれた。上向かされて、首が痛む。

「殴られたのか？」

存外に優しい声。呆気にとられている内に、男は勝手に話を進める。

「親か？ ひでえ親だなあ。家出でもして来たか？」

俺を殴った親代わりは今頃上で家捜ししてますなんて言える訳がない。結局沈黙を選択した俺の頭を男は乱暴に撫で回して。

「っが」

何の抵抗も出来なかった。ヘンデスさんのいつもの攻撃より数段スピードの劣るそれ。頭を殴られると分かっていたのに。至近距離故か。それまで普通に会話をしていたからか。何の躊躇いもなく、殴られた。

ついで、倒れた身体に追い討ちをかけるように、側頭部を足で踏まれる。耳が、首が、やけつくように痛む。

「勝手に人の家入ってんじゃねえよ、くそ餓鬼が」

「ごめんなさいって謝ったじゃん。何で？ そんなに俺が悪い？ 悪いかもしれないけど、こんな、こんな風に暴力ふるわれる程悪いことした？」

「ああ？ 聞いてますかあ？」

ぐりぐりと汚い床に頭を擦り付けられる。反射的に涙が出て来て、醜く滲んだ視界にプリンが映った。

アリスの笑顔が脳裏に浮かんで、俺が今ここで死んだらアリスは泣くだろうな、なんて考えた。

嫌だよ。死にたくない。こんな所で何も出来ずに死んでいくなんて耐えられない。

「無視してんじゃねえよボケ！」

腹を蹴られて床を滑り飛ばされた。散乱した物に当たって、あちこち痛い。

嫌だ。死ぬ。殺される。

再び迫ってくる男に、そんな恐怖がせりあがってくる。

手が何かを求めて床をさ迷った。手の甲に何か当たる感触。何も考えず、それを握りこみ、立ち上がって、駆けた。

身長差があるから、狙うのは下半身。急所は身体を中心線。一直線にいったらバレバレ。フェイントを入れる。

ヘンデスさんに嫌という程叩き込まれた知識が一気に頭の中を駆け巡る。脳が勝手に身体へと指示を出す。

男の急所、股間を狙い手に握った物を突き出す。一瞬固まった男の身体を通り過ぎ際、横から脛に何かを思いつき振り下ろして。前屈みになった男の後頭部を狙い、手を振り上げ、そして落とす。

ごっつん、と音をさせて男は俯せに倒れた。ぴくりともしない身体。自分の荒い息遣いだけが静かな部屋に響く。

ころ、した？

がくがくと腕が震えた。今頃になって、感触が甦る。殴り付けた瞬間、腕に走った鈍い衝撃。人を殴った、確かな感触。

知らなかった。人がこんな簡単に倒れるなんて。だって、ヘンデスさんは幾ら攻撃しても全て難なく防いでしまうから。だから、全力でいったのに。

俺は、人を、殺したの？

## 悪事2

呆然と男を眺めていた。どのくらい経ったのか、時間感覚が掴めない。

「ルーク」

声がして、身体が大袈裟に反応した。見開いた目に映ったのは、いつもの無表情を張り付けたヘンデスさん。彼の視線が床に倒れた男へと移る。

怒られる。何故かそれを恐れて身体を縮こませた。

無言のままヘンデスさんは男の傍に跪き、その頭を無造作に持ち上げる。

「息があるな」

その台詞に、どれだけ安堵した事だろう。

卑怯だけど、問答無用で攻撃しておいて自分でもどうかと思うけれど。死んでいない、それだけで全てが解決してしまったような安心感が訪れた。

「良かった」

た、と口の中で言葉が消える。

今目にした光景が信じられなかった。

無造作に、まるで人形の首を捻るように、ヘンデスさんは男の首をねじ曲げて、そのまま床に投げ捨てた。

ひくひくと痙攣したように男の身体が跳ねている。首が、有り得ない方向を向いている。

「な、んで」

何で殺したの？ 生きていたのに。ヘンデスさんがその生を認めたのに。だから、俺は安心して。

「顔を見られた」

それが、殺した理由？ それだけで？ 俺が顔を見られたから？ 俺のせい？ 俺のせいで彼は殺された？

今日のヘンデスさんは、訳の分からない発言ばかりする。説明せずに次々行動するから、俺は置いてけぼりだ。

「随分手酷くやられたな」

すつと頭に手を乗せられ、反射的に跳ね退けた。嫌だった。人殺しの手。そんな事を考えてしまった。

「血が出てる」

それが、何？ だから、何？

「何で殺したの？」

再び問いかける。さっきの理由じゃ納得出来ない。もっとマシな理由を寄越せと、睨み付ける。

ヘンデスさんはちょっと困ったように頭を傾けた。

「手当てをしたいんだが」

「答えるよ！」

「うるせえ黙れ！」

一喝され、びくりと震えた。怒気に身体がすくむ。もう何がなんだか分からない。生理的な涙が出て来て、拭った手を見たら赤くぬめっていてまた身体が震えた。恐る恐る頭に手を伸ばせば、右側頭部に傷ができていて、当たった瞬間ずきりと痛む。

怪我をしていたのを身体が思い出したかのように、今まで何で痛まなかったのか不思議なくらい、意識したら断続的に痛みが襲ってきた。

「痛い」

ぼつりと漏らせば、あからさまに溜め息を吐かれ、何処から取り出したのか包帯を巻かれた。

その間も視線は吸い寄せられたように、死んだ男から離れない。

「手、離せ」

言われて初めて左手を見た。しっかりと、持てる限りの力で握っていたそれは、麵棒だった。

男を殴った凶器。

途端に恐ろしくなり、放り出す。からん、と間抜けな音を立てて麵棒は床を転がっていった。それを目で追えば、視界にある物が映る。

「プリンが」

衝動的に口にした。

「プリンがあつたんだ。それで、その人が帰って来て、家出かつて聞かれて、殴られて、蹴られて」

怪我を負った経緯を説明したいのか、攻撃を加えるに至った理由を正当化したいのか、自分でも分からなかった。

ヘンデスさんは一つ頷き、プリンを拾いあげる。それを手渡された。

「アリスが喜ぶ。良い兄貴だな」

違う。そんな事を言われたいんじゃない。褒められたい訳じゃない。

血がだらだら流れて貧血になっているのか。思考が纏まってくれない。

「盗んじゃ駄目だよ」

殺しちゃ駄目だよ、とは言えなかった。だって、もう死んでるから。もう遅い。

「行くぞ」

無視された。

それ以上、抗うことが出来なくて。死体を置き去りに、ヘンデスさんに付き従う。

家を出てから、気付いてしまった。プリンを手にしたままである

という事実には。置きに戻ろうか少し迷う。

それを見透かしたようにヘンデスさんが口を開いた。

「盗みは嫌か？」

こくりと頷く。

「殺しは嫌か？」

嫌とかそういう感情以前の問題なんだけれど。言ってみるとは思わなかった。

だって、慣れてた。ヘンデスさんは殺しに慣れている。それがありと分かる、流れるような躊躇ない手付きで首の骨を折っていた。

「自首とかした方が良いんじゃない。俺が殺したようなものだし」

罪は償わなければ。そうでないと、母さんに申し訳が立たない。アリスの元へも帰れない。

そう、感じたのに。

「自首、か」

ヘンデスさんは一拍置いて続けた。

「刑期は何年になるか。五百年はいくかもな」

だから、俺の知ってる言葉で喋ってよ。意味が分からない。

「俺は、盗人だ」

そう、なんだろうね。侵入にも手慣れてた。

「人も沢山殺した。数なんて一々数えてない」

知りたくなかったよ、そんな事実。

「真つ当な職には付けない。俺は、こういう方法しか金を稼ぐ手段を知らない」

言い訳としか思えなかった。悪い事をしなくては生きていけない、なんて怠慢だ。楽な方楽な方へと流されて生きてきた当然の結果だ。きちんと罪を償って、そしたら社会復帰する機会があるはずなのに。

「俺が普通に、まともな生活を送れて、自分も人間だと実感出来たのはゾルディックの使用人になってからだっただけ」

それって悪い奴らで集まって、ちんけな仲間意識を持ってただけなんじゃないの？

ささくれだつた心が無意識に毒を吐く。

だって、理解出来ないんだ。したくないんだ。そんな理由で殺しを肯定なんて出来やしない。

「あいつも、それを分かっていたはずなんだがな。何で俺なんかに子供託したんだか」

独り言のような響きだったけれど、父親の事を言っているのだとすぐに分かった。

俺も同感だ。顔を見たこともない父親を恨みたくなくなってくる。何であんたは呆気なく死んじゃって、今俺達を守ってくれないんだ、

と。

「何を、約束したの？」

ちよつとした興味だった。父親が、何を残したかったのか。平和ボケした事だったら呪ってやる。そんな詮ない事を考えた。

「アンに、夢を。子供には、生を」

短い言葉だった。

そんな、そんな。

その後どんな感情がくるのか自分でも把握出来なかった。ただ、やるせなさだけを理解する。

母さんは、夢を見れたのかな？ 平和な、死とは縁遠い生活を、満喫できたのかな？ 真実を覆い隠し、家族三人で笑顔に包まれた暮らしを送って、あれで満足だったのかな？

「アンは、あれで幸せだった。お前達より先に死ねた」

それは、幸せだと言えるの？

「あとはお前達を守り、自分達で生き抜く術を教える。それが俺に残された約束だ」

だからさ、父親人選間違っただって、絶対。犯罪行為教えられても困る。

「普通で、平穏な暮らしは？」

約束に入っていないの？

「それはアンの夢だ。あいつの方が現実を見ていた」

夢、なのかな。実現不可能な虚像なのかな。

「アリスにも、夢を与える事は出来ない？」

出来ると言って欲しかった。母さんからは夢を、父親からは生を、アリスにだけで構わないから与えて欲しかった。

「お前次第だ、ルーク」

結局そこに行き着くんだ。

「俺は務所には入らない。そんな事したら一生出られない。約束を守れない。お前は自首するか？ ルーク。そしたら俺はアリスに現実を教え込むまでだ」

駄目だよ。アリスには夢を与えなきゃ。

「俺」

決断を迫られている。夢見る子供でいるか、厳しい現実に対峙しなければならぬ大人になるか。

ふうと息を吐く。

酷いよな、本当。なんでろくな選択肢がないんだろう。

楽な方に流されようとしていないか、自分。後悔しないか、自分。確認して泣きたくなる。答える前から後悔してるし、何かに喚き散らしたい気分だ。

それでも、悔しいけれど、認めたくないけれど、今の無力な俺にはヘンデスさんが必要なんだ。

「殺しは嫌だから」

せめてもの境界線を引く。自分の中で最低限のライン。

「盗むのも、必要最低限しか駄目だから」

そんな事、被害者にとっては関係ないだろうけど。それでも主張したかった。

「ヘンデスさん。俺、いつかさ、アリスが一人で生きていけるようになったら自首するよ」

犯罪は犯罪だ。それを俺自身に、そしてヘンデスさんに確認したかった。

「好きにしる」

それが答え。ヘンデスさんの背を真っ直ぐ見据える。ゆらゆら揺れる大きな手を見ても、すがりたいとは欠片も思えなかった。

「お帰り！」

家に帰れば、元気な声に迎えられる。ぱたぱたと勢いの良い足音が近付いてくる。

たったそれだけの事で安心してしまって、ついさっき人の死に直面したというのにもう和んでいる自分が嫌になる。

けれど、そんな沈鬱な気分もアリスの叫び声で散らされてしまっ  
た。

「あー！」

大音響と共に指さされたのは、俺。俺？

「ほっぺはれてる！ しかも包帯！ 血！ どうしたの？ そのの  
男に虐められたの？」

そういえば、と自分の格好に思い至った。

ヘンデスさんに殴られた頬は醜く腫れているだろうし、汚い床に  
転がされたから服も酷い有り様、極めつけに頭に巻かれた包帯には  
血が滲んでいる。

どうしよう、と朦朧する頭を必死で働かせた。

「訓練、してた」

横にいるヘンデスさんにじとりと睨まれる気配。罪をなすりつけ  
てごめんなさい、と小さく心の中で謝っておく。

でも頬はヘンデスさんだから丸つきり嘘って訳でもない。アリス  
に睨まれて怒鳴られるくらい、我慢してよ。

「馬鹿！ お兄ちゃんに何してんのよ！ このきちく！ 鬼！ ふ  
ぬけ野郎！」

「アリス」

止めたのは、ヘンデスさんへの罪悪感が原因ではない。

「何処で覚えたの？ そんな言葉」

俺は決して教えていない。断言出来る。もしかやヘンデスさん？  
横目で睨み付けければ、軽く首を横に振られた。

アリスは唇を尖らせながら言い訳を口にする。

「窓の外から色々聞こえるんだもん。私のせいじゃないもん」

思わず舌打ちした。治安の悪さがこんなところに影響を及ぼすとは。俺の可愛い妹が不良になったらどうしてくれるんだ。

憤りを覚えて、それから。

何でだろうな。泣きたくなった。

些細な会話。家族が非行に走るんじゃないかと心配する。そんな本当に些細な、ある意味で平和なやり取りが身近にあるのに、何処か遠くに感じられて。それはきつと俺が遠くにいつちやったからで、それでもアリスは、アリスといる時だけは、`普通`でいたいと叫ぶ自分を、許して良いのか分からなかった。

「お兄ちゃん？」

黙ってたら、心配かける。何か、何でも良い。言葉、出て来い。

「怒った？」

怒ってないよ。伝える為に首を振る。一緒に戸惑いを振り払う。

「今日一日良い子でお留守番してたアリスにご褒美があるんだ」

につこり、薄っぺらい笑みを浮かべた。きつと成功した。震えそ  
うな手に力を入れて、差し出す。

「わあ！ プリンだ！」

輝くような満面の笑み。どうしても見たかったはずのそれを目にして、けれど不思議と嬉しさよりも罪悪感の方が勝っていた。

母さん。ごめんなさい。ごめんなさい。

今日俺は悪い子になりました。

アリスは、アリスだけは、良い子のまま守るから許して下さい。ただそう祈る事だけが、残された救いのように思えた。

## 念能力

あの日から、初めて泥棒と他人の死を経験した日から、ヘンデスさんは時折俺を連れ出すようになった。目的は勿論泥棒。

人が外出中の家の探し方、家への侵入の仕方、金目の物の探し方、必要な手法を着々と教わっている。今のところ誰にもかち合っていないから、あれ以来殺しはしていない。ただ、感情を凍らせて淡々と作業をこなすように、盗みという行為を日常の一コマとして受け入れられるようになってしまった。

そして訓練の方も少し変わった。

体力が付いてきたアリスに対しては、それまで俺がやっていたようにひたすら攻撃する訓練。アリスはヘンデスさんに対する日頃の鬱憤を晴らすように、非常に張り切って攻撃を加えている。そして一発も入れられなかったと泣きつくアリスを慰めるのも日課になった。

そして俺は、日に日に増える重しを付けて日常生活を送るようになり、そして訓練の方は本格的なものに移った。

加減はしているのだろうが、それでも容赦なく攻撃され、それを必死で防ぎ、わざと作られたであろう隙をみて攻撃する。怪我が今までと段違いに増えて、アリスの手当の腕がめきめきと上がったのは、良い事に入るのかもしれない。

そんな生活が三ヶ月過ぎ、アリスとの交換日記にすっかりスラングが馴染んでしまった頃、俺だけがヘンデスさんに呼ばれた。

「今日からは新しい訓練に入る」

最近、ひどく冷めた目でヘンデスさんを見る自分がいる。悪い人、そんな嫌悪感がどうしても沸き上がって、素直に慕えない。だから、そう言われてもあまり動じなかった。盗みを強いられて、殺しを見せられて、それ以上の苦痛があるとは思えなかった。

「念を知ってるか？」

首を振る。

ヘンデスさんは頷き、おもむろに手を持ち上げた。その手に握られていたのは銃。流石に身体が硬直する。銃口は下を向いているけど、嫌な予感。

耳障りな発砲音と共に床に銃弾がめり込む。

アリスは走り込みの為、外にいる。もし家にいたら、真っ先に飛び込んでくるだろうな、と考えた。外に出てくれて良かったな、って考えた。でもあんまり遠くに行かなくても困るな、って考えた。現実逃避。自分の頭で処理出来ない事が起こると、アリスの事を考える癖がついている。

「よく見ている」

突然の発砲に驚いて硬直している身体は諦めて、眼球だけの動きでヘンデスさんを追う。

ヘンデスさんは数歩後退り、次の瞬間。

「これが俺の念能力だ」

俺の目の前に現れた。ちょうど、銃弾がめり込んでいた位置。

「瞬間移動？」

超能力としか思えなかった。啞然と見上げる俺に、ヘンデスさんは重々しく頷く。

「簡単に言えばそうだな。念を込めた弾の場所に移動出来る。色々制約はあるんだが」

思わず眉をしかめた。よく分からないけれど、そんな凄い力を持つていて、それを悪いことにしか生かせないなんて。もっと、世の中の為になる事をすれば良いのに。言っても意味ないだろうから、口には出さないけれど。

「念を覚えればお前も特別な力を使えるようになる」

無意識に反抗したくなる。力を持っていても悪い事にしか使えないなら、そんな力欲しくない。そう思ってしまう。

「それ、覚えなきゃ駄目？」

「お前は強くなりたいたいんじゃないのか？」

なりたいたいよ。なりたいたいんだけど、このままヘンデスさんに全てを任せて良いのだろうか、という迷いが生まれている。

「アリスを守りたいんじゃないかったか？」

的を射た台詞に嫌になる。産まれた時から一緒に過ごしたせいか、ヘンデスさんは俺を動かす言葉を知り尽くしている。俺には自分の事をあまり見せないくせに。

思い通りに話が進むのが嫌で、せめてもの反抗で黙っていれば、溜め息が耳に入った。

「あの少年は」

誰の事だろう。興味を惹かれてしまい、顔を上げる。

「恐らく今念を取得している最中だ。次来る時は念を完全にものにしてるだろう。お前は今のままで念を覚えたゾルディックからアリスを、自分を守れるのか？」

ゾルディック。記憶を刺激される。動かない母さんが、母さんの心臓が、脳裏に浮かび、視界が怒りで真っ赤に染まる。何も出来なかった悔しさを唇を噛み締めて堪える。

「いつまで俺達は安全なの？」

アリスが一人で外で走り込むのを、必死で反対した。ヘンデスさんの今は大丈夫、に渋々納得した。その真意を知り、沸き上がるのは不安。

あの少年が更に強くなって現れるのは、一体何時？ あの日から既に半年が経とうとしている。

「精々あと半年だろうな」

それがリミット。それまでに、対抗出来る強さを身に付けなくてはならない。焦りが生まれる。絶対に無理だと弱気になる。

けれど、やらなくては。無力感を噛み締めるのはまだ早い。そう思ったかった。

「やる」

ヘンデスさんの思い通りになるのはすっごく嫌だけれど。不信感

は拭い切れてやいないけれど。

ヘンデスさんの言う通りにやれば強くなる。それだけは確か。

「よし、そこに立て」

訓練の為だけに使われる部屋。何も無い、至る所についた壁の傷だけが特徴的な部屋の中央に立ち尽くす。ヘンデスさんが後ろに立つ気配。

「死ぬなよ」

不吉な言葉と共に、今までの訓練なんて比較にならない程の圧迫感が背中を覆った。

触れられた感覚はない。それなのに衝撃が走ったことに驚いて、思わず座り込む。全身から力が抜けていく。呼吸の仕方が分からない。今まででどうやって息を吸い、四肢を動かしていたのか、思い出せない。

「身体から流れ出ているものに集中しろ。それがオーラだ。身体に留める」

簡単に言わないでよ。

喘ぎながら、いつの間にか固く閉じていた瞼をゆっくり上げる。うつすら開けた視界に、もやが映った。身体中を覆い尽くすそれが、勢いよく身体を離れ、空に溶けていく。

これがオーラ？ 留めるってどうやって？

朦朧とした思考で、死ぬな、と直感した。このもやもやが出尽くしたら、俺は死ぬ。

嫌だ。死にたくない。助けて。誰か、助けてよ。必死にヘンデスさんを見上げて手を伸ばす。

「死にたくなければ、やれ」

鋭い目付き。突き放されたと感じてしまう。

きつと心の片隅で期待していた。本当にヤバくなったらヘンデスさんが助けてくれる。あの少年から救ってくれたように。その期待を、呆気なく裏切られる。世の中こんなもんか、と諦めが支配する。

「力むな。自然体だ」

それでも、かけられた声に安心した。まだ見放されていない、そんな事を思ってしまう。必死にその声に従おうと足掻いてしまう。

そんな努力を嘲笑うかのように身体中に力が入らない。自然体がどんな体勢かも思いつかない。

益々身体を縮こませて両膝を胸に抱き込む。横たわったままの体育座り。これが一番良い体勢である気がした。小さくなれば、もやの出も小さくなる気がした。

「死にたいのか！」

強引に手足を引き摺られる。抵抗したくとも四肢に力が入らない。再び縮こまるうにも上手くいかない。結局落ち着いたのは仰向けの体勢だった。

空気に触れる面が増え、恐怖が増す。少し視線を足の方にやれば、全身からもやが出ているのを直視してしまう。

「イメージしろ。血管のように全身をオーラが巡っている。それを留めるんだ」

ゆっくりと目を瞑った。諦め半分の行為。けれど、視界を閉ざし

たことで集中力を取り戻せた気がした。音も消える。自分一人が小さな閉ざされた世界にいる。めまぐるしい力の渦に、飲み込まれようとしている自分が脳裏に浮かぶ。

深く、深く息を吐き出した。大丈夫。俺は出来る。言い聞かせて自己暗示。前世、社会人だった時、イメージトレーニングを習った。なりたい自分を想像する。そうなれると自分で思い込む。やれると思えなきゃ、絶対やれない。そんな教えが今更浮かんできて、しかも無意識に思い浮かんだ、なりたい自分のイメージに、泣きたくなる。

大きな背中。悠然と立つ後ろ姿。何があってもどっしりと構え、動じない大人の男。

俺にとつての強さの象徴は、ヘンデスさんなんだな。盗みも殺しも平然とこなす、悪の権化。決して慕ってはいないと断言出来るのに。あんな大人になりたくないと思っ強く思うのに。

イメージする。安定感のある後ろ姿。四肢から力を抜く。今度は上手くいった。呼吸が楽になる。自然体の意味を、漸く身体で理解する。そしたら身体中から吹き出るもやを感覚で捉えることで出来た。これを、留める。鎧をイメージする。もやで出来た鎧。鎧で守られているから大丈夫。そう信じれば、不思議ともやの流れがゆっくりになった気がした。

それからどれ程の時間が経っただろう。短かった気もするし、長かった気もする。ただ、全身疲れきっていた。

「よくやったな」

声に反応して薄目を開けた。汗で濡れた前髪に視界を邪魔される。すつと前髪が横に流された。額に大きく暖かな掌が当てられているのを感じ、身体が強張る。それが伝わったのだらう。何事もなかったかのようにヘンデスさんの掌は離れていった。空気に触れた、

何も覆われていない額を物足りないと感じた自分が嫌になる。

「人は誰もオーラをまとっている。オーラの吹き出る孔、精孔が閉じている状態だな。今、お前はその精孔を開いた状態だ。身体の周りにオーラを留める、この状態を纏てんという。これが出来ずにオーラを全て出し尽くせば死ぬ」

ほら、言ってる事酷いじゃん。訳が分からず死ぬ可能性だってあった訳だし。

そう自分に言い聞かせる。ヘンデスさんに心を許すなと警戒心を奮い立たせる。

「一日で纏が出来れば大したものだ。ルーク、お前には才能があるな」

初めてだった。この逃亡生活が始まって、厳しい訓練を受けて、未だに俺はヘンデスさんに攻撃さえ儘ならない状態で、一度も褒められた事なんてなかったのに。

初めて褒められて、嬉しいと心踊る自分がいる。せめてもの意地で視界を閉ざしたけれど、頬が勝手に緩んでしまうのを止められなかった。

## 危うさの片鱗

精神集中。座禅を組み、背筋を伸ばす。身体の周りにオーラを留めるイメージ。頭で考えなくても、最近は身体が覚えたのか自然に纏を出来るようになってきた。

横で身動きする気配に、視線を向ける。

「アリス」

「つまんない」

狭い室内、小さな声でも意外と響く。ヘンデスさんがいる部屋に続く扉に視線をやって、来る気配がない事を確認してからアリスに向き直った。

「ほら、アリス。前の時、奈良とかに行った事なかったか？ その時見たでっかい大仏の真似っこだよ」

必死に説得するには訳がある。あの後ヘンデスさんは身体がもう少し出来上がればアリスの精孔もこじ開けると主張した。でも、領ける訳がない。あんな、死ぬかもしれない方法をアリスに試すなんて冗談じゃない。他に方法はないのかと詰め寄り、渋るヘンデスさんから無理矢理聞き出したのがこの瞑想。座禅でも何でも良い。ひたすら精神を集中し、身体から流れるオーラを感じ取り、ゆっくり精孔を開けていく。

正直そんな方法があるんなら、あんな苦しい思いさせるなよ、とも思った。だが、時間制限がある。あの少年がいつ再び現れるか分からない。そう告げられればそれ以上強くは言えず。ただ、アリス

だけはと頼みこんだ。アリスの強さは程々で良い。その分俺が強くなれば良い。そう宣言したから、俺が今身に付けている重しは50kgに増えたし、全身筋肉痛だし、訓練中も両腕両脚に10kg重し付けられたまま攻撃防御しなきゃいけないし、色々段違いに辛い生活だけど、何とか頑張っている。悪い事をする訳でもない。アリスの為だ。そう考えれば、頑張れる。

とはいっても、アリスもオーラを感じられるようになり念を覚えて欲しいのは、俺もヘンデスさんと同じ。無理はさせたくないけれど、強くなって欲しいんだ。矛盾した思い。だけど、死んで欲しくない。

「ナラなんて知らないもん。お兄ちゃんに前言ったの覚えてないの？ 私、前の時はトーキョーにいたんだよ？」

拗ねたように唇を尖らせるアリス。可愛らしいその姿にそうだな、と同意するしかなかった。

「前の時」、アリスは前世をそう呼んでいる。そして、未だに全てを思い出す気配はない。多分修学旅行か何かで京都と奈良辺りに行っていると思うが、その響きに聞き覚えはないようだ。もしかしたら前世ではその年齢に達していなかったのかもしれない。

「折角お兄ちゃんと一緒なんだもん。お話しよ？」

膝でにじり寄ってくるアリスを、拒否したくない。最近とみにアリスと一緒に時間が減ったから。訓練は基本別メニュー。シャワーはアリスが恥ずかしくて一緒に入ってくれなくなった。ご飯の時はヘンデスさんがいるから二人きりではない。未だに交換日記は続けているが、このすれ違い生活への不満は募るばかりなのだろう。そこに一日二時間の座禅の時間。アリスが食い付く訳だ。

「仕方ないな。じゃあちよつとだけ」

な、と続くはずだった音は扉を開く音にかき消された。

「真面目にやれ」

溜め息を隠して振り返れば、誤魔化しの効かない硬直な視線で射抜かれていた。

「はい」

むっつりと頬を膨らませたアリスの分も答える。頭をそつと撫で、戻ろうと促せば、渋々従ってくれた。

ヘンデスさんは扉の前に立ち、動く気配はない。このまま見張るつもりなのだろう。

「アリス、コツは掴めたか？」

「わかんないよ。オーラを感じ取れとか頭おかしいんじゃないの」

ヘンデスさんに向けたアリスの率直な言葉が俺の胸に突き刺さった。

そうだよな、オーラとか頭おかしいよな。俺も前世でそんな事言われたら怪しい宗教勧誘を疑っていたと思う。が、残念ながら精孔をこじ開けられてから見えるようになってしまったのだ。ヘンデスさんのいうオーラが。

ヘンデスさんが身に纏うオーラは洗練されていて揺るがない。見ている気持ち良いくらいだ。そしてアリスのオーラは言葉通り垂れ流し状態。座禅を開始した直後は集中しているせいか少しオーラの出が規則的になり、流れが心持ち綺麗になる、気がする。そして今は全く集中出来ないのか、身を流れるオーラは勢いが良くなっ

たりゆつくりになつたりと随分乱れている。気が散っているのだから。

本当にこのオーラって厄介だ。今まで見えなかった事が見えてくる。他人の状況を把握出来てしまう。今後、ゾルディックから逃げることが出来たとして、その後アリスはどんな職業に付くのだろう。目前の脅威があまりにも大き過ぎて未だ将来は具体的には見えて来ない。だが、普通、の、オーラが見えない人々に混じった生活を送る事が出来るのだろうか。

見えないものが見える。それは異質なものとして他人の目に映ってしまう。前世、幽霊が見えるとか言い出すクラスメートがいたが、俺は当時何言ってるんだよこいつ、と内心で嘲っていた。それと同じ状況に、アリスが置かれるのだと思うと不安でならない。隠せば良い？ けれど、一生隠し続けるなんて相当の負担になるのではないだろうか。

そしてもう一つ。直接的であり致命的な不安。精孔を開き、オーラを身体に留める纏という状態。これだけで、普通、の人には脅威だ。俺は鎧をイメージしたけれど、鎧なんてものじゃない。この前ヘンデスさんに廃屋に連れて行かれて壁を殴ってみた。軽く、という注文があつたので本当に軽く、ちよつと叩くくらいの力加減でそれでも壁にひびが入った。もし全力で殴っていたら壁が崩れたことは楽に想像出来る。オーラを纏うとは、それ程の力があるのだ。そんな状態で、普通、の人々に混じり日常生活を送る事は果たして可能なのか？

不安をあげればきりが無い。だからこそ、普段はそれに目を瞑っている。今は夢を見る段階ではない。厳しい現実を生き抜く事が最優先だから。

「つべこべ言わずにやれ、アリス。ルークも集中しろ」

ヘンデスさんの声で現実に戻された。集中、集中と。再び

オーラに意識を傾ける。俺の纏はヘンデスさんに言わせればまだ未熟らしい。こうして座禅の時間を設けること一ヶ月。少しずつ良くなってはいるみたいだが、どうなんだろうな。自分ではよく分からない。

集中していけば、時間が経つのを忘れてしまう。三十分くらい経った頃だろうか。うなじにちりつとした感覚が走り、産毛が逆立った。反射的に身体が動いたのは奇跡としか言い様がない。横で座禅を組んでいたアリスの方へと伸ばした腕に、焼けつくような痛み。遅れて視覚がそれを捉えた。腕に突き刺さったナイフ。

「ふえ？」

空気が流れが変わった事に気付いたアリスが声を上げる。居眠りしていたのか、気の抜けた声だった。

流れ出る血を、突き刺さったナイフを、アリスの視界から隠すように身に引き寄せてヘンデスさんを睨み付ける。

「何で？」

アリスに悟られないよう短くした疑問。ヘンデスさんはその続きが分かっているはずだ。

「真剣味が足りていない」

アリスに向けて真っ直ぐ投げられたナイフ。そこに込められていたのは警告。居眠りしてしまったアリスへの注意。分かるけどさ、目的は理解出来るんだけどさ、その手段はいただけない。

「ここまでする事？」

「あー！」

アリスが気付いてしまった。顔面から血の気が引いている。泣きそうに顔を歪めて、でも泣き出す前にアリスはさっと動き出した。

「ごめんなさい！ まだ抜かないで！ そのまま待ってて！」

素早く立ち上がり、部屋の隅に常備されている応急セットを手に帰ってきた。すぐ横に座り込み、気を遣ってか優しい手つきで腕を取られる。

「太い血管は無事だから。大丈夫だよな？ 抜くからな」

ヘンデスさんに確認してからアリスは必死に、それこそアリスが怪我したみたいに歯を食い縛りながらナイフを抜いた。

抜いた瞬間激痛が走ったけれど、何とか唇を噛み締めて堪える。血が出たのか口の中でどろっと嫌な味が広がった。

その間もアリスは血が自分の服に付くのを気にも止めず、ちょうど怪我をしたところに包帯を巻き付けて止血をする。そこまでやって安心したのか、涙がぼろぼろ溢れ落ちて血の滲んだ包帯に落下した。

「ごめんね、お兄ちゃん。私のせいで」

いつもならヘンデスさんに真つ先にくらいつく場面で、けれどアリスが口に出したのは謝罪だった。アリスを庇って怪我するんなら俺にとって何でもない事なのに。痛みはあるけど怒りはない。

「大丈夫だよ、アリス。このくらいならすぐ治る」

怪我を負っていない左手で涙をすくいあげる。涙はまだ止まる気配を見せなかつたけれど、くすぐったそうに小さく笑みをみせたアリスに安心する。

「これで懲りたなら今後は集中するんだな」

低い声にその存在を思い出した。

「ヘンデスさん」

唸るような低い声が勝手に飛び出す。

「ナイフなんて危ない物今度から使わないで」

「あの少年が飛び道具を使わない保証があるのか？」

ぐっと詰まる。正論過ぎたから。曖昧な記憶の中、残っている。

ヘンデスさんが助けてくれた時、最後何かが俺目掛けて飛んできて死んだと思った。ヘンデスさんが助けてくれなきゃきっと死んでた。

「誰のこと？」

不意を突かれ、弾かれたようにアリスを見た。突き刺さるのは、不審そうな視線。

「ねえ。二人とも私に隠し事してるよね？」

薄々察しているだろうな、とは思っていた。アリスは馬鹿ではない。歳相応の思考力がある。おかしいと思われる点はいくらでもあった。逃亡生活であるのと定期的に盗みを働いているから、以前より引越しの回数は多い。それにどんどん厳しさを増す訓練。何を

目的に強くなるのか、アリスには知らせていない。

「ああ。隠し事は沢山ある」

アリスの疑問に答えたのはヘンデスさんだった。何を言い出すのかと警戒する。

そんな俺に構わず、ヘンデスさんはアリスを真っ直ぐ見詰めて悠然と言い放った。

「だが約束だからお前には秘密だ」

約束。アリスには夢を。それを、ヘンデスさんは守ってくれた。

「だが、そうだな。オーラを感じ取れるようになれば、教えてやらなくもない」

「何それ！ ひどい！ おうぼう！」

「集中出来なきゃまたナイフを投げる。そしたらまたルークが庇う。アリス、お前はそれで良いのか？」

巧みに話の論点をずらすヘンデスさんに、アリスはすっかりのせられた。意気消沈して俺の腕を眺めて、それからぼつりともらす。

「ちゃんとやるもん」

話を反らしてくれた事は有難いんだけどさ、へこむアリスは見たくない。

「気にするな、アリス。俺の訓練にもなるから」

それでもアリスの顔色は晴れず、そして次の日この台詞を後悔す

る事となった。

見事、不意を突いたナイフ投げが訓練メニューに仲間入り。日常生活も気の抜けない時間となってしまうた。日常

## 武器と念談義

ナイフ投げが訓練に追加され、生傷が絶えない生活を経て一ヶ月。なんと投げられたナイフを弾く事が出来るようになった。

ヘンデスさん曰く、投げられたナイフはヘンデスさんのオーラで覆われていたらしい。そしてそのナイフを弾いた時、俺はオーラを手に集中させていた、らしい。身体中のオーラを集めたおかげで厚くなったオーラが、ヘンデスさんがナイフに籠めたオーラに勝った、と。決して意識してやった訳ではない。だが、条件反射が身に付いてしまったのか、それからは楽にナイフを弾き返せるようになった。

最近自分がどんどん強くなっていくのを如実に実感出来る。未だヘンデスさんには勝てないけれど、一つ一つ与えられた課題をこなす度に強くなっていくのが分かるのは正直面白い。前世ではあまり縁がなかったが、筋トレマニアや格闘技にのめり込む奴の気持ち可以理解出来てしまう。やればやるだけ力が付くなんて知らなかった。

そして、そんな自分が少し怖くなった。今や500kgの重しを付けた状態で走れてしまう。もし何かにこけてアリスを下敷きにしたら、怪我じゃ済まないかもしれない。

また、刃物への恐怖が薄れている。この前アリスがナイフで林檎の皮を剥いているのを眺めていた時だ。包丁としてナイフを使っているな、とぼんやり考えて、いつもは、なんて考えてしまっただ。そこで初めて武器としてナイフを使う事を無意識に受け入れていた事に気付いて、愕然とした。前世では刃物なんて包丁かはさみ、時々カッターくらいしか使用しなかったのに。

それに、攻撃を加える事にも躊躇しない自分がいる。壁にひびが入る程の威力を持った拳を遠慮なくヘンデスさんに向けている。ヘンデスさんは難なく防いでくれているけど、もし相手が一般人だっ

たら？ もし今泥棒に入った家で誰かと出くわして、俺は絶対にその人へ攻撃しないと誓える？

初めて盗みを経験したあの時今の力を持っていなくて良かったと心底思う。もし持っていたら、あの人は確実に俺が殺していた。最終的にヘンデスさんが殺したから俺に罪がないなんて口が裂けても言えない。だけど、自分の手で殺していないという事実が、俺を正気に引き留めているのは確かだ。

そして、今日。ヘンデスさんは新たな強さを俺に提示した。

「そろそろお前も自分の武器を持って良い頃だな」

武器。その単語が即座に頭で変換される。きっとそれは凶器だ。誰かを傷付けるもの。

「ナイフはどうだ？」

手渡されたそれを、手の内で弄ぶ。少し前から予兆はあった。ナイフや銃の手入れを教え込まれたから。きっと近い内にこんな日が来る、と。予想はしていたけれど、溜め息を吐きたくなる。

ずっと考えていた。俺に相応しい凶器は何だろう。銃は、嫌だ。引き金一つで簡単に人の命を奪ってしまう。自分から離れた銃弾が、相手にめり込むのを見ていれば良い。必要なのは照準を合わせる目と腕、それから引き金を引いた時の反動に耐えること。性に合わないと考えてしまう。もっと自分がやったのだと、直接的に実感出来る凶器の方がより罪悪感を覚える事が出来るから。

ナイフは？ 考えて、やっぱり否定した。俺が覚えておきたい記憶と結び付く、あれが良い気がした。俺の罪の象徴。初めて手にした凶器。

「鈍器、みたいなのが良い。もしくは棒とか」

流石に麵棒というのは躊躇われて、曖昧に言葉を濁す。ただ、覚えておきたかった。あの時手に走った鈍い衝撃。後頭部を殴り付けたあの一撃が致命傷になっていてもおかしくなかった。

「分かった」

あっさりと頷いたヘンデスさんがどんな感想を持ったかは分からなかったけれど、何も問われなかった事に安堵した。わざわざ記憶と結び付けた凶器にしないと罪悪感が薄れ行くかもしれないという危機感を抱いているなんて知られなくなかったから。

次の日、ヘンデスさんから渡されたのは棒だった。長さ1m程で少し太めの黒い棒。太さは何とか握れるから今後を考えると丁度良いのだが。

「これ、何kg?」

「重過ぎる。持ち上げられない。」

「1トンだ」

涼しい顔で言われ、愕然とする。ついさっきまで付けられていた重しは全部で500kg。これで動けただけでも充分人外だと思っただけなのに、ヘンデスさんの求める基準は人外を越えている。

「それ、武器として使えるの?」

確かに振り上げて落とすだけで随分な威力を持つだろう。だが、

持てればの話だ。

不審気に問いかける俺を他所にヘンデスさんは軽々と棒を持ち上げた。そのままくるっと回し、脇に差し入れて構える。

「う、そだ」

1トンだ。その重さを感じさせない流れるような動きだった。

「今、念使った？」

信じられない事を全て解決してくれそうな念を持ち出してみるのが、ヘンデスさんは呆れたように息を吐いた。

「これくらい念を使わずに誰でも出来る」

「出来ないって」

誰でもって無茶苦茶過ぎる。

「ゾルディック家の入り口は片方2トン計4トンの扉だ。これを開けられなければ使用人にはなれない」

ゾルディック基準の誰でもだった。今更ながら、ゾルディックの危険性を実感する。使用人でそれだけなら、ゾルディック家の人はどれだけ強いんだ。訓練を始めて、少しずつ強くなって、初めてその強さの程を実感する。背筋が凍りつく。

「これくらい、あの子なら軽々扱えるってこと？」

「一年前の状態でな」

拳を握り締めた。あからさまな強さの違いを見せ付けられ、身震

いする。念を覚えて、少し追い付いたと思った。それを勘違いだと思ひ知らされる。まだまだ遠い。その背が見えない程に。

「二週間で持てるようになる」

決意を口にする事で、怖じ気付く自分を必死に鼓舞した。

「一週間だ。構え方までマスターしろ」

より厳しいゴールに、けれど反論する気は起きない。それくらい出来なきゃ、アリスどころか自分さえ守れない。それが分かってしまった。

結局1トンの棒を持ち上げて二本の腕で構えられるようになるのに十日を要した。駄目な子を見る視線が痛かった。

それからまずは日常生活を棒を背負いながら送ることになり、また暇な時もいじくっているよう指示された。手の内で一回転させたり掌に乗せてバランスを取ってみたり。横で見ていたアリスが自分もやりたいと言いつ出したが、持ち上げる事すら出来なかつたので断念。良かった。強くなって欲しいけれど、1トンを軽く持ち上げる妹は見たくない。

それからヘンデスさんに教わり、ちよつとずつ棒術には慣れてきたのだが、念修行の方は行き詰まりをみせている。纏は合格点を貰えた。その次の段階。身体の内でもオーラを練り、一気に精孔を開いて外に出す練が上手く出来ない。オーラを練っている途中にどうしても精孔が開いて少しづつオーラが外に漏れてしまう。その状態で溜めたオーラを一気に外に出しても勢いが足りなくなる。練るのが遅くて溜めが長過ぎる、と言われた。ナイフを弾けるようになってからずっと訓練しているのだが、未だコツは掴めず早二ヶ月。

もう一つ。身体中の精孔を閉じてオーラを消す絶。これも完璧にはいかず不完全な状態だ。ヘンデスさんが泥棒中完全に気配を消すのはこれを使っていたらしい。念能力を身に付けた犯罪者が世にどれだけいるのか、考えただけで恐ろしくなる。

これに合わせてもう一つ、発という必殺技がある。纏、練、絶、発が念能力の基本。だが、発をつくるには練が出来るようになってからと言われてしまった。何でも練が出来て初めて自分の特性が分かるらしい。全部で六つ。強化系、変化系、具現化系、放出系、操作系、特質系。

ヘンデスさんは放出系。オーラを身体から放つ事が出来る。それに空間移動も放出系の力。

念能力について詳しい話を聞いてからずっと考えていた事がある。アリスの将来にも関係する話。

アリスを先に寝かしつける事が出来た夜、ヘンデスさんがいつも寝ている居間に向かった。

小さなテーブルには半分残った酒の瓶と吸殻の詰まった灰皿。ヘンデスさんの手の内にある吸いかけの煙草からゆらりと煙が立ち上がる。

「ルークか。どうした？」

「ちょっと話したいんだけど、良い？」

返事の代わりに向かいの席を煙草で示された。静かに従う。アリスを起こしちやいけなから。背中に括り付けた棒も慎重に床に置いた。落ち着いてからすぐに本題を切り出す。

「念能力で、世界を越えたり転生したりって出来ると思う？」

ヘンデスさんに対して誤魔化しなんて必要ない。前世の記憶があ

る事は知っているのだし。

考えていた。俺やアリスが前世の、日本の記憶を持ちながらこの世界に生まれた。それは、念能力が関係しているのではないだろうか。もしそうならば、アリスは日本に帰って、普通の生活を送る事が可能なのではないだろうか。念能力なんて存在しない世界で、この世界の事を忘れて。それが、一番母さんの願いに近い気がした。

「まず、念で異空間を作ることには可能だ」

ヘンデスさんの回答は定みない。もしかしたらヘンデスさんも以前から考えていたのかもしれない。

「そして異世界はまた別物だ。その存在が確認されているなんていう話は聞いた事がない」

頷く。前世でもそんな話聞かなかった。フィクションの世界の話だった。

「だが、異世界はあるという前提で考えた方が良くいんだろうな。お前達の前世の記憶は、創られた記憶、<sup>〃</sup>にしては世界についての知識が巧妙に成り立ち過ぎている」

「<sup>〃</sup>創られた記憶、<sup>〃</sup>？」

嫌な感じを覚えて聞き返した。俺の前世が？ 二十六年の記憶が創られていた？

「念ってそんな事も出来るの？」

恐怖だった。人の一生が、たとえ短くても自分を成立させていたその根幹が、偽りである可能性。

「記憶を操作する念能力者もいる。アリスだけなら、それを疑っていた。だがルーク。お前のは異常だ。二十八年分の記憶、有りがちな人間関係、その割にしつかりとした一国の歴史、世界の歴史や多様な言語、国同士の関わり合い。そこまで創り込むなんて凄腕の能力者でも難しい。突拍子がなさ過ぎて逆に認めざるを得ない」

偽りではないと断言してもらって嬉しいんだけど。前世の記憶があるって告白した後時々前世について聞かれた理由にも納得したけれど。有りがちな人間関係で悪かったな、と不貞腐りたくなった。前世ではこんなややこしい家庭に生まれなかつたんで、と嫌味を言いたくなつた。話に関係ないから言わないけれど。

「で、異世界があると仮定して。そこに行き来する事は可能？」

一番聞きたいこと。ヘンデスさんは煙草を灰皿に押し付けそう焦るな、と意気込む俺に待ったをかけた。

「よく考える。お前の身体は以前の身体か？」

「いや、全然違うけど」

髪の色は黒から茶へ。瞳の色は黒から蒼へ。顔立ちだつて全然違う。前世の時より彫りが深く、また肌は白い。

「身体ごと此方に来た訳ではない。つまりだ、お前らは記憶だけ取り出された状態でこっちに来て、胎児の中に入った。これが一番可能性のある案だ」

記憶だけ取り出された状態。それは恐らく俺の考える魂と同じ。まあ向こうでは確実に死んでるんだし、その点は予想通り。

ふう、と息を吐く。今の話を聞いて思った事が二つ。一つは胸の内に留めて、もう一つだけを口に出す。

「つまり前世の世界に帰るには、記憶を丸ごと取り出す、そしてその記憶を元の世界に転送する、この二つの作業が必要。でも前世の世界が何処にあるかも分からなくて、もし分かって成功しても向こうでまた赤ん坊から再スタートってなる訳だ」

「お前らを此方に呼んだ原因に当たるのが一番早いだろうな」

本当にな。手掛かりが少な過ぎる。そして、原因そのものの手掛かりも。

「何にせよ、まずは生き残ることだ」

未来を、夢を描くにはまだ時期尚早、という訳か。異論はないから反論しない。

「うん。有難う、ヘンデスさん。お休みなさい」

「明日の起床はいつも通りだ」

多少の夜更かしは考慮してもらえないらしい。けれど、それ以上に有意義な話が出来たと思うから、何も言わず健やかに寝息を立てるアリスの元へ戻った。

さっきは言えなかった。俺は、俺とアリスは、本当に母さんと父親の子供なんだろうか。魂が胎児の中に入る。その胎児は、本当に自我がない存在？

不安になつて、でもそれを胸の端っこに押し込めた。だって、真相なんてきつと誰にも分からない。それなら、都合が良い考え方をしても良いだろう？

俺とアリスは、母さんと父親の子供だ。だからこそ、ヘンデスさんが守ってくれる。その前提を揺らがす疑問なんて、必要ない。

## うつつき

一月に一度程の頻度で繰り返される引越。十一番目の仮宿に選ばれたのは、程よく治安の悪い区域の外れに位置する崩れかけたアパートの一室。水道と電気は通っているのが不思議でならない程のおんぼろだが、時折人の気配はするので他の住人もいるようだ。一階の部屋の前を通る時高確率で呻き声が聞こえるし。

最近、外から聞こえる悲鳴を聞いても心動かされない自分がいる。アリスもそう。あまりに頻繁に起こるから、動揺にも慣れてしまった。助けなきゃ、という使命感が沸き上がったのは初めの方だけ。怖がって震えるアリスを抱き締める方が重要だった。人助けする程の力が足りなかった。そんな言い訳をしなければならなかったのも、初めの方だけ。

泥棒に入るたび。見捨てる人の数が増えるたび。心が凍りついてしまったように、今まで抱いていた感情を失っていく気がする。それは大切なものではなかっただろうか。俺はまだ「普通」？ それとも既に「普通」じゃない？

境界線が曖昧になりながらも、アリスといえる時は、俺は「普通」だと自信を持って断言できる。アリスの笑顔を見れば、笑えるんだ。

そのアリスが、ある日涙で顔中ぐちゃぐちゃにしながら帰って来た。

「アリス!？」

早朝から二時間走り込みに行っていたアリス。俺はその間念能力、練の特訓をしていたのだが、酷い姿のアリスを目にした瞬間オーラが一気に膨れ上がった気がした。

頬が醜く腫れていた。口の端が切れていた。右腕はだらんと不自然に垂れ下がり、両足に擦り傷ができていた。

「歩けるか？ こっち来て座って。今手当てするから。ちょっと待っててな」

応急セットを取りに行こうとした俺の服が掴まれる。振り返れば、ぐずぐず鼻をすすりながらアリスが無事な左手でぎゅっと握っていた。

「ヘンデスさん。道具持って来てくれる？」

言葉は無かったけど動き出すヘンデスさんに任せて、俺は一先ずアリスを床に座らせた。泣き続けるアリスの頭を撫でる。

「痛いな。よく我慢して一人で帰って来れたな。偉いよ、アリスは」

努めて穏やかに。ぐいっと胸にこすり付けられた頭を撫で続ける。嗚咽を堪える様に、胸を締め付けられる。

いつの間に、こんな風に静かに泣くようになったのだろう。そういえば、アリスは昔に比べて泣かなくなった。前に泣いたのは、アリスを庇って俺が怪我をした時。その前は、と記憶を掘り起こして、愕然とした。訓練の後ちよくちよく涙目になってはいるけれど、大泣きしたのは八歳の誕生日だ。もうすぐ一年経つのに、あまりにも泣いた回数が少ない。喜ぶべき事なのかもしれない。我慢強くなつたな、と普通ならば。けれどそんな風には思えなかった。

この生活はアリスに我慢を強いている。それを改めて実感した。

ヘンデスさんが手際良くアリスに手当てを施していく。両足に包帯を巻き、頬に湿布を張る。右腕は骨折していたようで、添え木で

固定した。こんな時病院に行けない身の上を恨みたくなる。

「で、誰にやられたんだ？」

一段落してからヘンデスさんが問いかける。俯いたまま答えようとしないアリス。ヘンデスさんに目配せされて、下から覗き込むようにして俺が再び同じ問いを口にした。

「アリス。誰にやられたの？」

ゾルディックではないと思う。あの少年は鮮やかな手つきで殺しを目的に襲ってきた。けれど、アリスの怪我は違う。まるで痛め付ける事を目的とするような傷だった。

アリスだって弱くはない。まだ精孔は開けていないけれど、訓練のおかげで普通のチンピラ程度なら楽に倒せる力を身に付けている。だからこそ不思議だった。何故こんな事になったのか。

勢いを付けてアリスが顔を上げる。思い詰めたような瞳にもう涙はない。

「私っ、負けちゃったの」

喧嘩でもしたのか？

「負けそうだったから逃げちゃった」

「逃げて正解だよ。アリスがこれ以上怪我するなんて絶対嫌だ。生きていてくれるんなら何でも良い」

そう、生きていてくれるなら。みつともなく逃げてくれ、と強く願う。

しかし、アリスは力無く首を横に振った。

「違うの。逃げちゃだめだったの」

堅くなな様子。何があったのか、本当に不安になってくる。

「あいつ、うそつきだもん。それを証明しなきゃいけないかったの」

嘘つき？ その単語に胸がざわつく。

「嘘つきって？ どんな、嘘つかれたの？」

声が震えていた。手も震えていた。

幸いというべきか、アリスは気付かず切羽詰まった声を張り上げる。

「あいつ母さんは死んじゃったって言ったの！ 違うもん。私が良い子にしてたら母さん迎えに来てくれるもん！ そうだよね？ お兄ちゃん！」

頭の芯をがくがく揺さぶられる感覚。一瞬、思考が止まった。それでも瞬時に言葉を吐き出せた事に、感謝したい。

「嘘つきだよ。そいつ」

平淡な声が出た。さっき震えたのとは真逆。硬く、低い声。決まりきった文句を吐くように、何も考えずただすらすらと嘘が口から飛び出る。

「母さんはちゃんとアリスを迎えに来る。アリスの事を愛してるんだから」

「お兄ちゃんは？ お兄ちゃんの事も迎えに来てくれるよね？」

一拍、間が空く。無意識に自分を除外していた。多分、分かっていたから。今の俺は母さんの望みとはかけ離れているって事に。

「勿論。だから、良い子で待つてような」

けれど、アリスの前だから嘘を吐き続ける。安心したように笑みをこぼすアリスに、やっと息をつけた。

「それで、アリス。嘘つきはどんな奴だった？」

午後、アリスを寝かせて俺は一人外へ出た。ヘンデスさんに拝み倒して訓練はお休み。

放っておけなかった。アリスに怪我をさせた事。嘘を明るみにしようとした事。二度とこんな事を起こしてはならない。

手掛かりは金髪でつり目の少年。あまり背は変わらないと言っていたから歳も近いのだろう。正直信じられなかった。同じ年頃の子供にアリスが怪我を負わされた、と。だが、ゾルディックの子どもすぐく強かったし、俺もそれなりに強い。年齢はあまり当てにならないのかもしれない。

一時間程治安の悪い区画を彷徨い歩いた。途中絡んでくる大人もいたが、棒で地面を突つき小さなクレーターを作ればすぐに追い払う事ができた。ただ、いつ怪我をさせてしまうか分からないのと中々少年が見つからなくて、不安と焦燥が膨れ上がってきた頃。そいつを見付けた。

「あ。君がお兄ちゃん？」

ごみの散乱した薄暗い路地。壁に背を付け、座り込んでいた男子。高めの声を発すると共に立ち上がり、此方を向いた彼は薄い唇の両端を気味悪げに釣り上げ、楽しそうに笑った。

「お前がアリスに怪我させたのか？」

「そっくりだね。双子？」

背に括り付けていた棒を抜き取り、壁を軽く小突く。ひびが入り、パラパラと上から崩れた壁の欠片が落ちてくる。

「お前は、さつき、小さな女の子に、暴行を、加えたか？」

言葉を区切り、分かりやすく聞いてやる。

「あの子アリスっていうんだ。君の名前は？ ああ、僕はヒソカ。宜しくね、お兄ちゃん」

「イエスカノーで答える。お前はその子に暴行を加えたのか？」

風を切るように、棒の切っ先を少年に向けた。両手で支えたそれは、しつかりと安定を保っている。俺もそれなりの力が付いた、という事だ。苦しい訓練を耐え忍んだ甲斐がある。

つり上がった両の瞳が愉しげに細まり、くつと喉で笑う気配。その余裕に苛立ちが募る。オーラの量が増していく。

「あの子、それなりに強かったねえ。今後が楽しみ」

悦に浸ったように呟いた台詞に静かな闘志が沸き上がった。

どうしよう。ヘンデスさん以外にこんなに苛立って、ボコりたい

なんて気持ち沸き上がったの初めてだ。

「イエスと取って良いのか？」

もう、答えは分かっている。それでも問いを続けたのは、切っ掛けが欲しかったから。この子に攻撃を加える切っ掛けが。

「イエスと答えれば、君が戦ってくれるのかな？ お兄ちゃん」

からかうような台詞ばかり。煽られているのだと分かっているが、激情を堪えきれない。

良いかな。もう良いよな。こいつ念も知らないみたいだけどさ、アリスに怪我させて泣かせたんだし、同じくらいの怪我負わせるくらいは別に構わないよな。売られた喧嘩を買いただけだ。それでこいつがどんな目に合おうと自業自得。

「アリスに手出した事後悔させてやる」

「後悔？ まさか」

にたりと気味の悪い笑い方をする。心底この事態を歓迎していると言いた気に、両腕を開いた少年は空に向けて感謝を捧げた。

「日頃の行いが良いのかなあ、僕。ろくな奴がいないと思っていた矢先に、一日に二回も楽しめるなんて」

再びくくつと喉で笑う。

「イエスだよ、お兄ちゃん。君の妹を傷物にしたのは僕だ」

さあ戦おう、と笑みをつくった口が動いた気がした。

地面を蹴る。一直線に突き出した棒は軽々と横に避けられた。すぐさま脇腹を狙い飛んできた蹴りを、身体をよじり咄嗟に斜めに引き寄せた棒で防ぐ。じいんと棒を握った両手に痺れが走った。

強い。そう判断して、後ろに飛び、距離を取る。

素早い動きだった。重い蹴りだった。ヘンデスさんの動きや攻撃に比べれば、多少劣る。だが、油断したら負けるかもしれない。念を覚えてもいない子供相手に。

ずしりと放り投げた棒が重さで地面にめり込む。

「あれ？ 武器捨てちゃうの？」

「ああ」

持てるし、それなりに扱えるようにはなった。だが、重過ぎる棒は、確実にスピードを削いでいる。今の俺なら、素手の方が強い。

興味を色濃く宿した視線を棒から俺へと移した少年は、挑発するように掌を上に向けて指を軽く動かす。これはかかって来いって事だよな。

駆け出した身体は重力を感じないかのように軽かった。今までご飯を食べる時、シャワーを浴びる時、そして寝る時以外はずっと1トンの棒を身から離さなかった成果を、身をもって知る。みるみる内に迫っていく少年の目が見開かれる様に、口許が緩む。

鳩尾を狙って掌底突き。僅かに右に反れたが、当たった感触。初めて攻撃が入った事が嬉しかった。ヘンデスさんには全て防がれるから。それが気の緩みに繋がった。

左の視界に映る影。咄嗟に左腕でガード。痺れが走ってから、相手の右ストレートに気付いた。

防げたけれど、攻撃に気付かなかった事が悔しくて、腹立ち紛れに半分意識的にオーラを纏った右足で腹を蹴り付ける。少年は踏ん

張ろつと齒を食い縛ったが、それも一瞬。吹っ飛ばされて壁に激突した。

ずるりと床にへたりこみ、腹に両手を当ててげほつと空気を吐き出す様に、胸がすつとした。痛め付けて、あとは泣かせたいな。許しを乞えば、尚良いな。

そんな事が頭に浮かび、乾いた唇を舌で湿らせて、止めを刺そうと足を踏み出した時。

咳き込んでいた少年が血を吐き出した。

脳裏で重なる。前世の最期、血の味しかなかった口内。呼吸さえ儘ならなかった苦しみ。記憶が鮮やかに蘇る。足が震える。自分のやった事に、背筋が強張る。

何故？ 何故俺は学ばない？ 攻撃するっていうのはつまり相手を傷付ける事で。殺してしまうかもしれないっていう覚悟もなしに攻撃したら後悔するって分かりきっているのに。アリスが傷付いたから？ やられたらやり返して良いの？ それって負の連鎖って言わないか？ でも確かにこいつはアリスを傷付けて、しかも嘘ついた。そうだよ、嘘つきなんだ。だから今苦しんでるのは自業自得だから。俺は悪くない、って本当に？ 念も知らない相手にオーラで強化した蹴り入れといて？ 分かってたじゃん。念能力は危険だつて。それ使つて悪い事したくないって俺思つたのに。これじゃヘンデスさんと同じだよ。あれ、でもこれって悪い事？ 暴力は悪？ 前世だったら迷う事なく悪で。でもさ、本当に悪？ この世界でも？ ヘンデスさんなんかは平気な顔で悪事働いているよ？ ちよつと一人歩きたら変な大人が金せびりに近寄つて来る世界だよ？ ああ、でも母さんは。母さんはそれを否定していた。だから、俺もすんなり肯定しちゃいけないんだ。悪事はどこまでも悪事で。だから。

咳き込む音が止み、暴走する思考にストップをかける。見詰めた先で、少年はゆっくりと顔を上げて。そして笑った。

最初は小さく、喉でくつと。段々それは音量を増していく。

「あはははは！」

耳障りな笑い声に、眉をしかめる。途中血が飛び出しても構わず笑い声を響かせ続ける子供。気味が悪いというより、理解出来なかった。何故、笑う？

「これだから人生は面白い！　ねえお兄ちゃん。君の強さの秘密は何かなあ」

吐き出した血で真っ赤に染まった唇は弧を描いている。瞳は爛々と輝きを増し、舐めるような視線を向けてくる。

「誰が教えるか。この嘘つき」

「ヒソカだよ。そうだ。君の名前もまだ聞けてなかったな、お兄ちゃん」

教えたくない、と心底思う。だが、こいつにお兄ちゃんと呼ばれるのも不快だ。

「ルークだ。お兄ちゃんは止めろ」

「ルークね、ルーク。うん、良い名前だ」

満足頷きながら誉められるが、嬉しくない。

「ねえルーク。さっきの蹴り、何か秘密があるだろう？」

にたりと笑いながら立ち上がる少年に、驚きを覚えた。オーラを纏った蹴りが確かに入ったのに。多少ふらついてはいるが、確かに二本の足で立っている。

危険だ、と直感する。オーラなんて見えてないはずなのに、念能力に気付いているし。こいつは危険人物。そう心に刻み込み、先程までの葛藤を頭から吹き飛ばす。

「教えない」

「ひどいなあ」

心底愉しそうに呟く少年に落胆は感じられない。ただ、この空気を楽しんでいる。

「お前、嘘つきの上に気狂いって救えないな」

「ありがとう」

とても良い笑顔で礼を言われた。

知らない、と感じる。前世でもこういう奴とは知り合わなかった。こいつは、多分笑いながら人を殺せる奴だ。それを悪事だとも思わない。ヘンデスさんともまた違う。ヘンデスさんは、非道だけど残酷ではない。

「どう致しまして」

何とか余裕を絞り出したくて、軽口には応じた。上手く笑えていたかは分からない。未知の存在への戸惑いを払拭出来ない。

「ああ、そういえば」

ふらつきながらもすっかりとした声を出しながら少年は歩み始め

る。その方向にあるのは、俺が先程放り出した棒。

持ち上げる事も出来まい、と俺はその行動をただ眺めていた。

棒に手をかけたところで一瞬動きを止めた少年は、此方を見てにたりと笑い。

「僕、君に嘘ついたっけ？」

それを持ち上げた。

「アリスに。嘘を」

からからに乾いた唇を必死に動かす。動揺していた。俺があんなに苦勞して持ち上げた棒を、怪我を負った少年が軽々とはいかなくても扱えている。

「あの子に？ ああ、アレかな」

棒の中央を掴み、両手で軽く一回転させた少年の視線が此方を射抜く。唇の両端が限界まで持ち上がり、気味の悪い笑みを作る。

そして彼は、棒を宙へと放り投げながらその言葉を発した。

「君達のお母さん、死んじゃったんだよね？」

「死んでない！」

頭に血が昇って酸欠状態になっているのか、息が荒くなる。

ただ、許せなかった。こんな奴の発した言葉でアリスが泣いたのだと思えば、許せるはずがない。

「うん、嘘だよ」

ずしん、と土埃を舞わせながら棒が俺と少年の間に突き刺さった。

「う、そ？」

少年の言葉を鸚鵡返しする事しか出来ない。話の流れが掴めなくて、頭が混乱状態に陥っている。

そんな状態の中、土埃に占められた視界にそれを捉える事が出来たのは、本当にただの条件反射だった。それでもガードが遅れて、右肩に少年の拳がめり込む。

至近距離で、耳元に息が吹き込まれた。

「あれ？ 本当にお母さん死んじゃってたの？」

視線が合う。両の瞳が愉しげに細まる。

嘲笑されたのだと理解し、何の技もなくただ右の拳を下から振り上げた。先程と同じ、腹に一発。当たった感触がしたのとほぼ同時に、顎に衝撃が加えられる。

「がっ」

足を踏ん張り、何とか仰け反るだけで衝撃を抑え込んだ。顎はじんじんして割れたんじゃないかと心配するくらい痛むし、頭までぐるぐるする。喉は空気が勝手に噴出して言う事を聞かないし、仰け反ったから首が痛い。頭突きって結構効くんだな。

両目をこじ開けて、開けた視界に映った少年は離れた場所に倒れていた。咳き込む様子もなく、ぴくりとも動かない。さつき無意識に右手にオーラを集めた気がする。二度もオーラを込めた攻撃を喰らったんだ。動かないのも当たり前だ。頭に血が昇った影響か、それを眺めても先程のような混乱は襲ってこなかった。

だって、こいつ嘘だって認めた。そりゃそうだ。会った事もない

人間が母さんの事を知ってる訳がない。人をからかったり動揺させる言動が多かった。きつとアリスと喧嘩したくて母さんの事をつついたのだらう。そういう奇怪さを持っていた。

一歩一歩、慎重に少年に近付く。目を閉じた様は死んでいるようにも見えたが、呼吸の音が聞こえてきて、ほっと息をついた。

良かった。死んではいない。

死んでいても構わない、とは確かに思った。だが、生きているならそれに越した事はないんだ。すっごく気味悪くて今後一切関わりたくないけれど。

それから地面にめり込んだ棒を拾い、走った。アリスの元へ。早く告げたかった。あいつ嘘つきだったよ、と。

## 約束

「ただいま」

息を切らせながら飛び込んだ室内は夕方だというのに明かりも付けておらず、夕日の橙色に染まっていた。静けさに気まずさを感じ、足音を忍ばせながら足を踏み入れる。

まだアリスは寝ているかもしれない。起こさないように、未だ合格点をもらえていない絶をしながら忍び足。

「帰ったか」

突然かけられた声がいやに響き、肩を震わせる。アリスが寝ている部屋から出てきたヘンデスさんを睨み付けた。

「静かにしてよ。アリスが起きる」

さっき自分が発した声は棚上げして、小声で注意する。肩を軽くすくませるだけで、ヘンデスさんは椅子に腰掛けた。

「で、殺したか？」

軽い口調で、何気なく発せられた台詞に眉をしかめる。

「ヘンデスさんじゃないから殺さないよ」

殺すと思われていた事に苛立ちを感じ、嫌味混じりに答えた。と同時に、先程殺しても良いと最後思ってしまった自分に、大き

な嫌悪感が沸き上がる。それじゃあ、本当にヘンデスさんと同じだ。あんな変な子供にもきつと家族がいるはずで、無事を祈っている人がいるはずで、死んだら悲しむ人がいるはずだ。だから、簡単に人を殺しても良いなんて思っただけはいけない。そう、自分を戒める。

固く目を瞑り、俯いていたからヘンデスさんがどんな表情をしていたか、分からなかった。ただ、俺の嫌味なんて全くその心には届いていない事だけは理解していた。

「そうか」

かちつとライター音がして、遅れて煙が届く。

「アリスの様子見てくる」

これ以上意味のない、いや、不快になるだけのやり取りをする事に嫌気がさして足の方を変えた時、静かな声に止められた。

「待て」

「何？」

顔だけで振り返る。ヘンデスさんの後ろ姿を眺めながら続きを待つ。

「アリスは家出したからそこには居ない」

「は？」

理解出来なくて聞き返し、一拍置いて漸くその意味が、重さがじわじわと頭に染みこんできた。

「何で家出？ 今ゾルディックが来たらどうするの？ ただでさえ

アリス強くないのに今怪我してるんだよ？ 何で止めなかったの！」

掴みかかる勢いでまくし立てた。ヘンデスさんは振り向きもしなくて、また苛立ちが募る。

「何考えてんだよあんた！」

「アンの事を伝えた」

一瞬頭が真っ白になった。激情がさあつと引き、代わりに焦りが押し寄せてくる。どうやってそれを受け止めれば良いのか分からない。手先ががくがくと震える。冷や汗が全身から噴き出す。

「な、んで」

「限界だ。アリスも勘付いてはいた。それを否定したかったただけだ」

違う。そんなはずない。

即座に浮かんだ反論を、口には出せなかった。だって、アリスは必死だった。必死に嘘を、現実を否定したくてあんな怪我を負った。負けたくなかったと悔し涙を流した。

それでも、頷きたくない。

「でも、アリスには夢を与えるって」

約束してくれたじゃん、と口ごもる。不用意に口を開いたら泣きそうだった。でも、泣きたくはなかった。今はそんな時じゃ、悲観している場合ではないから。

「それは、お前の夢だろう？」

冷静な声に弱さを否定される。

今度こそ言葉に詰まった。確かにその通りで。母さんが生きていると信じるアリスを求めたのは、俺の身勝手だ。アリスにだけは、現実を見て欲しくなかったんだ。

「アリスに夢を与えるのは、俺でもアンでもない。お前だ、ルーク」  
「お、れ？」

鸚鵡返し。力強い声に縋りたくなる。答えを、救いを求めたくなる。

ヘンデスさんはゆっくりと振り返り、俺を真っ直ぐ見据えて口を開いた。

「アリスはお前に迎えに来て欲しいそうだ。早く行ってやれ」

答えになっっているようで、全く答えになっていない。もっと問い詰めたいのに、確かに今はアリスの方が大事で。

「帰ったら色々言いたい事あるから！」

叫んでヘンデスさんに背を向け、家を飛び出した。

段々と暗くなってきた路地を走り回る。今日は厄日に違いない。途中絡んでくる大人達は全て無視した。何処からか聞こえてくる悲鳴も、アリスのじゃないと判断したら全て聞き流す。転がってる死体を踏みつけた気がしたけれど、気にしない。さっき倒した少年が寝転がっていた場所も通ったけれど、誰もいなかったから多分無事に家に帰ったのだらう。もしまたアリスに絡んでたら今度こそぶちのめしてやる。

ひたすら走って走って走って息も絶え絶えになってきた時、公園を見付

けた。脳裏にあの時の事が思い浮かぶ。母さんが殺された日。家出したアリスは、独り公園で俺達を待っていた。

入り口で一旦足を止め、息を整える。棒を括り付けていた紐が緩んでいたのだから、巻き直し、体勢を整える。そうして頭の中を落ち着かせてから、既に日が落ちて暗くなった公園に足を踏み入れた。

「アリス？」

虫の鳴き声と風の音に負けなくらいの声で呼びかければ、がさつと近くの草が揺れた。遊具で寝泊りしているおじさん達に睨まれるのを無視してそちらに近寄る。

「アリス。迎えに来たよ」

植木を掻き分ければ茶色の髪が視界に入り、心の底から安堵する。やっと見付けられた。無事だった。

「お兄ちゃん？」

ゆっくりと顔を上げたアリスに、手を差し伸べた。泣き暮らしていたとはつきり分かる腫れた瞼が痛々しい。

「うん。ほら、怪我してるんだから無理するな。家に帰ろう？」

「でも、母さんいないの」

ぼつりと漏らされた言葉に、鼓動が速まる。それを気付かれないよう、恐る恐る言葉を発した。

「ああ。母さんは迎えに来ない」

その言葉を吐き出すのにすごく勇気がいって、本当は言いたくなくて仕方なかったはずなのに、何故か吐き出してみれば、楽に息が吸えた。一つ、重荷を背中から下ろせた事に対する安堵だったのかもしれない。

「お兄ちゃん、うそついた？」

それでも、アリスの真っ直ぐな言葉が胸に突き刺さる。

「うん、嘘ついた」

「そっか」

アリスらしくない、静かな低い声だった。そうだったんだ、と繰り返す声は平坦で、感情が読めない。その事に不安が掻きたてられる。

「母さん、死んじゃったんだ」

独り言のように呟き、アリスは俯きがちだった顔を上げた。震える唇の両端を持ち上げ、笑みらしきものを浮かべる。

「お兄ちゃん、うそついちゃいけないよ。うそつきは泥棒の始まりなんだよ」

胸を掴まれたように呼吸が苦しくなった。前世の時の諺。俺は嘘つきで、泥棒もしちゃってて、本当に救えない。だけど、アリスにそこまで明かすつもりはなかった。

「ごめん、アリス。もう嘘つかないって約束する」

「絶対だよ？」

「分かった。絶対嘘つかない」

怪我をしていない方の小指を差し出され、少し戸惑った。指きりげんまん知らないの、と問いかけてくるアリスにかろうじて笑みを浮かべる。

諺といい、指きりといい、もしかしたらアリスの前世の時の記憶はかなり戻っているのではないだろうか、と不安が生まれたのだ。もしそうだったら、アリスが今よりもっと物を考えられるようになったら、母さんが殺されたことも、俺達が逃亡生活を送っていることも、俺が悪事を働いて金を稼いでいることにも近い内に気付かれてしまうのではないだろうか。そんな不安を、今は静かに押し込める。

「嘘つかないよ。約束な」

「あともう一つね、あるの」

明るい笑みを浮かべながらアリスは続けた。

「私がいなくなったら絶対お兄ちゃんが迎えに来てね。あいつは嫌だよ。絶対お兄ちゃんが迎えに来るの。約束」

明るい声で、けれど真剣な瞳に見据えられ、慎重に頷いた。

「分かった。アリスが何処にいようと絶対迎えに行く。だからそれまでちゃんと待っててな」

「うん！ 私良い子で待ってる」

そっと差し出された小指と小指を絡めて二人で約束した。

そのまま折れている腕に気を使いながらゆっくりとアリスを立ち

上がらせる。ぶんぶん撃いだ手を揺らしながら歩き出すアリスは、先程までの消沈が嘘のようにご機嫌だった。微笑ましくも、また無理をしてるんじゃないかと不安が募る。

「今朝の子」

俯きながら発せられた言葉。表情が読めないから、どんな反応を返せば良いか咄嗟の判断が掴めなかった。結局、必要最小限を口にする。

「倒したよ」

「そっか。さすがお兄ちゃん」

無理やり弾ませたような声。

それから二人共無言で歩き、その話は終わりになった。もうあの子を嘘つき呼ばわりなんて出来ないことを、理解していたから。

次の日、すぐに引越した。名前はもう忘れたが、あの少年と再び会うのは危険だとヘンデスさんに訴えればすんなり許可を得られた。

そして移り住んだ十二番目の仮宿。アリスは怪我が治るまで静養中。これを言い出したのは、意外にもヘンデスさんだった。あの日、アリスを伴って帰った後俺の非難を全て聞き流していたのだが、流石に母さんの事を告げてアリスを傷付けた事に思うところがあつたのだろうか。未だに一欠片の良心を期待してしまう俺は、そう思い込む事にした。

俺の念能力についての訓練はあれから、今までの停滞が何だったのかと思う程上手く進んでいる。体内でオーラを練り上げ、一気に

精孔を開き外に放出する練。アリスに怪我を負わせた少年への怒りを覚えた時の感覚を思い起こせば、今までと段違いの速さでオーラを練り上げる事が出来るようになったのだ。そして最大限に練り上げたところで、一気に放出。それが初めて出来た時の開放感は凄まじいものがあった。

それまでずっと纏の訓練は怠らなかつた為、スムーズに爆発的に膨れ上がったオーラを身に纏う事も出来た。この状態は堅というらしい。念能力の応用技である。更にもう一つの応用技に凝がある。練で膨れ上がったオーラを一ヶ所に集約する技だ。ナイフを受け取る訓練中、手にオーラを集約していたのだが、その容量でやればこれもすんなり習得出来た。普通凝といえ、目にオーラを溜める事であり、これをやればオーラを見易くなるとのこと。試しにヘンデスさんに絶で気配を消してもらったところ、楽にそのオーラを捉える事が出来てしまった。

一ヶ月弱で一気に基本の練から応用技を二つ習得した俺に課せられたのは、発という俺だけの技の開発だった。

まずは系統を調べる。これは、水の入ったコップに向けて練をして判別する水見式という方法を取った。現れた変化は、砂。小さな小さな砂がコップに浮かんのだ。無から有を生み出してしまう不思議を問うたところ、無ではなくオーラを物体として生み出す具現化系特有の力だとの答え。

本当は放出系が良かった。逃亡生活という事を考えれば、移動系の能力が一番良い。が、残念ながら俺は放出系と相性が悪く、取得するのにかかるの時間と労力がかかると言われれば諦めるしかない。仕方なく具現化系という能力の範囲内で発のイメージが出来上がった頃だった。

俺とアリスの九回目の誕生日がやって来た。

「うそ？」

午後から外出していたヘンデスさんが帰宅した。甘い匂いをまとい、その手には世界的に有名なお菓子屋さんの名が入った大きな箱を持って。あまりに似合わないその姿に、喜ぶより先に疑念が浮かんでしまった。

「本当にヘンデスさん？」

「どつという意味だ、ルーク」

練をした状態で身構えた俺に、ヘンデスさんは溜め息を落とす。

「姿形を変えられる念能力者がいてもおかしくない」

「まあ、そうだな。だが、甘い」

目で追いきれない動きで拳が振り上げられる。次いで頭頂部に拳骨が落とされた。練をしていたから痛くはないが、気分的に頭をさする。

「わーい！ ケーキだ」

隣のがらんどつの部屋で瞑想していたアリスが飛び出してきた。無邪気にヘンデスさんの手から箱を奪い取り、机に置いて蓋を開ける様子に、思わず出るのは苦笑い。

どんな意図かは分からないし、ケーキを買った金の出所が気になるけれど、喜んでも良いよな。母さんが生きていた頃皆で食べたいと話していたお菓子屋さんのケーキだし。それに今日は誕生日。こんな日にヘンデスさんと言い合いしたくない。

高い声を上げてはしゃぐ妹をもう一度眺めてからヘンデスさんを見上げた。

「疑ってごめんなさい。ケーキ、有難う」

多分、自然に笑顔が出ていたと思う。素直に感謝の意を示した事が妙に気恥ずかしく、そのまま小さく頭を下げた。すぐアリスの元に走った。

「お兄ちゃん！ 見て見て。苺のショートケーキ！」  
「うわ、本当だ」

箱にはホールで苺のショートケーキが収まっていた。甘い匂いが食欲を刺激する。

前世では、こんな「普通」だったのにな。そんな感慨が知らず湧き出て苦笑い。当たり前前の幸福を、二度目の人生でしっかりと噛み締めた。

普段より少し具が多めのスープに、パン。それからなんと骨付き肉が夕食に出てきて、普段よりアリスが興奮していた。珍しく自分からヘンデスさんに話しかけ、ヘンデスさんの方も無表情ながら場を壊すような冷たい返答は避けている。

そんないつになく和やかな晚餐を終えて三人でホールのケーキを分け合った。アリスはその間ずっと笑顔を絶やさず、俺もつられてずっと笑っていた。

しかし、楽しい時間程過ぎるのは早いもの。一年分の笑いの余韻に浸りながらアリスと一緒に布団に入れば、久々の満腹感故か、それとも幸福感故か、すぐに俺は眠りについた。

そして、次の日。目を覚ませば、隣にいるはずのアリスが、忽然とその姿を消していた。

## 殺意

「ヘンデスさん！」

アリスの不在を知って、眠気は吹き飛んだ。慌てて寝間着のまま居間に飛び込めば、悠々と椅子に腰掛け、煙草をふかすヘンデスさんが目に入る。

「騒々しい」

「そんな事よりアリス知らない!？」

煙を吐き出し、煙草を灰皿に押し付ける。そんな余裕ぶつた仕草に焦燥だけが募った。ゆっくりと視線が俺に移り、眉をしかめたヘンデスさん。

「棒はどうした。いつも背負っていると言ったはずだ」

「そんな事どうでも良いからアリスが！」

「どうでも良くねえ！今ゾルディックが襲ってきたらどうすんだっ！それが甘いつて言ってるのが分かんねえのか糞餓鬼が！」

気迫のこもった一喝だった。負けずに俺も怒鳴り返す。

「甘くて悪いか！アリスがいない事の方が重要なんだよ！どうせまたヘンデスさんが余計な事言っただろ！」

それしか考えられなかった。

だから、ヘンデスさんが発した言葉の意味が理解出来なかった。

「アリスは売った」

泥棒した品物を売り捌いた時のような、何の気負いもない口調だった。

「売った？」

興奮が嘘のように冷めていく。把握しきれない現状を、上手く受け止められなかった。理解出来ないから、戸惑うしかない。

「ああ、売った。良い値で売れた」

平坦な声。良い値って、アリスは物じゃないのに。

ゆっくりと、少しずつ頭の中で事実が形を成していく。併せて腹の底から沸々と、静かに、着実に、冷たい怒りが溜まっていく。

「何で？」

もう声は震えていなかった。ただ、正面からしつかりとその黒い瞳を見詰め返した。どんな嘘も誤魔化しも許さない、そんな強い意思をこめて。

ヘンデスさんは端から誤魔化す気もなかったのか、淡々と理由を口にする。

「もうすぐゾルディックが来るだろうからアリスを逃がしたかった。まあ一時凌ぎにしかならんだろうが、俺の元にいるより長生き出来るだろう」

「アリスは俺が守る」

「ゾルディックを甘く見るな」

甘く見ているつもりはなかった。だって俺は未だヘンデスさんに勝ってもない。そのヘンデスさんが使用人をやっていた暗殺一家の一員。俺が平和な八年を過ごしていた間、ずっと訓練をしていたのだろう。子供だから、なんて理由で侮れない。

「でも、俺だって少しは強くなった。念も覚えたし」

「アリスはまだ精孔さえ開けていない」

ぐつと奥歯を噛み締める。ならば無理矢理にでも精孔を開くべきだったのか。あんなに苦しい思いをアリスにも味合わせるべきだったのか。そうすれば、今もアリスは俺の横にいてくれたのだろうか。どうすれば良かった？ 俺は、選択を間違えた？

ともすれば際限なく自己嫌悪に陥りそうな思考を、ある考えが吹き飛ばす。

「最初から、そのつもりだった？」

「どういう意味だ？」

俺と比べてアリスの訓練は緩やかだった。少しずつ強くはなっていたが、その速度は無理のないもの。アリスの精孔を無理矢理開く事に反対すれば、渋ったもののヘンデスさんは俺の我が儘をきいてくれた。

「いつから、アリスを売ろうと考えてたの？」

ふむ、と顎を撫でて思案するヘンデスさん。あまり時間はかからなかったと思う。不意に視線を上げて、口を開いた。

「アリスの精孔の開き方を決めた頃合いだな。半年で最低限念を覚えなければ、ゾルディックから逃れる事は不可能だろうから売るつ

もりだった」

やっぱり。そんな諦念と共に、言いがかりをつけたくなる。

「最初からそれを言ってくれれば」

そしたら、無理矢理にでもアリスに念能力を教え込んだのに。こんな後悔をしなくて済んだ。

「だが、その分お前のやる気が上がった」

思い起こせば、確かにその通りだった。アリスの分も頑張らねば。その一心で、一層辛くなった訓練を耐え抜いた。けれども、無理だった。納得なんて出来るはずがなかった。

「ヘンデスさんはさ、何でそういつつも」

一旦視線を伏せる。分からない。確かに底知れない怒りが渦巻いているのに、何故涙が出てきそうになっているのか、分からなかった。

大きく息を吸い込み、溢れ出そうな涙を引っ込める。代わりに出てきたのは、濁いた笑いだった。自分の感情の流れが、うまく掴めない。

「俺に何も言ってくれないの？ 相談くらい、してよ。そしたら俺だって色々解決策、考えたよ？」

いつもいつも、ヘンデスさんはいつだって自分が最善だと信じた道を迷わず選ぶ。そこに俺やアリスの判断なんて欠片も含まれない上に、俺たちの感情を利用する。だから、俺はヘンデスさんが無性

に憎くてたまらなくなるんだ。

「アリスの許可は得ている」

堂々とした返答に、時が止まった気がした。頭は動揺しているのに、反射的に発した声はしっかりとしたものだ。だった。

「いつ？ どういう説明したの？」

「一ヶ月前。アンが死んだ事を告げた時に。細かい事情は話していない。ただ、生き抜く為に必要な事だ」と

そんな説明でアリスは頷いたの？

声なき疑問に、ヘンデスさんは答えを与えてくれた。

「ルーク。お前が絶対に迎えに行くと言えば、アリスはすんなり頷いたぞ？」

脳裏に浮かんだのは、公園で交わした約束。妙に明るい表情で、真剣な瞳で、アリスは俺に迎えに来てと言っていたではないか。何故俺はあの時におかしいと思わなかった。突然言い出すにしては、不自然ではなかったか。

ああ、思えば昨日だって予兆があった。ヘンデスさんが買ってきたケーキ。いつになく饒舌だったアリス。俺にずっとくっついていたのは、別れを惜しんでいたのか。

全てが一つに繋がる。だが、今更気付いても遅い事ばかりだ。深く息を吐き出す。苦しくて辛くて溜まらないのに、不思議と聞くべき事柄だけはしっかりと認識していた。

「そっか。それでアリスを何処に売ったの？」

結局どうでも良かったんだ、アリスを売った理由なんて。たとえどんな理由でも納得出来ないんだから。

「聞いてどうする気だ？」

「迎えに行く」

何故そんな当たり前の事を聞くのだろう、と疑問が浮かぶ。

「駄目だ」

「ヘンデスさんには関係ない」

冷たい口調になった。

だって、もういいんだ。もう、ヘンデスさんと共には居られない。それが分かったから、もういい。

多分、信じたかったんだと思う。一欠片の良心。悪い人だけれど、同じ人間なのだから理解出来る部分もあるのだと信じたかった。時折見せる優しさが、温かい感情の顕れなのだと思えた。俺やアリスに少しでも愛情があると、細い細い一筋の絆があるのだと、信じていたかった。

けれど、もう無理だ。人を売るなんて絶対に受け入れられない。アリスを物みたいに扱うなんて、耐えられない。

「もういいよ、ヘンデスさん。父親との約束なんて守ってくれなくていい。アリスの居場所だけ教えて」

アリスと一緒にならば死ぬのも怖くはないかな、なんてぼんやり考えた。アリスが売られた先でどんな目に合うのか分からず不安に苛まれるくらいなら、一緒に死んだ方がきつと良い。アリスがいないと、多分俺は駄目なんだ。

ヘンデスさんは深く息を吐き出し、新しい煙草に火を付けた。

「生き残れたら教えてやる」

ああ、何も伝わってないんだな。そう悟ってしまった。やっぱりこの人にとって重要なのは約束で、俺の感情なんてどうでもいいんだ。ただ、生を保障すれば良いと思っっている。

ふと、ある考えが浮かんだ。きつと合っているだろう、と根拠もなく思う。それを口に出したのは、確認の為でなく、彼の無慈悲さを言葉で表したかったからだ。

「アリスの生の可能性がほんの僅か高まる。俺もアリスを迎えに行く為に今より必死に生き残ろうと努力する。お金も手に入る。一石三鳥を狙ったってところなのかな？」

諺の意味を理解出来なかったのか、ヘンデスさんは不思議そうに少し頭を傾げながらも頷いた。

「まあ、そんなところだ」

少しずつ量を増した感情が、胸の内に形を成した気がした。何もにも動じない、揺らがない、凍てついた怒り。それに新たな名を付けるとしたら。

「どうしよう、ヘンデスさん」

口端が醜く歪む。ちっとも面白くなってるのに、大声で笑い出したい気分だ。少しだけ、アリスを傷付けたあの少年の奇異さを理解する。彼も、こんな気持ちだったのだろうか。頭の中はかつてない程冷静なのに、気分だけが高揚している。

「俺、あんたを殺してやりたい」

湧き出した殺意を言葉にして認めてやれば、かつてない心地好さを感じられた。この世界に生を受け、殺意を覚えたのは二度目のこと。初めては母さんを殺した少年に。あの時は一時的なものだった。勿論母さんを殺された事への恨み辛みは一生消えることはないだろう。けれど、あの時はアリスがいた。アリスを守るという使命感の方が大きくて、そしてまだヘンデスさんを信じていられた。

今は違う。信じていたかったヘンデスさんがアリスを売った。裏切られた、と感じてしまう。勝手に期待して、勝手に傷付いて、馬鹿みたいだ。それでも、信じていたかった。

「良い傾向だ」

殺意をこめた眼差しに、ヘンデスさんは満足そうな笑みを見せる。再び勢いを増し渦巻く殺意に、際限はないのだと悟る。

「さっきの話にもう一つ付け加えるなら、お前の甘さを払拭したかった。今のお前は人を殺せない。その甘さは確実に死に繋がるだろう」

まるで俺の為に全てをしてやったかのような言い種だった。まあ、ある意味合ってるんだらうけれど。ただ俺の望む手法と違ったっただけで。

「一ヶ月前、あの子を殺してたら何か変わった？」

殺したか、と尋ねたヘンデスさん。否定した俺に、落胆していたのかもしれない。

「かもな」

煙を吐き出しながら、気のなさそうな素振りで言葉を返してくる。どうでもいいんだろっな、そんな事。終わった事だから。

ここにきて、ヘンデスさんの忠告に従わなかったことを一つ、後悔する。何故俺はさっき素直に凶器を取りに戻らなかったのだろう。まあでもあれを持ってたらスピード落ちるから素手で良いかと結論付けた。空の両手を開いて握り絞め、それを数回繰り返して意思の通り動くことを確認する。大丈夫。ちゃんと動く。ちゃんと殺せる。血を流しぴくりとも動かないヘンデスさんを脳裏に思い浮かべながら、左足で地面を強く蹴り付けた。

## 殺人

「ここだ」

同じ地区の、一番治安の悪い辺りに位置するぼろアパートを下から見上げる。

散々傷めつけられた割りに、手足は自由に動いた。まだまだ手加減されていたのだろう。それが分かるからこそ怒りは増し、腹の底でたゆたう殺意は未だ消えないままだ。けれど表向き従順に動くのも、未だヘンデスさんに敵わないと力で知らしめられたから。

それでもいい。ヘンデスさんに付いて行き、生き残り、アリスを迎えに行つてやる。ヘンデスさんを殺すのはそれからいい。消えてくれないどろどろとしたおぞましい決意が、身体を突き動かす。

「本当に賞金首なんだよね？」

それでも確認しておきたかった。

今回の課題は、人を殺すこと。相手も人殺しで、公的機関に引き渡せば金を貰える賞金首らしい。逃亡生活中、足がつく可能性が高いから金は手に入らない。けれど、相手が悪人の方が俺の抵抗も幾らかは減る。

「ああ。四階の一番奥の部屋だ。家にいるはずだから行つて来い」

まるで近所にお使いを頼むかのような、軽い口調だった。目を合わせる事すら億劫で、小さく頷き歩を進める。

気配を消せる絶はしない。相手は念能力を知らないただの犯罪者だと聞いたから。此方が念をつかう必要もないだろう。

背に負った棒を手に持ちかえ、空いた片手でこつんと軽くドアを叩く。

「すみません！」

声を張り上げれば、ドアの奥から足音が近付いてきた。

準備しなきゃ。妙に冷静な思考に従い、棒を持った左手を背中に回す。深く息を吐き出す。これから行うべきことをイメージする。

「誰だあ？」

妙に間延びした口調で発せられただみ声。覗き穴がないって犯罪者に都合が良いな、と思いつつ口を開く。

「猫が逃げちゃったんです。この部屋のベランダにいないか確かめても良いですか？」

すらすらと、動揺なく嘘をつけた自分に感心した。俺、今なら詐欺師になれるかも。そんな場違いな考えを巡らせている内に、ゆっくりとドアが開く。残念ながらチェーンは付いていたらしい。少しだけ開いた隙間から姿を見せた男は髭を生やした黒髪の男だった。特徴が一致した事を確認して、笑みを作る。朗らかに、いかにも無害そうな、アリスみたいな笑みをイメージして。

「本当にすみません。ちょっとだけ、良いですか？　すぐ出て行きますから」

男は油断なく視線を周囲に飛ばして他に人がいない事を確認したようだった。

緊張で唇がからからに乾いている。脳みそが沸騰したかのように、

血が昇っている。もし駄目だったらどうしよう。ドアを破壊する、は駄目だ。音が大きすぎてもし誰かの注意を引いたらまずい。ドアを閉められる前にチェーンを千切る。これが良い気がした。ドアを簡単には閉められないよう、ストッパーにするべく右足を出す心の準備をする。まるで悪徳商法だ、そんな事を考えて思わず笑みがもれた。悪徳商法の方がましだったから。俺は、今からこの人を殺すんだ。

ちよつと悩むように部屋の奥をちらつと振り返った男は、おもむろにチェーンを外しドアを開けた。

「ほらよ」

声を掛けられるまで放心していた。放心している事にも気付かなかった。

「あ、有難うございます」

吃りそうになりながらも礼を述べ、恐る恐る一步踏み出す。

上手くいって欲しいと思っていた。それなのに、何でだろうな。実際上手くいったら、恐怖がわいてきた。ちらりと見せられた信用が、此方の決意をじわじわ溶かそうとしているようで、すごく怖いやめて、と叫びたくなる。俺はあんたを殺そうとしてるんだ、と告白したくなる。犯罪者なら他人をすんなり部屋なんかに入れるな、と勝手に憤りを感じてしまう。

「どうした？」

掛けられた声に、心拍数がかつてない程に上昇した。笑みを作ろうと努力しながら見詰めた先、男は不思議そうに首を傾げている。

「あ、の。さつき他の人は話も聞いてくれなかったから」

背中に隠し持った棒を握る左手に汗が溜まり、危うく落としそうになった。身長より少し短いくらいのそれは、身動きすればすぐに男に見咎められるだろう。気付かれないよう、慎重に握り直す。

そもそも、左手を後ろに隠すという行為は怪しくはないだろうか。そんな今更な疑問がわいた。もっと警戒しても良さそうなものなのに。確かに俺だってあんまり距離を詰めないように、背中に隠した物を見られないように気を使っただけだ。

もしかしたら全てバレてしまっているのかもしれない、そんな危惧が持ち上がる。今すぐ危害を加えられるのではないかと、恐れが生まれる。

おずおずと反応を伺えば、賞金首の男は黄ばんだ歯を見せて笑った。

「そうかそうか。この辺の奴らは皆気が荒いからな。坊主も気付けるよ」

悪意の欠片もない、自然な笑みだった。

「なん、で」

そんな風に明るく笑うのか。俺を警戒しないのか。

男は考える様子もなく、軽く答えた。

「猫好きに悪い奴はいねえのよ」

軽く頭が混乱した。

そんな理由で他人を信じてしまうのか？ 犯罪者が？ 本当にこの人は人殺し？

疑問がぐるぐる回り、一瞬にして気付いてしまった。この男は確かに殺人者かもしれないけれど、俺はこの人に危害を加えられた訳ではないっていう当たり前のことに。お互い、一つの情報以外何も知らない。俺は、彼が殺人者だという情報。彼は、俺が猫好きだという嘘の情報。そのたった一つの情報で、彼は俺を信用した。なら、何故俺は彼を殺そうとしているのだろう。

ヘンデスさんに命じられたから？ なら何故従う。人を殺す覚悟をもち、暗殺一家の追っ手から生き抜き、アリスの居場所を聞き出す為？ 果たしてそんな理由で人の命を奪って良いのだろうか。俺にとっては軽い理由ではないけれど。それは人殺しを正当化するに足る価値があるのか。

全てが揺らぐ。さっきまでヘンデスさんへの殺意で興奮していた頭が、冷静さを取り戻してしまう。無理だ、と悟ってしまう。

俺は、この人を殺せない。

「ごめんなさい」

咄嗟に口をついたのは、謝罪だった。次いで既視感に襲われる。こんな場面を俺は以前にも経験した。初めて盗みに入った家。帰って来た住人に見付かり、謝罪をして。

「ああ、と」

短い謝罪に此方の正体を察したらしい賞金首の男は、殴りかかっては来なかった。代わりにぼさぼさの頭を掻く。

「坊主は俺の事、知ってんのか？」

のんびりとした口調だった。小さく頷く。

「猫の話は嘘か？」

また、頷いた。俺は猫を飼っていないし、特に好きでもない。けれど猫の話を利用したのは。

「妹が、猫好きなんだ」

アリスが好きだった。前世で飼っていたらしい。不思議とアリスは飼い猫の事だけはよく覚えていた。白に茶毛の混じった雑種の猫。今は飼えないけれど、いつか飼いたいと目を輝かせて語っていた。

「アリスに会いたい」

ぼつりと溢してしまった呟きに、男は目を見張る。

「俺がお前の妹を殺したのか？」

思いもかけなかった疑問に、反射的に首を振った。

「アリスは、生きてる」

答えながらも頭の中では別の考えが巡っていた。考えになかったけれど、当たり前のことだ。殺人者の前に現れた怪しい人物。それは復讐者であつてもおかしくない。そして俺がもしこの人を殺したら、誰かを殺したら、その人を大切に思う誰かが俺を殺しに来るかもしれない。そんな当たり前のことに漸く気付き、恐怖が増していく。人殺しは嫌だという当たり前の感情が戻ってくる。

男はふむと顎を撫でて、だよな俺最近殺してねえし子供は殺んねえし、と人殺しを肯定するような台詞を呟く。やっぱりこの人犯罪者なんだ。それなら殺されても因果応報なんじゃないか。感情が揺

れ動く。

「じゃあ俺を殺せば坊主は妹に会えるのか？」

男の出した結論に、ちょっと悩んだ。別に殺せば会える訳ではない。人を殺す覚悟を持てば、少し生き残る確率が増えるだけ。けれど僅かでも確率を上げなければ、永遠にアリスに会えない。約束を守れない。

迷いながら頷けば、男は片手で頭をぐしゃぐしゃに掻き回してからおもむろに頷いた。

「じゃあねえな」

真っ直ぐな視線に射抜かれる。

「じゃあ、殺し合いだな」

朗らかに笑いながら、ポケットからナイフを取り出す。空気が変わったことを、肌で感じ取る。もう後戻り出来ないのだと知る。

「今俺が此処から消えたら、全て丸く収まらない？」

それでも足掻いたのは、殺す覚悟が既に揺らいでいたからだ。戦えば、俺が勝つ。彼を、殺す。結果が分かっているからこそ、戸惑いが消えてくれない。俺はこの人を殺したくない。人殺しになりたくない。

男は不機嫌そうに眉をしかめて口を開いた。

「ああ？ お前が妹に会いたってえ気持ちはその程度なんか？  
ならとつとと帰れ」

「違う！」

反射的に上げた声に、男は満足そうに笑みを浮かべる。

「なら良いじゃねえか。生憎と俺も殺される気はねえからな。やるんなら全力で殺るぜ？」

何故だろう、と思う。何故彼はこんなにも人らしいのだろう。もつと人でなしならば良かった。感情のない暗殺者の少年のように、頭のいかれたあの少年のように、ヘンデスさんのように、人でなしならばこんな罪悪感を覚える事はなかった。そんな、身勝手過ぎる憤りを抱きながら、背に隠す意味の無くなった凶器を胸の前に構えた。ともすれば震えそうになる腕に力を込め、視線を上げる。

何で俺、この人を殺そうとしているのだろう？

疑問を持ちながらも、迫ってくる刃物に反応した身体はスムーズに動いた。棒の真ん中を持った左手を少しだけずらす。右手で支えながら長い方を右上空に振りかぶった。部屋の中だから、あまり振り回せない。そんな不便さからヘンデスさんには素手でいけと言われたのだが、譲れなかった。一瞬の内に懷まで飛び込んで来た男の頭目掛けて、罪の象徴を斜めに振り下ろす。直線的な動きだけれど、俺と彼の間には圧倒的な力の差があつて、スピードを付ければ避けられない。刃物が此方に刺さる前に振りぬく。

一瞬のことだった。手に走る確かな感触。1トンの重さを受け、ぐちゃりと脳みそが弾け飛ぶ。上から降って来た肉の塊をもろに被る。つい先ほどまで喋って動いていた人が、肉の塊に変化する。重い鈍器で頭を叩いただけ。それだけで、彼は死んでしまった。

「こんな、簡単なんだ」

呆気ない生の終わりに、啞然とする。自らが成した行為の結果に、

恐れが沸き上がる。

証明してしまったのだ。俺は軽々と人を殺せる強さを持っているのだと。必要なのは、足りなかったのは殺す意思だけだった。そこに覚悟なんて必要ないのだと知る。覚悟とは、罪悪感に押し潰されそうになった時に、自分を支える為に必要なものだ。殺すだけなら、その意思があるのなら、きっと誰にだって出来る。

「もう、無理だ」

いつだって胸の内に抱えていたもやもやが、はつきりと形を成す。盗みを働いた時点で分かっていたことを、ここにきて再確認。俺はもう、二度と「普通」には戻れない。戻ることは許されない。俺が許さない。

「アリス」

無性に悲しくなって、すぎるようにその名を口にした。

「会いたいよ、アリス」

傍にいて欲しかった。人殺しだと罵られても構わない。嫌われてもいい。ただ、その存在を感じなければ、自分が人でなくなってしまう気がした。

屍はそのままに、勝手に拝借したタオルで顔と凶器を綺麗にしてからヘンデスさんの元へと戻った。アパートの入り口近くの壁に背を預けていた彼は、俺に気付き小さく笑みを溢す。

「良い面になつたな」

それで褒めているつもりならば、神経を疑う。

「殺ったよ」

短く報告。服に付いた血痕から、俺の態度から察していたのだろう。軽く頷かれて、それで終わった。人を殺したというのに、それだけだった。

問い掛けたかった。本当に人を殺す必要があったのか。いつかのようになり罪を目撃された訳でもない。ただ、甘さを削ぎ落とす為。そんな理由で人を殺して良かったのだろうか。口に出さなかったのは、もう遅いから。殺してしまったから。

今更震え出しそうになる手足を押さえ付け、ただヘンデスさんの後を追う。吐き気が襲ってきたけれど、無理をして平静を装った。ヘンデスさんの前で取り乱したりなどしたくなかったから。ただ、その後ろ姿を殺気をこめて睨み付ける。

一つ、気付いた。甘さが無くなかったどうかは分からない。けれど、きつと俺は人として大事な感情を無くしてしまった。だって人を殺してしまったというのに、殺す前はあんなに戸惑いを感じていたのに、罪悪感が沸かないんだ。悲しくて辛いけれど、何処か遠いことのように感じている自分がいる。悲しいのに辛いのに、涙が出る気配は無い。ただヘンデスさんへの殺意だけが、確かなものだった。

暗い部屋に帰り付き、すぐに荷物を纏めるよう言われた。いつも寝ている部屋に行く。今更気付いたが、アリスの服が全て無くなっていた。髪をとめるゴムも、気に入っていたタオルも、僅かなアリスの私物は全て。

たった一つ、残っていたアリスと俺を繋ぐもの。今朝気付かなかったのが嘘のように、それは存在感を持って床に落ちていた。ちよ

うど、俺が寝ていた場所。頭の上辺り。

そつと拾い上げてページを捲る。新しいノートに入ったばかりだった為、すぐに目的のページを探し出せた。

交換日記は、ちょうどアリスの番だった。

『お兄ちゃんへ

今日はすつごくすつごく楽しかったよ。私ね、お兄ちゃんのこと大大好き！ だからね、ちょっとはなれても気持ちが変わらないからね。お兄ちゃんも私のこと忘れちゃダメだよ。ぜーったい迎えに来ること！ 約束、信じてる。あいつに任せるのはすつごくムカつくけど、お兄ちゃんも元気だね。

あと、私もうそついた。ごめんなさい。ずっと一緒にいるって言ったのにごめんなさい。だから、お兄ちゃんがどんなうそついても許してあげる。迎えに来てくれたら、それからはずーっと一緒だからね。今度こそ約束！

じゃあ、またね。

アリス』

読み終えて漸く、俺はヘンデスさんの言葉の意味を知った。アリスに夢を与えるのは、俺だと。夢とは、未来への約束のことだった。ならば、それならば、俺も夢を見て良いだろうか。アリスに与えられた約束を、夢見ても良いだろうか。アリスと共にある未来。それは、ひどく甘美で、永遠に手に入らない幻想のように思えた。

## ヘンデスと父親

その日は、起きてからまず手を合わせて黙祷を捧げた。

母さん、俺はまだ生きてます。アリスもきつと生きてる。絶対に迎えに行くから、それまでアリスを見守っていて下さい。

心の中でそう祈った。

今日は、母さんの二回目の命日だ。

アリスが売られてしまった九歳の誕生日から一年と少しが経った。俺は十歳になり、少し背が伸びた。

棒術も少しは上達している。1トンの重さのあるそれを、楽々と扱えるようになった。ヘンデスさんのスピードにも付いていけている。最近はヘンデスさんに手加減されないようになってきて、大きな怪我が増えたけれど、やっぱり嬉しい。

そして念能力の方は必殺技である発が完成した。まだまだ付加能力は発展途上ではあるが、初めてそれを具現化出来た時は本当に嬉しかった。早くアリスにも見せてやりたい。きっと我がことのように喜んでくれるだろう。不思議とアリスを思い出す時に浮かぶ彼女はいつも笑顔だ。早く、今すぐにでも会いたい。

だが、未だにゾルディックの少年は姿を現さない。早く来て欲しいと焦れる気持ちがある。同様に、まだ強さが足りないからもう少し待ってくれという気持ちもある。アリスを迎えに行くことと、生き抜くこと。どちらがより大事なかなんて比べられないし、生き抜くことが大前提である事は重々承知しているのだが。それでも、最近焦燥の方が大きい。もうゾルディックは俺達の事を諦めたんじゃないだろうか。そんな都合の良い考えが浮かぶのに、一年という月日は十分な長さを持っていた。

「ねえ」

母さんへの黙禱を終え、居間に行く。

どんな場所に引越しても居間の椅子はヘンデスさんの定位置だ。そこが玄関からの侵入者に最も狙われ易い場所だから。母さんを殺しに来た少年も玄関から入って来たことだし、ヘンデスさんが警戒しているのはいつも玄関だし、ゾルディックの人間は殺しに行く時は正々堂々玄関から、なんて掟があるのかと疑問に思う。

「なんだ？」

愛用の銃の手入れをしながら億劫そうに返事をするヘンデスさんを横目で眺めながら、台所の床に纏めてある袋からジューズの缶を取り出す。蓋を開け、何気ない口調を心掛けながら僅かな希望を口にした。

「ゾルディックもさ、諦めたんじゃないの？ もうあれから二年経つし」

母さんが死んでから二年。疑念を表に出すには、丁度良い日だと思えた。それでも反応が怖くて、明確な答えを聞いて希望を失うのが恐ろしくて、そんな弱気な自分を誤魔化す為にジューズを口に含む。

「それは無いな」

簡潔な返答に、やはりな、と諦める自分を認めてしまった。本当は分かっていた。ただ、都合の良い妄想をしてしまっただけ。溜め息と一緒に愚かな考えを吹き飛ばそうと努力する。

「ゾルディックが獲物を逃がすことは有り得ない」

淡々とした語り口だったのに、見てしまった。遠いところに視線を飛ばし、どこか誇らし気に口元を綻ばせるその姿を。

「二年前は逃げられた」

何故か悔しくなり、ヘンデスさんの方があの子より強かったじゃないか、と暗に口にする。

「俺は所詮捨て駒さ。ゾルディック家の次期当主になられるかもしれない方に念能力の存在を教えさせる為の。念を覚えた彼には到底及ばない」

念押しのように告げられた台詞に、心にさざ波が立った。

その言い方じゃあ、まるでヘンデスさんがゾルディックに敬意を持つてみたいじゃないか。確かにヘンデスさんはゾルディック家の元使用人だけれど、あそこが居場所のような言葉を聞いたこともあるけれど。そこを捨て、俺達を取ってくれたんじゃないのか。うまれた憤りを、ジューズをもう一口含むことで何とか押さえ込む。ヘンデスさんの感情なんかどうでも良いことじゃないか、そう言い聞かせる。

「へえ。捨て駒か。ゾルディックってかなり残酷なんだね。逃げた使用人すぐに殺さず利用してその拳げ句に殺す、なんてさ」

けれども嫌味な台詞が出てきたのは、やはり許せなかったからだ。ゾルディックを憎んでいない様子のヘンデスさんが。

「彼らにとって我々など気にかける存在でもないさ」

それが当然であるかのような口調だった。批判すべき事でもないかのような言い種だった。

無性に悔しさが襲ってくる。それならば、何故あんたは。

「それでもゾルディックが憎くないの？」

激昂する事はなかった。アリスがいなくなってから、激しい感情が胸に渦巻いても、それを表に出すことはない。ただ、静かに、表情が凍り付いていくだけ。

「何故だ？」

予想もつかなかったと言いた気な、本心から不思議そうな声音だった。その反応に此方が呆気にとられながらも、何かがおかしいと感じ始める。俺は、もしかして勘違いをしているんじゃないか。そんな不安が頭をもたげてくる。

「母さんを殺した、し。あ、母さんはどうでも良いかもしれないけど。父さんの事は大切に思ってたんでしょ？」

「誰に聞いたんだ、そんな話」

はつきりと眉をしかめるその姿に、疑念が深まる。ヘンデスさんは父親を弟のように可愛がっていたんじゃない、そこまで思い出して気付いてしまった。恐る恐るその単語を口にする。

「母さんに、だけど。違うの？」

耳に届いたのは大きな溜め息だった。

「アンに嘘吹き込みやがって。あいつは本当に」

どうしようもない奴だ、そう呟きながらもいつになく穏やかな表情を浮かべるヘンデスさん。混乱が深まっていく。

「向こうが勝手に兄貴兄貴言いながら尻尾振ってただけさ」

肩をすくませながら吐き捨てる様子に、正体の掴めないもやもやが溜まっていく。

「なら何で約束したの？」

「ムカついたからだな」

返された内容は、予想とは全く違うものだった。もつと心温まる話を期待していたのだと思う。せめて父親に関しては人間らしい感情があつて欲しかったのだと思う。それを否定されたと感じる反面で、確かにヘンデスさんは父親と繋がりがあつたのだと、その事実を嬉しく思う自分もいた。

相反する感情がせめぎ合う中、ヘンデスさんは少し間を置き、やがてそれを口にした。

「あいつは俺に全部託して勝手に死にやがった」

ヘンデスさんの顔色を伺おうにも、僅かに反らされた顔は振り返る気配をみせない。正面に回り込むことも躊躇われて、結局突っ立つたまま疑問を口にした。

「ヘンデスさんが殺したんじゃないの？」

漠然と、そう考えていた。駆け落ちを反対したヘンデスさんは、

ゾルディック家への忠義で父親を殺し、父親への情から母さんを逃がしてくれたのだと。はつきりと言葉にした事は無かったが、母さんも同様に考えているようだった。いや、そう考える母さんの話しか聞いてないから同じような結論に至るのか。真偽は分からないが、その考えが間違っていた事だけは確かであるようだった。

「いや。自殺する気概があるなら自分で家族守れって話なんだが。腰抜けにや無理な話だったんだろうな。あいつに比べりゃアンはよっぽど上等だ。現実を見てなかったが、親としての役目は果たそうと努力してた」

自殺。はつきりと言葉にされ、流石に言葉に詰まる。

「な、んで。自殺なんて」

父親の考えが欠片も理解出来ない。何を思って死を願った？ 子供達には生を願っておきながら、何故自分だけ。

「あいつはあそこで生まれ、外の世界を知らなかった。結局アンと二人で子供守りながら外で生きていけるなんて欠片も思ってたんたろうよ」

「なら何で駆け落ちなんかしようとしたんだよ」  
「本当にな」

深く嘆息する気配。

分からない。欠片も分からない。見た事もない父親の考えが。

「だが、いつも適当に生きていたあいつが、女の為に命懸けて一生に一度だけがいてみせたのは確かだ」

「それが自殺？ 約束はしなかったの？」

「約束さ。奴が勝手に約束しやがって、俺の返事も聞かず勝手に一人で満足して死にやがった」

最低じゃん。そんな感想が頭に浮かぶ。

「で、全部ヘンデスさんに放り出して死んじやったんだ。随分信頼されてたんだね」

皮肉を言わなきゃやってられなかった。そうしなければ、胸の内に沸き上がる嫌悪感に囚われてしまいそうだった。

止めて欲しい。父親だけは、汚されたくなかった。良い人だと思っていたかった。誤解したままでいたかった。そんな都合の良い考えを持ってしまふ自分への嫌悪感。結局俺はそんな最低な人間の息子なんだ。無意識に父親をこき下ろし、責任を押し付けたくなる自分への嫌悪感。本当、嫌になる。

「『兄貴に任せたら安心なんで、俺満足して死ねます』」

ヘンデスさんらしかぬ口調に、視線を上げる。

「そんで本当に死んじまった。ムカついたな、あの時は。俺なんかを信用して、勝手に約束押し付けやがって」

不思議だった。それでも、約束を守ろうとしてくれるヘンデスさんが。

「何で、そんな人の子供守ってくれてるの？」

「言っただろ？ ムカついたからだって」

それ以上、ヘンデスさんは口を開こうとせず。結局真相は聞けず

終いだつた。

## ヘンデスと父親 裏話1

1

ベッドとクローゼット、そして小さな机に二脚の椅子。必要最低限の物しか置かれていない部屋の中、二人の男が向かい合って座っていた。きつちりと執事服を着こなしたスキンヘッドの男は働き盛りの三十代といった歳の頃。対する男はやっと二十代になったばかりの若さで、窮屈な襟元をだらしなく緩めている。

「聞いて下さいよ、兄貴」

安物のワインを注ぎながら話しかけてきた若い男に、ヘンデスは小さく眉をしかめた。兄貴と呼び一方的に慕ってくる若者が、ワインを注ぐ前にシャツの第二ボタンまで外したのが気に喰わなかったのだ。しかし、今は勤務時間外だから見逃してやろうと溜め息一つで気持ちを切り替え、ワイングラスを口許に引き寄せる。

そんなヘンデスの胸中を知ってか知らずか、若者は自分のグラスにもワインを注ぐと返事も聞かずに話し始めた。

「ついに俺も童貞卒業しました！ いえい！」

勢い良くヘンデスのグラスに己のグラスを合わせて耳障りな音を立てる若者は、今度こそしっかり眉根を寄せて怒りを露にする兄貴分の様子を全く気にしなかった。

「おい」

「ああ、勿論商売女じゃないっすよ。うちのメイドっす。あの巨乳

の子」

勤務を終えたばかりで少し皺の寄った、だが真っ白のシャツにぽつんと滲んだ紫の点の方に気を取られたヘンデスの声かけは、呆気なく無視された。

「いやあ、結構楽に落とせちゃいましたね。やっぱり兄貴の言った通りでした！ 笑顔でうんうん頷いてつまねえ愚痴聞き流してたら、向こうから発情してきましたよ。なんかもう巨乳最高？ あの胸は俺のもん？ ああもっかいヤリ」

頭に落ちた拳骨に、漸くよく回る口が閉じる。代わりにぐえつと潰れた悲鳴が耳に届いたが、ヘンデスは気にせず汚れたシャツを脱いだ。よく鍛えられた上半身を晒しながら、備え付けの洗面所で染みを丹念に洗い落とす。

「あの、すみません。兄貴。怒って、ますよね？」

「まあな」

後ろからおずおずとかかった声に、気もなく答えたのは若者の暴拳より染みが落ちるかどうかの方が男にとって重要だったからだ。

ヘンデスは今の仕事にやりがいを感じていた。盗みや殺し、ろくでもない事ばかりに手を出し、他人など信用すればいつ裏切られるか分からなかったようなかつての生活。そんな生き方も、この屋敷の主である暗殺一家の強さの前では意味を成さなかった。それが良かったのだらう。ヘンデスはこの屋敷ではただの弱者であり、悪事にまみれた過去さえ無意味である。

今のヘンデスにとっては、仕事をどれだけ完璧にこなせるか、それが全てであった。

「あの、兄貴？ すみません。反省しました。すつごく反省してます。もうしないので許して下さい」

後ろからかかる殊勝な台詞をヘンデスは聞き流す。この若者が口先だけの謝罪と反省を繰り返すことに慣れていたからだ。

「よし」

後ろで垂れ流されている言葉の羅列を他所に、黙々と染み抜きに集中していたヘンデスは、やっと満足するところまで洗い終えて声を出す。それは独り言であり、決して若者に向けた言葉ではなかった。

「許してくれるんですね！ さつすが兄貴！ 心が広い！ よつ色男！」

が、調子の良い若者は何処までも自分本位に言葉尻を捉えた。そんな彼に慣らされたヘンデスは、もう何も言う気が起きず無言で換えのシャツを羽織る。そうして通り過ぎ際若者の頭に再度拳骨を落としてから元の椅子に腰かけた。

頭を押さえながらちらちらと伺いを立ててくる若者に溜め息をこぼし、ヘンデスはゆっくりとワインを口に含む。そして気を取り直すように取り出した煙草に火を付け、煙を吸い込んでから口を開いた。

「で、続きは？」

途端に目を輝かせて身を乗り出すように話し始めた若者を眺めながら、ヘンデスは心中でもう一度溜め息を吐きたくなった。何でこんな事になったんだろうな、と過去の己を恨めしく思いながら。

ヘンデスと若者の出会いは十年近く前になる。ヘンデスは当時血気盛んな二十代中盤といった年頃にも関わらず、達観したような空気を纏っていた。丁度天下一の暗殺一家ゾルディックに殺してくれと云わんばかりに一人で乗り込み、ぼろぼろになりながらも命乞いをし、その強さを認められ執事として雇われた頃合いである。

初め、ヘンデスはゾルディックの強さを認めながらも、彼らを主人としては認めていなかった。元より死ぬ気があつたはずなのに、命乞いなどしてしまった己を恥じてもいた。それらは粗暴な態度として表れ、ヘンデスは先輩の執事から訓練時に厳しいしごきを受けることとなる。

そして、不貞腐れたヘンデスが一人になりたい時に訪れるようになった場所で、少年と出会った。

ゾルディックの敷地は広い。何せ、山一つを所有しているのだ。執事達が寝泊まりする建物から少し離れた森の中、朝方の訓練でしごかれたヘンデスは足を引き摺りながら僅かな休憩時間に一人を求めて歩いていった。

その音に気付いた時、ヘンデスは足を止めた。初めてだったのだ。彼が森の中で誰かに出会うのは。

敷地内で不審者に出会った時には殺せとヘンデスは命令を受けている。警戒の為に気配を消し、慎重に近付いた彼は、違和感に気付いて再び歩を止めた。

耳に届いたのは、泣き声だった。高めの泣きじゃくるようなその声は、子供のものだった。

面倒だ、そう判断したヘンデスは戻ろうかと一瞬迷う。しかしその泣き声に引き寄せられるように足が動いたのは、不審者ではない

という確証が欲しかったからだ。子供といえど侮れない。それをヘンデスは経験で知っていた。

近付くにつれ、子供を視界に捉えることができるようになる。踞るように顔を膝に埋めながら座る子供は、ヘンデスと同じ執事服を身に纏っていた。不審者の可能性が一割以下に減少する。しかし、警戒を怠らず近付いたヘンデスの存在に、子供は一向に気付かなかった。

到頭目の前に立つてもただただ泣き続ける子供に、ヘンデスは声をかける。

「おい」

泣いている子供への気遣いの欠片もないぶっきらぼうな口調。

おずおずと顔を上げた子供は、左の頬が右の倍程に膨れ上がっていた。

「おじちゃん、だれっ？」

しゃくりあげながら失礼な疑問を発する子供に、突然現れた大人を警戒する様子はない。

それでも不意の攻撃に備えずぐにでも動けるよう周囲に気を配りながら、ヘンデスは聞き返した。

「お前、名前は？」

一拍置いて無防備に発せられた名前は、聞き覚えのあるものだった。先輩の執事の子供。執事見習いとして働いていると噂で聞いていた。よくよく見れば、頬も脛も腫れているが面影がある。

ヘンデスは一人頷き、納得した。この子供は不審者ではない。そ

うと判断すれば、留まる理由は皆無だった。

くるりと踵を返し、再び一人を求め旅路に出ようと足を踏み出す。背後で動く気配を感じ、横にずれれば何かが地に倒れ伏す音がしたが、ヘンデスには関係無いことだったのでそのまま歩き始めた。

「こっの、人でなし！ 何でこの奴らは皆して泣いてる子供を置いていけるんだよっ！」

ヘンデスがぴたりと足を止めたのは、ある一部分に反応したからだ。他の執事と一括りにされたことが、彼の矜持を傷付けた。日頃から少しずつ溜まった鬱憤を晴らすには、今日の前にいる彼より遙かに弱い存在はうってつけだった。

振り返れば、不様に転がった子供がいた。先程子供はヘンデスの服の裾を掴もうとしてかわされ、結果土にまみれることになった。だが、そのようなことに興味のないヘンデスにとっては関係ない。ただ無表情で近付き、子供の傍らに座り込む。

「泣いてる奴を見付けたら慰めなきゃなんねえ決まりでもあるのか？」

感情のこもらない声だった。そこには隠された怒りがあつたのだが、子供は気付かなかつた。

子供はただ一人になりたくなかつた。殴られた後、泣いていたら邪魔だと放り出され、不安だったのだ。誰かに共にいて欲しかったのだ。そこに現れたヘンデスにすがっただけ。慰めて欲しいだなんて、慰められた経験がない子供は思い付きもしなかつた。

だから、子供は目の前の男の気持ちなど理解出来ない。ただ、自分の欲求をぶつけるだけ。

「そんなっ、決まり知らないけど。なぐさめてくれなくて良いから

さ。話聞いてよ。そばにいてよっ」

鼻をすすりながらの要求に、ヘンデスは一瞬呆気に取られた。

怒りを覚えたのは、泣いていれば優しくされるのが当然とでも言いた気な発言に対してだ。ヘンデスは幼少時、泣いて誰かに優しくされたことなどなかった。事態が良くなることなどなかった。だからヘンデスはいつしか泣かなくなかった。最愛の人が死んだ時も、涙は出なかった。そんなヘンデスの前に現れたぐずぐず泣く子供。

外の世界の悪意に晒され続けた彼には、その様は甘えとしか取れなかった。泣いていれば何かが良くなることなど有り得ないのだから。けれども子供に要求されたことはヘンデスの予想とは違っていた。傍にいて話を聞くだけ。それはひどく簡単なことだ。耳に入る雑音を聞き流し、横にいる存在を頭から消去すれば事足りる。ヘンデスは優しさからでなく、子供の要求を受け入れることにした。どうでも良いことは、断ることさえ面倒故。

話を聞くこと。傍にいること。それだけで充分慰めという行為になることを、ヘンデスは知らない。慰められた経験がないのだから。

「でね」

放っておけば一日中話し続けていそうな子供を他所に、ヘンデスは黙って立ち上がる。そろそろ休憩の時間が終わりそうだった。

「行っちゃおうの？」

心細そうな声に、ヘンデスの心は欠片も痛まなかった。

「ああ」

「また会える？」

「さあな」

時間が迫っていることの方が気にかかり、走り出そうとするヘンデスの後ろから声がかかる。

「俺、ここにいる事多いから。また来てよ！ 約束！」

約束。その言葉はヘンデスの心の琴線に触れた。足を止め、振り返る。勝手に約束されるなど、ヘンデスは許せなかった。

「約束はしねえ」

それだけ残し、ヘンデスは走り出した。約束という言葉は、彼にとつて特別な意味を持っていたから。簡単に交わせるものではないのだ。

3

初めてヘンデスが少年と出会ってから一年が過ぎた。同じ建物で生活しているのに、時折顔を合わせることがある。その度に顔を輝かせて寄ってくる少年に、ヘンデスも暇な時は相手をしてやった。それでも毎度約束を迫ってくる少年に、それを承知する事はなかった。

その日、朝のしごきを終えたヘンデスは気の向くままに森を散歩していた。一度でも少年と遭遇した場所を無意識に避けているのは、ヘンデスの中に相手をするのが面倒だという感情が芽生え始めたからだ。最近は何かと理由を付けて顔を合わせてもすぐに離れている。無防備な好意ほど、恐ろしいものはない。いつ裏切られるか分からないのだから。

「お前がヘンデスか？」

気配を感じなかった。上から降ってきた声に、ヘンデスは警戒を露にする。しかし、笑い声と共に木の上から降って来た少年を認め、深く頭を下げる。

緩いウェーブを描いた銀の髪。つり上がった目。主人であるゾルディック家の跡取り息子を、ヘンデスは幾度か目にする機会があった。こうして直に話をするのは初めてだが、話に聞いていたこともあり然程緊張もせず、一応頭を下げたまま言葉を返す。

「はい」

「そうか。あいつの兄貴分なんだろう？」

まだ年若い少年に気安い口を聞かれたことに対して怒りは湧いてこなかった。一年もいれば、ゾルディックの人間の強さは身に染みて理解していた。その強さにひれ伏すことへ陶醉を感じる段階まではいかないが、主人として認めてやることも吝かではないと何処か意地を張りながらも己を下に置くことに納得している。事実、十代前半のこの少年は、立っているだけだというのに既にヘンデスを圧倒する存在感を持っていた。

けれどヘンデスの眉が嫌そうにしかめられたのは、その台詞に対してだ。三ヶ月程前から、執事見習いの少年の話にゾルディックの跡取り息子が登場するようになった。友達、という役割をふられてそれを話半分に聞いていたのだが、どうやら本当らしいと納得せざるを得ない。そして、もう一つ。あの厄介な執事見習いは、主人に対して己のことをどのように話しているのか。そんな懸念がヘンデスの頭に持ち上がる。

どう返答すべきか悩んだ末沈黙を選んだヘンデスに、跡取り息子は楽しそうに笑う。

「聞いてた話とは違うようだな」

執事見習いからの一方的な好意を見透かした笑いだった。けれど嘲るではなく、むしろ執事見習いに対する親しみが滲み出ているような笑い方だった。その人間らしさにヘンデスは僅か目を見開いた。頭を下げたままなので、跡取り息子は気付かない。

「あいつ、お前が中々約束してくれないと不貞腐れていたぞ」

やはり面白がるように言葉を続けられ、ヘンデスはいよいよ困る。

「なあ、何か理由があるのか？」

するりと近付いてきた少年に顔を覗きこまれ、知らず一歩後ずさった。ヘンデスは執事である自分に納得しているが、主人にそのままで踏み込む権利を与えたつもりはなかったのだ。一生誰にも己の事情を語るつもりはなかった。

「言え」

瞬く間に首に添えられた指先は、刃のように尖っていた。身長差故、俯いた状態で跡取り息子と視線がぶつかる。無機質な殺意に、ヘンデスの身体は固まった。しかし譲れなかった。

「お許しを」

「言わなきゃ殺す」

「申し訳ありません」

すっと一筋の血が首から流れた。が、ヘンデスは視線を外さず主

張を翻す気も無かった。

跡取り息子は口端を持ち上げ、そして指先を引つ込め腹に両手を当てて笑い声を上げ始める。その変わり様にヘンデスは呆気に取られるしかなかった。

「ははっ。お前面白いなあ」

目尻に涙まで溜めながら笑い続ける少年は、先程までの殺気を綺麗に消している。けれどヘンデスには分かっていた。この、今はどこから見ても唯の子供にしか見えない少年の本性は先程見せた姿の方なのだ。緊張を解かず、ただじつと笑いが収まるのを待ち続ける。

やがて一息ついたのか、跡取り息子はヘンデスに向けて無造作に言葉を放った。

「まあいいや。お前、あいつと約束してやれよ。命令な」

傲慢に、王者の如き振る舞いを許された跡取り息子が発した言葉に、ヘンデスは静かに頭を垂れた。

後日、ヘンデスは命令通り執事見習いと約束を交わすことになる。時間があれば執事見習いの話を聞くこと。それだけの約束に、十年もの間ヘンデスは苦しめられることとなった。

4

「でね、兄貴。アンの奴が言ってたんですけど」

勤務を終えたヘンデスが自室に帰ればいつもの若者がくっついて

きた。勝手に持ち込まれた若者用のグラスを出し、これまた持ち込まれた安物のワインで乾杯するなり話し始める。最近の話題は若いメイドのことばかりだ。いつものように聞き流そうとしていたヘンデスだが、次の若者の言葉は綺麗に届いた。

「人殺しって悪いことなんですか？」

勝手に注がれたワインを飲もうとグラスに伸ばされた手が一瞬止まる。が、何事も無かったかのようにヘンデスは動きを再開し、ワインを口に含んだ。それから大きな溜め息を吐き出す。

「普通は悪いことに入るんだろうな」

若者は外の世界を知らない。暗殺一家の執事の子供として生まれ育った。執事の仕事には侵入者の始末も含まれる。故に殺すという行為は、彼らにとって日常の内だ。殺しが悪とされる価値観を知らなくてもおかしくはない。

「へえ。普通って面倒臭いつすね」

さらりと流され、ヘンデスは何故か息を吐いた。それは安堵から出たものだったが、彼は気付かなかった。

「何でまたそんな事を？」

話を全て聞き流していたヘンデスは、疑問に思い口に出す。その事に気付いた若者が頬を膨らませたのだが、気にせず先を促した。

「アンが言ってたんすよ。殺しは嫌だって。悪いことだって。でも、俺達人殺しに雇われて養われてる身じゃないっすか。文句言っても

仕方ねえと思うんですけど」

普段物事を深く考えることのない若者が真つ当な発言をしたことに、まずヘンデスは驚いた。

「お前、成長したんだな」

思わず口をついた本音に、若者は苦笑をもらした。その大人びた反応に、また驚く。

「まあ、俺も男になったんで」

茶化すように言っつて、真顔になる。

「でもそうっすよね。シルバに聞いてみたら、さあなっつて流されちゃったんですよ。嫌なこと聞いたかな。次会っつたら謝っつところ」

何気なく独り言のようにもたらされた言葉に、ヘンデスは脱力した。暗殺を生業にしている者に一番ぶつけてはならないだろっつ問いを、恐らく何も考えず発した若者の無謀さには、もう何も言っつ気は起きない。ただこの若者を友達という枠に置いている、最近ゾルディックの名を継いだばかりの若き当主の懐の深さに感服せざるを得なかつた。

## ヘンデスと父親 裏話2

5

若者から垂れ流される言葉の節々に、その兆候はあった。けれど、ヘンデスは気付かなかった。若者の変化に。女の味を知り、舞い上がっているだけだと無意識に決め付けていた。

そうと気付いた時には、全てが遅かった。

「あれ、珍しいっすね。兄貴が俺の部屋に来るなんて」

夜も更けた頃、突然現れたヘンデスを若者は歓迎した。どうぞどうぞと椅子を勧めてくる。

何も無い部屋だった。ヘンデスの部屋も生活に必要な物以外は極力排除しているが、若者が持ち込む細々とした物が僅かな彩りとなっている。その当の本人の部屋は、どこか暗く陰鬱な空気を醸し出していた。これが元からなのか、ヘンデスには判断が付かない。若者の部屋を訪れるのは初めてである上に、彼にそこまでの興味を抱いていなかったことを、改めて思い知る。

「何もなくてすみません。水でも飲みます？」

「いや、いい」

「そうっすか？ ならいいんですけど。あ、灰皿ないんでこれいいですか？」

使い古された何の飾り気もないコップをヘンデスの前に置いた若者は、向かいの椅子に座りいつものようにへらっと気の抜けた笑みを見せる。

「なんか兄貴が俺の部屋にいるって貴重だなあ」

「そうか？」

「はい。なんか嬉しいです」

眩しそうに目を細める様は、子供のようだった。心底嬉しくてたまらず、思わず頬が緩んでしまったような笑い方だった。

その無邪気な笑みから視線を反らすように、ヘンデスは煙草を取り出す。何気ない仕草で灰皿代わりのコップを眺め、そして部屋の中を窺い、確信を持ってしまった。この部屋には一つしかコップがなく、またそれが灰皿代わりとして出されたことの意味を、悟ってしまった。

苦いものを感じ、懐から携帯灰皿を取り出す。そして深く紫煙を吐き出した。

「で、何かあったんすか？」

ヘンデスが携帯灰皿を取り出したことには触れず、若者は朗らかな笑みでそう切り出した。用件は分かっているはずだが、焦るような気配は欠片もなかった。

「シルバ様から話は伺った」

ヘンデスの台詞にも、動揺は見られなかった。ただ当たり前のように頷く。

「ああその話っすか。シルバには残念ながら理解してもらえませんでした」

ちっとも残念そうには見えない明るい口調で若者は語る。

「シルバも奥さんもらって子供出来たし分かってもらえらと思っただけどなあ。まあ仕方ないっすよね！」

同意を求められ、ヘンデスは眉をしかめた。

ヘンデスが主に呼ばれたのはつい先程のことだった。曰く、若者と恋人の間に子供が出来て二人は駆け落ちを計画している、と。ヘンデスに任されたのは説得、そして説得に失敗した時の後始末だ。それを命じた若き当主は自然体であった。極当然に始末という単語を使った当主に、彼の中で若者の価値が無くなったことをヘンデスは知った。

慎重にヘンデスは言葉を選ぶ。

「馬鹿なことを考えるのは止める」

「あはは。俺馬鹿なんで」

「ふざけるな」

笑い声を止め、若者は俯いた。そのまま一言一言、考えながら思いを言葉にしていく。いつもの無駄口とは似ても似つかぬ様子に、ヘンデスも真剣に耳を傾けた。

「別に俺はアン程の強い気持ちがある訳じゃありません。未だに人を殺すのが悪いことっていう考えも分からないし。アンが言う『普通』って何か分からないし。子供出来たって言われてもそうなんだとしか思えないし。父親としての自覚とか言われても全然ぴんと来ないし」

深く息を吐き出し、若者は顔を覆った。

「俺、本当に馬鹿なんですよね。馬鹿だから全然分からない。分か

らなくても別に良いんだと思ってました。だって、生きてくのに必要ないじゃないっすか、そういうの。特にここみたいな特殊な場所では不要っていうかむしろ障害みたいな？」

無理に茶化したような口調だった。それでも笑顔を作っていればまだマシなのだが、顔を覆うという行為がちぐはぐな印象を作っていた。

「でも、最近アンが笑わないんすよ」

やっと若者は掌を外す。現れたのは、笑いそこねた無様な顔だった。

「妊娠分かってからずっと暗くて。で、冗談で駆け落ちでもするかって言ったら、やっと笑ってくれたんです。俺アンの巨乳の次に笑顔が好きなんで。こりゃもう駆け落ちしなきゃ男が廃るでしょう？」

ヘンデスは頷けなかった。その論理的ではない理由を、理解出来なかった。

若者はそんなヘンデスの様子を眺め、笑みを溢す。諦めたような、大人びた笑みだった。

「俺ね、兄貴。誰かに認めてもらったの、アンが初めてだったんっすよ。誰かに頼られたの、初めてだったんです。嬉しいもんですね」

ヘンデスは力が抜けた気がした。部屋に足を踏み入れてからずっと気を張っていた身体が弛緩する。

それでも若者に突き放されたと感じ、またそのように感じて傷付いている己を、ヘンデスはまだ自覚しようとはしなかった。

ただ脱力した己に喝を入れようと腹筋に力を込め、若者を正面か

から見据える。

「ずっとずっと苦しかったんです。ほら、俺ってある意味温室育ちじゃないっすか。他の執事の人達みたいに色々あってここにいる訳じゃないし。訓練も仕事も厳しいっすけど、それは他の人も同じでなんていうか、感じるんですよね。違いつていうのかな。世間の、外の荒波に揉まれてきた人達は、やっぱり俺のこと甘ちゃんとして見てくれないんじゃないっすか」

ヘンデスは己の心の内を言い当たられ、小さく眉根をしかめる。底を見透かされていたことが不快だったが、反論は出来なかった。

「まあ実際甘ちゃんなんですけどね。どうせ外に出てもアンと子供養う甲斐性なんて無いですし」

さらりと自分の不甲斐なさを認め、若者は言葉を続ける。

「だから結構俺諦めてたんすよね。別に甘ちゃんでもいいかって。どうせここで死ぬまで働くんだし外知らなくて良いじゃんって」

それは確かに若者の本音のようだった。ヘンデスの知る若者は、そういう男であった。

「なのに、アンは違うんですよ。アンも俺と同じはずなのに。外の世界を知らないはずなのに」

そういえば、とヘンデスは思い出す。話半分に聞いていたが、若者の恋人も同じように執事の子供であったはずだ。

「外の世界には知らないことが一杯あるから夢が広がるって、広い

世界を子供に見せてやりたいっていうんです。違う生き方があるはずだっていうんです」

若者はその瞳を穏やかに細めた。それは、愛しい者に向ける眼差しで、ヘンデスは若者のそんな面を初めて目の当たりにしていた。

「叶えてやりたいって思うんです。アンの夢を。父親としての自覚なんか無いけど、子供が産まれるんなら生きていて欲しいって思うんです」

言葉を区切り、真っ直ぐな視線を若者は向けてくる。

ヘンデスはいつもこの若者という時視線を合わせることは無かった。それは彼なりの線引きだった。約束があるから話は聞くが、心は許すまいという姿勢の表れだった。

だからこうして若者と視線を合わせるのは初めてのことで、ヘンデスの目に初対面の男のように映っても、それは仕方のないことだった。

「兄貴。俺、殺されるんですかねえ？」

真顔で問われ、ヘンデスは小さく頷いた。

「そつつすか」

朗らかに笑うその姿に、ヘンデスは悟った。説得は無意味だと。若者は既に心を決めている。空っぽの部屋と、使うことを放棄された目の前のコップが既に、若者の意思をはっきりと示していた。

「女に惑わされたか」

それでも当て付けのような台詞を吐いてしまったのは、ヘンデスの未練の表れだった。

若者は少し目を見張り、次いで嬉しそうに微笑む。

「まあそれもあるんですけど」

若者は笑みを深くして、立ち上がった。

「なんか、一つだけでも良いから命懸けて頑張れたら、死んでも良くなつて思えたんです」

座ったままのヘンデスは、自然と若者を見上げる形になった。

「それに悪いことばかりじゃないですよ。ほら、兄貴が俺の話真剣に聞いてくれるの初めてじゃないっすか？」

嬉しそうに問われ、ヘンデスは黙りこむ。

「兄貴は優しいですね。俺なんかの話にいつも付き合ってくれて」「約束だからだ」

優しいという単語を、ヘンデスは否定したかった。けれど、その言葉はまるで若者との絆を否定しているように響き、ヘンデスは訂正すべきか迷う。しかし答えが出る前に、若者がそれを肯定してしまつた。

「そうっすね。そういう約束でした」

穏やかに肯定し、若者は続ける。

「しかも、シルバに取り付けてもらった約束なんすよね」

声の調子が少し変わった。暗く、平坦なその声は、全く若者に似つかわしくなかった。

「俺、ほんつとうに一人じゃ何にも出来ない男なんすね！」

悔しさが滲み出たような台詞に、ヘンデスは驚く。このいつも適当な若者の中に、こんな激情があると知らなかった。劣等感に悩むという、若き当主を友達だと臆面となく宣言する若者の別の面を、初めて知った。

「だけど、そんな俺でも一つくらい出来ることがあるかなってね、思っちゃったんすよ」

ねえ兄貴、そう呼びかけられ、ヘンデスは意識を目の前にいる若者に移す。

「兄貴にとって、約束って特別なんすよね」

「おい」

嫌な予感がしてヘンデスは制止の為に声を掛けた。

構わず若者は続ける。

「アンとは今夜零時に此処から西に300m行ったところにある大木の根元で待ち合わせしてます。妊婦に冷えは大敵らしいんで出来れば遅れないでやって下さい」

考えればすぐに分かることだった。外の世界で妻と子を養う甲斐性はないと自覚している若者が、駆け落ちを強行した理由。こうし

てヘンデスに胸の内を明かした理由。

全てをヘンデスに任せようとしている若者に、怒りが湧き上がる。

「約束する気はねえぞ」

「ゾルディックが怖いんですか？」

分かりやすい挑発だった。

「兄貴、十年前はたった一人でゾルディックに乗り込んだんでしょ？ その時と比べて随分臆抜けになりましたね。今や立派な殺し屋の犬ですか」

「止める」

「ああそうでしたよね。命乞いまでして雇ってもらったんですもんね。俺達と違って望んで犬になっただけでした」

音を立てて椅子が倒れる。立ち上がったヘンデスは頭一つ分背の低い若者を睨み付けた。

「今すぐ死にてえのか？」

分かりやすい挑発だったけれど、それは正確にヘンデスの弱味をついていた。強大な力を持つ主の下でかつてと比べれば遙かに安穩とした暮らしを送ること、それに納得はしているが、満足かと問われれば答えに詰まる。そんなヘンデスの胸の内に若者の言葉は深く突き刺さっていた。

「兄貴。あんた、今何の為に生きてんですか？」

負けじと鋭い目付きで睨み返しながら、若者は追撃を放ってくる。ヘンデスは答えを見付けることが出来なかった。最愛の人を失っ

てから、彼はずつと惰性で生きてきた。  
若者は言うだけ言ってへらつと笑う。

「どうです？ 約束してくれば、ゾルディックの追撃から逃げるっていうスリル満点な生活が待ってますよ。きっと生きてることを今以上に実感出来ること間違いなし！ しかも今なら巨乳の美女と可愛いと違いない子供までついてくる！ こんなチャンス中々無いですって」

下手くそなセールスマンのような口上を軽快な口調で言い放った若者に、ヘンデスは少し意地悪な問いを発してみた。若者の覚悟がどれ程のものか知りたかったのだ。

「お前は俺に死ねって言うのか？」

「はい」

即答だった。

「ゾルディックに乗り込んだ時、一度は捨てた命でしょう？ 前、別にいつ死んでも構わないって言ってましたし有効利用しましょうよ」

「そんな事言ったか？」

「言いましたよ。俺、兄貴のこと大好きなんで兄貴の台詞、結構覚えてます」

「ついさっき死ねと言った口でそれを言うか」

「はい」

若者は綺麗に微笑んだ。

「大好きなんで、託すなら兄貴しかいないと思いました。アンに夢

を、子供には生を、与えてやって下さい。約束です」

言い切って伸びをする。肩を回し、両手をポケットに入れて朗らかに笑う。若者はどこまでも自然体だった。

「約束はしねえぞ」

「俺は約束してくれるって信じてるから良いんですよ。さっき言ったでしょう？ 一つくらい俺にも懸けられるものがあるって。俺はそれで賭けに勝つって信じてるから良いんです」

極めて穏やかな口調で、若者は言葉を続けた。

「兄貴に任せたら安心なんで、俺満足して死ねます」

おもむろにポケットから右手を出す。その手に握られた物をこめかみに押し当てる。

止めようと思えば、ヘンデスは楽に止められた。実際動きかけた身体は、けれど若者の言葉で固まった。

「大好きで、大嫌いでしたよ、兄貴」

呪詛のように、それは部屋に響く。

「ざまあみる。俺はあんたと違って今すっげえ幸せだ」

最低な捨て台詞だった。

若者は最期までヘンデスから明確な回答を引き出さず、勝手に約束を交わしたと信じ、満足して死んだ。

「てめえの命はそれほど重いくねえんだよ。自惚れんな」

若者が懸けたのは自分の命だった。ヘンデスにはそんな物と引き換えに約束を交わす義理はない。

けれど死体相手に悪態を吐いてみても、ヘンデスの胸の内に湧いた苛立ちは収まらなかった。

「ムカつくんだよ、てめえ」

全てに苛立っていた。

今まで共にいた時間を無視するかのように、隠していた本音をぶつけたきた若者に。そして長い時間共にいた癖に若者を理解しようとしなかった己に。

約束なんてという言葉でヘンデスの過去をつつき、勝手に約束を取り付けようとした若者に。守られなかった約束と最愛の人の死という苦い記憶を思い出し、未だその過去に傷付いている己に。

言い分をぶちまけ勝手に満足して勝ち誇ったように捨て台詞を吐いた若者に。そんな最期を目の当たりにして、この生き方に満足していないと自覚してしまった己に。

「ゾルディックを敵に回す、か」

言葉に出せば、長い雇われ生活を送る内に失われていた興奮が蘇ってくるようだった。その感覚に、ヘンデスは覚えがあつた。勢い良く血が身体中を巡り、心臓の鼓動が速まる。恐怖と歓喜の紙一重の感情。

「仕方ねえな」

呟き、ヘンデスは若者に背を向ける。

「ムカつくから約束してやるよ」

約束を交わす義理も理由も無かった。けれど、ヘンデスは知っていた。このまま知らぬ振りをして今まで通りの生活を送ることに苦痛を感じる程には、若者の存在が大きかったことを。若者より幸せな死を迎えてやらなければ腹の虫が収まらないことを。

## 独りきり

母さんが殺されたのは突然だった。何の予兆もなく、何も出来なかった。

同じ様に、彼は突然やって来た。

その時は念能力の訓練をしていた。応用技の一つ、周。物体の周りにオーラを纏わせ、強度を上げる。俺は棒にオーラを纏わせながら、一連の型をなぞっていた。

先に気付いたのはヘンデスさんだった。同じ部屋で壁に背を預けていた彼が玄関に視線を向けて。次の瞬間空気が変わった。

「逃げる」

短い指示に、けれど身体は動かなかった。気付いてしまったから。扉一枚挟んだ向こうにいる、圧倒的強者の存在に。

鳥肌が立つ。汗が止まらない。足がすくむ。敵わない。

悟ってしまい、死を予感してしまい、ただただ扉を凝視していた俺を動かしたのは、ヘンデスさんの一喝だった。

「ルーク！」

その大声に肩が震える。そしてやっと自分を取り戻すことが出来た。すっかり周が解け、オーラを纏わない唯の棒となったそれを握り直す。俺の相棒。罪の象徴。不思議とこれがあると思うだけで、頭が落ち着いていく。

「何ぼさつとしてやがる！ さつさと逃げる！」

一歩一歩此方に近付いて来る気配。恐怖はどんどん増しているけれど、もう手足の震えは止まっていた。

けどさ、ヘンデスさん。このまま逃げるなんて出来ないよ。

「アリスを売ったところ教えて」

これを聞かなきゃ、逃げられない。

ヘンデスさんは呆気に取りられたように少し間を置き、やがて小さく笑った。

「上着の裾に縫い付けてある。さつさと行け」

ヘンデスさんの台詞とほぼ同時に、何かが勢い良く扉に突き刺さる音がした。とんとんとと連続してそれは響く。一瞬の静寂。足が地面を蹴り付け、一足飛びに窓へと跳躍して手を棹にかけた時だった。ふわりと背後から風が吹く。

振り返ってしまった。背を見せたら殺られると思ってしまった。

長方形に切り取られた扉から悠々と現れたのは、あの少年だった。俺と同じくらいの背丈、髪はおかっぱくらいまで伸びている。そう、成長は確かに見られるのに、不思議と印象は全く変わらなかった。大きな黒目。感情を宿さないそれが、同一人物だと知らしめている。

「早く行け、ルーク」

無理だつて。心の中で返事をする。視線は少年から外せない。凝をして目にオーラを溜めなくても、分かってしまう。俺なんか比べ物にならない。ヘンデスさんより、遥かに力強いそのオーラ。たっ

た二年で。念を知った時期は俺と半年しか変わらないはずなのに。そんな悔しさを感じる余裕が無い程、目の前の脅威に圧倒されてしまった。敵わない。逃げられない。諦めが思考を支配する。

「ルーク。お前は何か何でも生き残って、アリスを迎えに行くんだらう?」

そこに、ヘンデスさんが少年に全神経を集中させながらも声をかけてきた。

そうだ、アリスと約束した。逃げなければ。生きなければ。強い意思が湧き上がる。そうして全気力を振り絞って足に力を込めた時

「逃げるんなら早く逃げれば?」

淡々とした、変声期前の高めの声だった。一瞬置いて、少年が発したのだと理解する。侮られた、と怒りが湧き上がる。

「逃げてもすぐ捕まえるって?」

恐怖を怒りにすり替え、何とか発した嫌味だった。嫌味のはずだった。

少年は不思議そうにこてんと首を傾げる。機械的な動きが不気味で鳥肌が立った。

「何で?」

疑問で返され、場が硬直する。俺の頭も混乱して、考えて、考えて、出た結論。

つまり、捕まえる必要がないとか、そんな事が有り得る?

「子供は、暗殺対象に入っていないのですか？」

不自然としか思えない丁寧な口調でその疑問を發したのは、ヘンデスさんだった。

「うん」

何の気負いもなく、いつそ無邪気といってもおかしくない程に軽く、本当に軽く少年は肯定した。

ぐるぐる回る。思考が空回る。つまり、俺とアリスはゾルディックの暗殺対象に入ってなくて、じゃあ逃げる必要なんて欠片もなく、強くなる必要もなく、何の為に俺は悪い事して、それで何の為にアリスは売られたんだ？

「二年前、ルークを狙ったのは何故です？」

「ルーク？」

ぼんやりと会話が耳に入ってくる。少年は、俺の名前も知らなかったらしい。名前に反応して視線を上げれば、無機質な瞳と目が合う。母さんを殺した少年。ヘンデスさんを殺す為にこの場にいる少年。何故だろう。心にぼっかり穴が空いてしまったように、感情の在処を忘れてしまったようだった。だってあんなに憎かったのに怖かったのに、憎悪も恐怖もわいてこない。それでも、母さんの心臓を手に握り締めたあの姿は、鮮明に脳裏に浮かんできた。必死に思い出す。記憶と目の前の少年を重ね合わせる。憎め、と命令する。こいつが悪いんだ、と言い聞かせる。でなければ、自分を保つていられなかった。

「ああ。あの時は逃げる隙を作りたかったから攻撃しただけ。びつくりしたよ。仕事始めてから敵わないって思ったの、初めてだった

から」

「そうだったんですか」

「うん。でももう念を覚えたから負けなよ」

「はい」

安心したように相槌を打つ彼は、俺の知らない男のようだった。知らない。知らない。そんな穏やかな顔で、満足そうに微笑む男、俺は知らない。

「良かった。これで約束を守れます」

勝手な事を言うな、そんな憤りが生まれる。感情が、生まれてしまふ。感情の源泉を、目を背けたいそれを、直視してしまふ。

「ルーク。何をしてもし生き抜けよ」

それは遺言だった。死ぬ気なのだと分かってしまった。一人だけ、勝手に満足して、死ぬ気なのだ。

爆発しそうになる。アリスがいなくなって以来、何処かに行ってしまった涙腺が刺激される。怒りでも、涙って出るんだな。

「ふざけるな」

押し殺したような低い声が出た。もう、限界をとっくに越えていた。

「全部全部あなたのせいじゃないか」

違う。頭では分かっているのに、口から出る言葉は全く別のものだった。

「置いていってくれれば良かったんだ。初めから、生まれてすぐ孤児院にでも捨ててくれれば良かったんだ。そしたらこんなっ」

母さんの死に目を見ずに済んだ。アリスと離れ離れにならずに済んだ。きっと俺は、普通でいられた。

「そうかもな」

違う。分かっているけれど、ヘンデスさんのせいになければやっつけられなかった。そうでなければ、この二年間が全て。

「だが、俺は満足だ」

「もう、良い？」

挟まれた高めの声は、やはり何の感情も含んでいなかった。

「駄目」

咄嗟に待ったをかければ、少年は悩んだ風に少し間をおき、けれど一歩下がって譲歩を見せた。

そのすんなりと退いた様に、力が抜けてしまった。窓に手をかけたままへたりこむ。

「はは」

何故か笑いがもれた。涙が目尻に滲んでいる。

どうでも良いのだと分かってしまったのだ。少年にとって、俺の事など本当にどうでも良い、何の価値もない人間なのだ。二年前に敵として現れておいて、いつだって脅威として俺の頭の隅っこを

占拠していた癖に。

気付いてしまう。正面から認めてしまう。全身から力が抜ける。少年を警戒する事を止めたのか、此方に向き直ったヘンデスさんを真っ直ぐ見詰めた。

「全部、無意味だったの？」

言葉にしたくなんてなかった。肯定して欲しくなんてなかった。ただ、理解して欲しかっただけだ。このやるせなさを。生を確約されたことで得た絶望を。

「そうかもな」

けろりと肯定され、唇をかみ締める。

「まあ、なんにせよ物事に意味を与える事が出来るのは自分だけだ」

最もらしい言葉を吐きやがって、そう心の中で毒づく。けれど、口から出たのは別の疑問だった。

「あんたには、意味があつたのかよ」

約束の前提が崩れた癖に、満足そうな彼の真意を尋ねたかった。

「ああ」

目を細めて、やっぱり彼は満足気に頷いた。

「お前の父親が最期に何を思っていたか、分かった気がする」

自殺した父親を持ち出され、一瞬怯んだ。

「ルーク」

真っ直ぐな視線。そこに慈愛が込められていると感じたのは、俺の気のせい？

「ざまあみる、俺は満足だ。悔しかったら何をしても生き延びてみやがれ」

口端を持ち上げ悪どい笑みを見せたヘンデスさんは、少年に向かって一礼して。いつの間にか右手に握っていた銃をこめかめに当て

「ふあ」

発砲音のあと、少年の発した欠伸がいやに耳に残った。

「終わったよね。うん、死んでる」

すたすたと淀みない足取りで倒れ伏した男に近付き、その死を確定した少年。機械的な流れだった。そこには何の情も含まれていなかった。

ヘンデスさん。あんたが心酔してたらしいゾルディックの人間は、こんなに薄情だよ。そう嫌味を言いたいのには、相手の耳はもう機能していない。

呆気なかった。実に呆気なさ過ぎる幕切れに、啞然と死に様を見詰めるしかなかった。分かっていたはずじゃないか。人は簡単に死ぬっていうこと。分かっていたはずなのに、上手く事実を飲み込めないのは何故なのだろう。

「あ、もしもし。うん。終わったよ」

短い通話を終えて携帯をしまう少年を、ぼんやりと見詰める。そうか、終わったのか、と理解する。こんなにあっさりと終わってしまったのだと。

そのままくると背を向ける少年にそれでも声をかけたのは、何でも良いから引き留めたかったからだ。終わりなのだとは理解していても、まだ何一つとして納得していなかったからだ。

「今更現れたのは、何で？」

少年は、調子が抜ける程すらすと答えをくれた。

「忘れてた」

更なるやるせなさを刺激する答えを。

「金にならない仕事だから後回しにしてたら親父に怒られちゃったよ」

夏休みの宿題をぎりぎりまで残しておいた子供のような言い種だった。そんな理由で、と拳を握り締める。

もっと早く来てくれていたら、せめてアリスが売られる前に。もしたらヘンデスさん一人が死んで終わりになったのに。

そう、自分に言い聞かせた。本当の気持ちを直視しなくなかったなら、一生来なくて良かったのに。

そんな思いを持ってしまった自分を許せなかった。ヘンデスさんの死を僅かでも惜しんでいる自分を認めたくなかった。

だって、酷い。自殺とか酷過ぎる。殺されたのなら、この少年を憎むことで少しは救われる。俺が殺したのなら、達成感と共に事実

を受け入れることが出来ただろう。けれど自殺なんてされてしまえば、死を惜しむ自分が馬鹿みたいで、そしてこの二年の間に積み上げた怒りや殺意を何処に向ければ良いんだ？

「もういい？」

力無く顔を上げる。母さんを殺した少年。その行為について、俺は憎しみを抱いて良いはずだった。けれども復讐してやろうとか殺してやりたいとか、そういう気持ちは不思議と湧いてこなかった。だって、もう理解していたから。彼の行為に感情など僅かも含まれていないんだってという事を。ヘンデスさんと同じ。こういう人達に感情を訴えたって意味がない事を、痛い程に理解していた。

「もう、いいよ」

そう告げることしか出来なかった。

少年は頷くと、未練なんてあるはずがなくあっさりと部屋を出て行った。

この死体、どうすれば良いんだろうな。そんなどうでも良い事が頭に浮かぶ。

濃厚な血の臭い。死体と同じ部屋に二人きり。何かを考えることさえ億劫になり、未だ窓枠にかけていた右手を床に落とす。棒を握り締めたまま左手も床に落とす。背を壁に押し付ける。つんと目頭が熱くなる気配がしたから、上を向いてそれを堪えた。

「なんだっ たんだろうな」

答えがない事を承知で口にした。口にしたら、笑えてきた。馬鹿だな、と思ったのだ。この二年間無意味なことに必死になった自分は馬鹿だな、と。

視線を下に向ければ、こんな状態だというのに綺麗に身体を纏うオーラが視界に入った。念能力を身に付けたことだつて無意味だった。左手に視線を移せば棒が目映る。泥棒して人を殴つて、殺したことだつて無意味だった。全て、全てが無意味だった。

視線を前方にずらせば、死体を捉えた。無意味な約束に縛られた男。それでも、満足そうな最期を迎えたことが理解出来なかった。ずりずりと棒を引き摺りながら移動し、死体へと近付いたのは、確かめたかったからだ。その死に顔に、一欠片でも無念さや苦痛を見付けたかった。そうしたら、少しは納得出来る気がした。恐る恐る、その俯せに倒れ伏して臓器や血にまみれた頭を持ち上げ、傾ける。

「う、そだあ」

強引に横向かせた顔面。上半分がぐちゃぐちゃになりながらも、口許は綺麗な弧を描いていた。最期に見た、悪どい笑みが脳裏に浮かぶ。その時の口許と寸分違わぬ形を認めてしまった。

「勘弁してよ」

頭を抱えて呻く。本当にやってられない。理解出来ない。

「ムカツク」

一人で満足しやがって。こっちは何一つとして納得出来ていないつていうのに。

思考がぐちゃぐちゃになっている。悲しくて辛くてどうしようもなく、怒りも悔しさも何に向けて発散して良いのか分からない。ごちゃごちゃした感情を宥めたいのに、その方法が分からない。

「独りになっちゃったよ、アリス」

いつものように、妹に語りかけて。それから思い出した。

上着を脱ぎ捨て、裾を切り裂く。内側からはらりと落ちてきた紙片を、大事に大事に受け止めた。

「約束、守らなきゃ」

ただ一つ、今の俺に残されたもの。書かれた住所を目にやきつける。

ヘンデスさんの死も、狙われていなかったという真相が今更知れたことも、自分の中で処理しきれなかった。けれど、それらを無理矢理どうでもいい事に分類する。

アリスを迎えに行くこと。約束を守ること。俺の中に存在するのは、それだけで良い。

ゆっくりと立ち上がる。最後、彼の死体を一目見てから背を向けた。何も考えたくなかったから。それが逃避であると気付いていたけれど、この場に留まることは出来なかった。自殺した奴の死を惜しみたくなどない。それに死体に怒りをぶつけても虚しいだけだっ  
て分かっていたから。

棒は布で包んで背負い、必要な物の入ったリュックを肩に引っ掛けて、一番近くの駅まで走っていった。ヘンデスさんみたいに車を運転出来れば良いのだけれど。身長の問題で難しいから移動手段は列車と飛行船だ。

アリスが売られた場所とは国が違うから、結構金もかかる。幸いヘンデスさんが貯めていたらしい金が部屋にあったからそれを貰っ

てきた。俺が使わなければどうせ盗まれるのだし有効活用させてもらう。

そうして列車に乗ろうとしたのだが。前世の嫌な記憶を思い出し、結句飛行船の乗り場まで走ることにした。幸い体力はあるし、地図は読める。途中ご飯を食べるなど休憩を入れ、辿り着いた時には夜になっていた。そうして切符を買おうと売り場に行った時だった。

「君、迷子かい？」

何処で買えば良いのか勝手が分からず視線をさ迷わせていたのが悪かったのか。振り返れば、制服を着た若い男が中腰で視線を合わせてきた。

「いえ」

「ご両親は何処にいるの？」

穏やかな声だった。久しぶりに与えられた、何の見返りもない優しさ。喉奥から何かが込み上げる気配を感じ、咄嗟に俯く。

「親は、いません」

氣力を振り絞って、その事実を言葉にした。親と問われ、頭に浮かんだ男女の姿を、首を軽く振ることで打ち消す。

不思議だった。今、思い浮かんだ二人が仲良く寄り添っていたから。願望だとしたら、自分が気持ち悪い。

「そっか。何処まで行くの？」

小さな声で行き先を告げれば、相手は優しく頷いて指さした。

「ちょうど今夜出発の便があるよ。あそこで切符が買える。一人で  
行ける？」

少し、戸惑う。一人で行ける。それは確かだった。けれど素直に  
領けなかったのは、久しぶりだったからだ。久しぶりに触れた温か  
さに、欲が出た。独りきりになったという現実に、心が揺らいでい  
た。

「あの」

心臓の鼓動が速まる。緊張で声が震える。それでも、希望を求め  
たかった。

「助けて、下さい」

もっと早く気付くべきだった。ヘンデスさんなんかは助けを求め  
ず、見知らぬ他人に頼るべきだった。俺自身は確かに無力だったけ  
れど、助けを求めることくらいは出来たはずだった。

「妹が、売られて。俺、妹を迎えに行くんです。だから、その。助  
けて下さい！」

頭に血が昇って、上手く言葉になっしてくれなかった。自分で言っ  
て支離滅裂だと分かる。それでも、助けて欲しかった。

「僕、あんまり大人をからかっちゃいけないよ」

穏やかな声だった。困惑したような表情で、優しくたしなめられ  
た。

「ごめんなさい。でも、妹を迎えに行くのは本当」

応えるように、唇は悪戯っぽく孤を描く。苦笑され、それを合図に切符売り場へと身体を向けた。

「一人で行けるから大丈夫。有難う、優しいお兄さん」

手を振り、背を向けた。その瞬間、表情が消えた。

冷静になれば分かることだった。いきなり事情を聞かされたら、荒唐無稽な内容だということ。自分でも笑えるくらい、現実味のない人生だ。暗殺一家の使用人の子供で、両親が駆け落ちしたせいで命を狙われ、妹は逃亡生活中に父親代わりに売られましたとさ。

分かっていたはずだった。それでも、助けを求めたかった。求める声に、応えてくれる人がいるはずだと信じていたかった。

小さな笑いがもれる。いまだに救いを求めている愚かな自分に、魂に刻み付けられた記憶を思い起こせば、簡単に分かったはずなのに。

助けを求めたって意味がない。そう世の中に絶望し、死んだ前世の自分。忘れていた己が愚かしい。

「自分で、迎えに行く」

小声で決意を口に出す。何も出来ない自分が嫌だった。だから強くなった。だからアリスを迎えに行ける。無意味な二年間に、意味を見出だせば、少しだけ救われたような気がした。

1

「ちゃー！」

目の前の生き物は、ヘンデスにとってその存在自体が理解不能だった。

少しでも力を入れればもげてしまいそうな柔らかい身体で四つん這いになり、蒼い瞳は涙で潤んでいる。そしてそれはじっとヘンデスを見上げ、先程から意味不明な声かけを繰り返していた。

「やー。とつと」

同じ姿形をした、性別が違うだけの生き物も加わってきた。とつと、が何を意味するのか、そもそも同じ言語を話そうとしているのかさえ、ヘンデスには理解出来ない。

「とつと、ちゃー！」

青い服を着た雄の方が吠える。すると赤い服を着た雌の方も負けじと吠えた。

「とつとー！」

ヘンデスの足を掴みながら主張する。どうやら己は「とつと」らしいという事を、ヘンデスは漸く理解した。また、「ちゃ」は違うを意味するらしい。ヘンデスは「とつと」か否か、激しい論争を続

ける兄妹を、他にする事もなかったので彼は呑気に見物していた。

「とっと……」

雌の方が大きな瞳を潤ませれば、雄の方は明らかに狼狽えながら固まる。

まだ産まれて一年も経っていないというのに、雌は涙の効果的な使い方を知っているらしい。そして雄は雌の涙に弱いらしい。幼いというのに既に世の常を体現している二人に、ヘンデスは素直に感嘆した。

「あらあら、どうしたの？」

そこにかかった新たな声。ヘンデスが視線を向ければ、エプロン姿の女が微笑ましそくに目を細めながら佇んでいた。小さな生き物達の母である。

「まま」

涙の気配が混じった声で雌が母親の元へと這っていく。その様子を笑顔で見守り、ようやっと足元までやって来た我が子を、母親は優しく抱き上げた。

「ヘンデスさん。二人はどうしたの？」

大雑把な問いに、ヘンデスは彼が把握している限りの事柄を教えちゃった。

「俺が」とっとだとアリスが主張し、ルークがそれを否定している」

ヘンデスが答えた瞬間、女の顔から笑みが消えた。その様子を感じと観察していたヘンデスは、薄々感じていた子供達の真意に確信を持つ。

「とつと」は父親のことか？」

言葉を話し始めたばかりの子供達が操る、奇怪な言語の解読能力に優れた母親は、青ざめた表情で頷いた。

ほう、と感嘆の息を吐きながらヘンデスは雄の方を見詰める。ヘンデスが本当の父親ではないと第六感で察したらしい幼児に、素直に感心したのだ。本当の父親よりも随分賢い、と褒めてやろうとした口は、しかし当の幼児が発した言葉によって閉じてしまう。

「ママ、ちゃ！」

じつと母親を見上げながら放たれた台詞に、沈黙が走った。

「ルーク？」

「ママ！」

困惑した声を上げる母親と、母親のエプロンを掴みながら雄を睨み付ける雌。

「ちゃ！　ママ、ちゃ！」

「ママ！」

再び始まった口論というより主張のぶつけ合い。大人二人は呆気に取られながら見守るしかなかった。

「ルウ、やー」

やがて雌が泣き言を漏らし始める。

今度はヘンデスも理解出来た。この生き物は「ルーク、嫌い」と言いたいのだと。分かったところで事態は何ら好転しないが、一発で意味不明言語を理解出来たことに彼は爽快感を覚えた。

「うー」

隣で唸っている雄に、ヘンデスは気付かない。

やがて服の裾を引かれ、ヘンデスは視線を下にやった。真ん丸とした蒼い瞳がじっと注がれている。そして不満気に雄は口は開いた。

「とつと」

そして母親に視線をやり。

「まま」

不貞腐りながら言い捨てる。

渋々了承してやったのだと言いた気なその様子に、ヘンデスはなんと言っただけなのか分からなかった。

「あのな、ルーク」

己の名前に反応し、主張が通らなかつた苦痛からか潤んだ視線を向けてくる生き物を前に、ヘンデスは言葉に詰まる。

そこへすかさず女が動いた。

「そうよ。偉いわね、ルークもアリスも。もうお母さんとお父さん

のこと呼べるようになったのね」

不自然な程明るく大袈裟に我が子を誉め始めた女は、視線でヘンデスに訴えかけてくる。話を合わせてくれ、との懇願を正しく理解した彼は、一瞬視線を空に飛ばした。考え込むこと数秒。子供達に父親だと誤認されることのメリットデメリットを比較し、どちらも少ないと判断した結果、沈黙という消極的手法で母親の懇願を受け入れることにした。

もつとも子供達の物心がつく頃には全てを明かすつもりであり、それまでの束の間、ヘンデスは安穩とした家族ごっこを送ることになる。その一時は、本人にとって意外なことに随分と心安らかなものとなった。

2

「ねえ、ヘンデスさん。妖精って見た事ある？」

あまりにも馬鹿げた台詞だと自覚があるのか、若干俯き視線を外しながらそんな事を聞いてきたルークに、ヘンデスは頬杖をつきながら呆れた視線をやった。

ヘンデスにはこの少年を守らなければいけない理由がある。具体的にはヘンデスの元雇い主である凄腕の暗殺一家から。九年近い沈黙を経て先日少年の母親が殺されて以来、ヘンデスは周囲への警戒度を上げ、また子供達に戦闘訓練を課すようになった。居住区域も以前と比べて段違いに治安が悪くなっている。

それら諸々の要素に加えて最近悪事に加担させたことから、平和を体現したかのように危機感が足りない少年は、少しずつ変わってきている、とヘンデスは思い込みたかった。

「何でまたそんな事を？」

呆れを隠さず問えば、ルークはおずおずと口を開く。

「あのさ、前世の時と比べて身体能力の在り方っていうのかな。鍛えてどうにかなるっていうレベルを越えて能力向上している気がする」

思わぬ話の切り出し方に、ヘンデスは真面目に話を聞いてやる気になった。

この少年に前世の記憶がある事は知っていた。打ち明けられた時は念能力の一種か、もしくはそれとは別の妄想の類かと怪しんだものだが、既に彼の中では念能力だと結論付けられている。というのも話をよくよく聞けば、どうやら前世を過ごしたというの世界がこの世界と異なるものらしいとヘンデスも納得せざるを得なかったからだ。異なる国、言葉、人種、生態系。妄想にしては具体的に過ぎる。

そしてその前世の記憶を維持しているが故に、八歳のルークは賢く、そして脆い。

「世界が違えばそういう事もあるだろう」

「アリスと同じ事言うんだね」

双子の妹の名を出しながら、寂しげに俯く。

アリスにもルークと同じ世界で過ごした前世の記憶があるらしい。しかし、その記憶量は少年と少女で大きく異なる。故に、少年は己の悩みを他者と共有出来ない。こうして前世の世界とこの世界の差違を見付ける度に、比較し検討し、そして漸くこの世界を受け入れる。ヘンデスにとっては、その過程が中々に歯痒い。

「納得出来ないか？」

「出来ないけど、するしかないから」

一事が万事この調子だ。

けれどヘンデスは今すぐこの少年をどうこうする気は無かった。ルークの母親を殺しに来た少年。彼が未だ念を知らなかったという事実は、ヘンデス達にとって朗報であった。ヘンデスは推測する。十年近い沈黙と、現れた暗殺一家の長男の関連性を。恐らく己は長男の成長を促す為の捨て駒だろう、と。ならばあの少年が再び現れるのは念能力を完全に取得してからになるだろう、と。

残された時間を一年と予測し、それを有効に使う為にヘンデスは選択した。まずは身体能力を鍛え、それから念能力を教え込むことを。無理のない成長を。急激な変化にルークは耐えられないとヘンデスは判断し、そしてそれは正しかった。盗みを強要しただけで、眼前で人を殺しただけで、ルークは酷く動揺した。初めの計画では人殺しも早い内に経験させるつもりだったが、それは後伸ばしすることとなる。

それらの理由から、ヘンデスは目の前の少年に急激な変化を強要はしない。ただ必要な時に見るべき現実を提示し、世界の違いからくる違和感を受容するまでに必要な時間を、仕方のないものとして受け止めている。

が、その些細な違和感が何故妖精などという子供らしい妄想に結び付いたのか、ヘンデスには理解出来なかった。

「で？」

「え？」

己の悩みに没頭していたらしい少年は、一拍置いて求められているものを理解したのか、誤魔化すように笑みをもらす。

「世界が違えば色々違うよねって話をしたらアリスがさ」

次いで浮かべた笑みは、妹への愛情に満ちていた。

「妖精もいるのになって騒いじゃって。前世の時はお伽噺にしかいなかったんだけど。ほら、この世界には魔獣もいるし。妖精がいてもおかしくないかなあ、と」

恥ずかしがりながら、それでも隠しきれない期待を滲ませた眼差しに、ヘンデスは大きく息を吐き出す。そんなメルヘンな生き物がいてたまるか、と怒鳴り付けたかった。逃亡生活中だというのに呑気な子供達に苛立ちが募った。

だが、口から出たのは別の言葉だった。

「何処かにいるかもな。自由になったら探しに行けば良い」

自由。死んだ子供達の母親がよく口にした言葉。ヘンデス自身は自由という単語に興味はない。けれど夢見がちな女と接した時間は確かに彼に影響を与えていた。子供達に生を、自由を手に入れる可能性を与えてやりたいと思える程度には。

3

「ただいま」

玄関を開けて入ってきた少女は、服に血痕を付けていた。ヘンデスは一瞥し、少女自身に傷がないことを確認してから、奥の部屋に視線を向ける。そこでは少女の兄が念能力の訓練をしていた。練と

いうオーラを爆発的に放出する技。中々上達しない兄には、あと半時程集中して練をやるよう指示してある。

「今日はどうだった？」

無言で上着のポケットに手を入れた少女は叩きつけるように金を投げてくる。この少女がヘンデスへ反抗的な態度を取るのはいつもの事なので、特に気にすることなく床に落ちたそれを拾いあげた。ざっと勘定して人数を推測する。

「二人か？」

「四人」

「しけてんなあ」

アリスに指示したのは近所での走り込み、及びその過程で絡まれた相手から金をせびること。少女の訓練にもなり、金も手に入る。

「さっさと服着替えて来い」

返り血の付いた服を脱ぐよう指示したのは、兄の為だ。兄は知らない。少女が走り込みに出る度に喧嘩を売られ、時に売っていることを。少女も知られたくないのか兄には隠している。

「ねえ」

少女がヘンデスの名を呼ぶことはない。

「何だ？」

「母さんは」

八歳の少女とは思えない鋭い視線に射抜かれるも、ヘンデスが怯むことはない。真っ直ぐ見詰め返す。

「何でもない」

揺るがないヘンデスに興を削がれたのか、少女はあっさりと身を翻す。少女は母親が既に死んでいることを知らない。けれど薄々勘づいてはいるのだろう。真実を曝す日が近付いていることを、ヘンデスは予感していた。

4

夕刻、食糧を買い込んで帰宅したヘンデスが目にしたのは、居間の椅子に腰掛け一点をじっと見詰めるルークだった。

「お帰りなさい」

母親からの教えか、この少年は決して挨拶だけは欠かさない。まるで無視は大罪であると言いた気だ。それでも先日アリスにナイフを投げ付けたことが原因だろう。視線が合う、笑顔を見せるといったことは少なくなった。少年から向けられていた真っ直ぐでいて純粹な好意が苦手であったヘンデスにとっては、好都合。

今もルークの視界にはヘンデスは入っていない。彼は少年の横を通り、机に食糧を置いてから何の気なしに少年の視線を辿ってみた。そして納得する。

「アリスはシャワーか」

浴室をじっと眺める兄の瞳は、不安で揺らいでいた。

「寂しいのか？」

最近別々に入るようになったことを指摘すれば、兄は大きな溜め息を吐き出す。

「寂しいけど、アリスもお年頃だろうから別に良いんだ。いつかは一緒に入らなくなるって分かっていたし」

お年頃か、そうヘンデスは心中は吐き捨てる。

彼は勘づいていた。少女が一人でシャワーを浴びる理由。先日近くを通りかかった時に微かに聞こえてきた泣き声。母親のことを度々口にしなから決定的な疑問をぶつけてくることはない。そんな少女の苦しみを、兄に伝えることはしない。一人で泣くことを選んだ少女の意思を、ヘンデスは尊重する。

「たださ、心配なんだ」

再びルークに視線をやれば、少年は物憂げに呟いた。

「アリスが浴室で転んでないかな、とか。一人でちゃんと髪の毛洗えるかな、とか。背中に手届くかな、とか」

「お前」

その後続く言葉は、気持ち悪いかもしくは平和ボケも大概にする、か。けれど結局ヘンデスはそれらを飲み込み、溜め息を吐くに済ませた。

双子の誕生日の夜。その前から既にヘンデスは決めていた。未だオーラを感じる気配のない少女を自分達から遠ざけることを。そして予感があった。兄と妹、生き残る確率は妹の方が遙かに高いと。妹は暗殺一家に追われてさえないなければ一人でも生きていける。柔軟性があり、悪事に手を染めることもいとわない。だが、兄は違う。いつまでも前世の記憶とやらに囚われ、母親の造った美しい幻想に固執する。

だからこそ、妹と離す必要があった。美しい幻想を妹に求めることで心の均衡を保っている兄は、妹の為ならば何でもするだろう。ヘンデスはルークをそういう人物だと判断した。

扉の開く音に反応して、ヘンデスは煙草の火を消す。

「寝たか？」

「うん」

出て来たのは少女。兄は今頃睡眠薬が効いて夢の中だろう。

「行くか」

売ることは既に話しており、了承も得ていた。だからすんなり頷くかと思われた少女は、予想に反し俯いたまま立ち尽くす。

「お兄ちゃんのこと」

ぼつりと言葉が溢された。

「お兄ちゃんは、寂しがりやなの」

「そうだな」

「お兄ちゃんの傍にいてくれる？」

普段冷ややかな物言いしかない少女は、珍しく懇願するような口調で問うてきた。ヘンデスはそれを受け、無表情で頷く。

「ああ」

そして内心に渦巻くもやもやの正体を確かめる為に口を開いた。

「お前達は、何でそう他人のことしか考えていないんだろうな」

双子の父親は、愛する女と子供達。母親は、子供達。兄は妹。妹は兄。残された家族の為に必死に足掻くこの一家を、ヘンデスは理解出来なかった。彼が命を張って約束を守り続けるのは、他の誰でもない。自分の為だ。

「そんなの決まってるじゃない」

少女は胸を張り、自信に溢れた声で断言した。

「他人じゃなくて大事な家族だもん」

「そっいうもんか」

実感が湧かず適当な返事をしたヘンデスに、蔑みの視線が向けられる。

「どうせあんたには一生分かんない！」

「だろっうなあ」

のんびりと肯定する。

他人事だと突き放している様子のヘンデスを、少女は睨み付けた。

「あなた、本当にバカ」

唐突な罵倒に、ヘンデスは鋭い視線を返す。  
が、少女は怯まなかった。

「お兄ちゃんは、あなたのことも家族だっと思ってたのに！」  
「昔はな」

父親だと信じていた頃の話だろう、と流したのだが。

「ちがう！ それからだっってお兄ちゃんはあなたの味方してた！」

思い出す。父親ではないと告白してからも、確かに兄はヘンデスの味方であろうとしてきた。いつだって尊敬と親愛の情のこもった眼差しを送ってきた。少年の父親と同じように。

悪事に荷担させてからだろう。その瞳に曇りがかかってきたのは、けれど、ヘンデスは決して後悔しない。必要なことだったと割りきっているから。

今回も同様だ。

「流石のあいつも、もう現実を見るだろう」

妹が売られたと知れば、兄がヘンデスに信頼を置くことはなくなる。それはヘンデスにとって不利益にはならない。

「あなたって本当にさいあくね！ 子供心をもてあそばないで！」

何を主張したいのかさっぱり分からない台詞に、首を傾げる。

「大けがしてから私のくんれん無くなった」

「傷だらけだと売り値が下がるだろう」

「今日、ケーキ買ってきてくれた」

「お前がねだったからだ」

分からないながらも、律儀に疑問に答えていく。

そもそもケーキはアリスから出した条件だった。売られていくのを了承する代わりに、最後美味しい物を食べさせろ、と。それで交渉が上手くいくならとヘンデスは了承しただけだ。

「そついうの、お兄ちゃんごかいする」

落ち着いた声音で説明され、ヘンデスは漸く腑におちた。けれども、だからといって今後の対応を変えるつもりはない。全てはもう決まったことなのだ。少女が売られることも。明日それを知ることになる少年がヘンデスを憎んでも、それは必要なことだ。だからヘンデスは話をはぐらかす。

「お前はルークが迎えに行くのを大人しく待っていれば良い」

少女は不満気に、けれどしつかりと頷いた。

それを確認し、歩き出しながら最終的な打ち合わせに入る。

「良いか、俺達は命を狙われている。だから、お前は姿も名前も変える。今日からお前の名前は」

辺り一面に血の臭いが蔓延していた。その部屋に、命ある者は一人だけ。その内の一人が声を張り上げた。

「ま、待ってくれ！」

両手を上げ、戦意がないことを示す。彼の武器である拳銃は、既に床に落ちており、その役目を果たせない。最も先程男の仲間が撃った弾丸は全て棒で弾かれており、手元にあっても意味をなさないのだが。

「だからさ、俺はただ質問に答えて欲しいだけなんだ」

黒く長い棒を肩にぽんと乗せながらそう要求するのは、十歳前後の少年。棒が後ろの壁に当たった瞬間ひびが入る。

「だから知らねえって言うてるだろう！ アリスなんていう餓鬼来てねえよ！」

男はつい先程確認した売買記録に視線を向けながら叫んだ。

「そんなはずない。住所も店の名前も合ってるし。俺と同じ茶髪で蒼い目の女の子が一年前ここに売られてきたはずなんだ」

淡々とした口調ながら、少年の瞳は暗い欲望に囚われていた。理性的にみえながら、その実怒りに支配されている。そのことは、周りに散らばる死体を見れば明らかだった。

「だから知らねえって言うてるじゃないか！ 大体一年前のことなんか」

男の目はそれを捉えることが出来なかった。ただ聴覚が、皮膚が、風を捉えた。

側頭部に少年が回した棒がめり込む。ぐちゅっと臓器が潰れた音に続き、男は地に倒れ伏した。

「本当、簡単に死んじゃうんだよな、人って」

棒をふるった少年は、地に伏した男達の内適当な者の服で棒に付いてしまった汚れを綺麗に拭き取る。そうしてから部屋を見渡した。照明の暗い部屋。地下ゆえ、外の光は入って来ない。唯一明るい光を放っているパソコンに近付き、それをいじくる。

いくら探しても、求める人の情報は手に入らなかった。苛立ちのまま、パソコンを殴りつける。途端に、部屋は薄闇に包まれた。

「くそっ」

ポケットから取り出した紙片をびりびりに破っても、怒りは収まらなかった。

少年は知らない。親代わりが、少年が死ぬ可能性を高いとみて妹の手掛かりを最小限しか残さなかったことを。生き残っていたら少女の姿や名前を変えることくらい予想出来るだろう、と少年を過大評価していたことを。

怒りに囚われた少年がその事実気付いたのは、建物ごと破壊して近くの町に移り、一息ついてからだった。

7

少女は満面の笑みを浮かべたまま、右腕を更に進めた。既に右手

に握ったナイフは目の前の男の腹部に埋まっている。

「なっ、にを」

何が起こっているのか、男には理解出来なかった。

男は夜の相手として少女を呼んだはずだった。その相手にキスをしようと肩に手をかけ、上体を屈めた矢先のことだった。

「ごめんね、おじさん。私、殺し屋なの」

少女は笑みを絶やさない。

「だから早く死んで？ このへんたい野郎」

ぐりつとナイフを回しながら引き摺り出す。内臓か血が分からない物が一緒に出てきたが、少女は気にせず身を引いた。

ずるりと男は前のめりに倒れ込む。

「死んだ？ ねえ、死んだ？」

ひくひくと痙攣を繰り返し、やがて動かなくなった男を爪先でひっくり返す。胸に耳を当て、死んでいることを確認した少女は、手早く血にまみれた服を着替えて服とナイフを手持ちのバッグに放り込む。

そして軽快な足取りでホテルを後にし、手慣れた仕草で携帯電話を操作した。

「もしもし。お仕事終わりました。今から帰ります」

電話の向こうからは勞いの言葉と寄り道しないように注意の言葉

がかけられる。そして最後に電話の相手は付け足した。

「早く帰って来なさい、リリイ」

リリイと呼ばれた少女は小さく眉をしかめて、けれど大人しく頷き通話を切った。

携帯電話をポケットにしまい、小さく呟く。

「早くお兄ちゃん迎えに来てくれないかな」

家族編 裏話（後書き）

家族編の捏造設定

ゾルディック家の使用人事情

イルミとヒソカ、シルバの少年時代の様子

あと一〜三話を二話にまとめていじりました（11/1）

## 邂逅

派手な銃声音に、悲鳴の大合唱。

「先越されちゃったか」

とあるマフィアのマジトの裏口に放置された死体を無感動に眺めながら、一人呟く。見上げれば、ビルの十階辺りの窓ガラスが割れたところだった。落ちてくる破片は満月の光を反射して幻想的な光景を作り出している。少し遅れて黒い影も落ちてきた。ゆっくりと落下したそれは、少し離れた地面に血溜まりを作る。

「帰ろうかな」

まだ騒音は収まりそうもない。完全に興を削がれた形だ。

そして背を向けた時だった。反射的に振り返り、背負った棒を抜き取り両手で構える。

裏口の向こうから少しずつ近付いてくる、強者の気配。

周囲の気配を感知するため、身に纏うオーラを3mの円になるよう広げて警戒を高める。

やがて足音が聞こえるようになった。一步一步近付いてくる相手は、恐らく此方に気付いているだろう。しかしその歩みは淀みない。そして、半開きのまま放置されていた扉は、音を立てながら開かれた。

「あれ？」

そんな気の抜けた声を上げた相手を、思わず凝視した。

歳は俺と同じくらいだろう。黒髪に黒目の整った顔立ちの少年。黒ずくめの服には、分かりにくいながらも血痕がこびりつき、また血の臭いを撒き散らしている。両手で大事そうに抱えた箱は、恐らくマフィアから盗んだ物だろう。そう、この少年がマフィアを襲撃した犯人だとすぐに分かった。未だビルの中から悲鳴は途切れない。彼の仲間がいるはずだから気を付けなければ、そう思つても、視線は吸い付いたように彼から離れなかった。

少年は、その黒い瞳からぼろぼろと涙を吐き出していた。

「変なところ、見せちゃったね」

箱を落とさないようにしながらぐいつと袖で涙を拭う。そんな幼い仕草の後、彼は憂いを残しながらも完璧な笑みを浮かべた。

「君は何をしにきたの？」

両手が塞がっている彼に警戒の気配は無い。けれど、気を抜く訳にはいかなかった。まだ彼は俺の円の範囲にいない。だが、見える彼が纏うオーラは力強く揺るぎない。その優美さは、ゾルディックの息子のそれに劣らない。恐らく念を使えるのだろう。そして俺より強い。決して油断してはいけない。

「あなた、何者？」

脇に力を込める。そうしなければ、今にも手先が震えだしそうだった。

彼は、笑みを崩さぬまま朗らかに答える。

「盗賊だよ」

天を仰いでこの世を呪いたくなった。

この世界は一体なんなのだろう。俺と同年代らしき暗殺者や盗賊が存在する。しかも揃いも揃って俺より強いときた。

これがこの世界の常識か？ 自分に問うて、すぐに否定する。だって、今まで俺が相対した大人は弱かった。念をろくに知らない。念使いも中にはいたが、俺を鍛えた男の方が遥かに強かった。

「で、邪魔はする気はないんだけど。この場合俺はあなたの敵になるの？」

出来れば戦いたくない。俺はこんな所で死ぬ気はない。まだ、果たさなくてはならない約束が残っている。

少年はあっさりと首をふった。

「もう俺達の用事は終わったから」

その言葉を素直に受け入れふわわけではないが、ゆっくりと棒を下ろす。無闇に相手の警戒を煽るのは愚策だ。そう判断する。いつでも戦闘態勢に入れるよう、円はそのまま。

「で、君はどうして此処にいるの？」

音を立てぬ足さばきですっと近寄ってきた少年は、俺の円に入らないぎりぎりの線でぴたっと止まる。此方の警戒には気付いているだろうに、それを欠片も感じさせない真っ直ぐな視線が突き刺さる。その黒い瞳は先程の影響か、潤んでいた。

答える気のない質問をそのままに、逆に疑問を口にする。

「何で泣いてたの？」

不思議だったのだ。俺の知る強者は、人間らしい感情を切り捨てていた。親代わりも、暗殺者の少年も。最期まで俺は、親代わりの涙を見ることはなかったし、彼は俺が泣くことを快く思っていなかった。感情を無くすことを、望んでいたように思う。少年は頷き、すんなりと答えをくれた。

「仲間が死んだんだ」

口の中が乾いて上手く動かない。正体不明の衝撃が頭を揺さぶる。

「ねえ、君は何で此処にいるの？」

再び繰り返された質問に、不思議と勝手に口が動いた。

「探しているものが、見つからないんだ」

ずっとずっと探しているのに、手掛かりすら掴めない。三年近くが経ち、もはや自分は探しているのか、それとも見つからない苛立ちをぶつけているだけなのかも分からなくなってきた。

心情を引き出した少年は、一瞬真顔になり、その端正な口許を悪どく歪めた。すぐに朗らかな笑みに戻った上、暗闇に紛れていたので見間違いかもしれない。けれども、嫌な予感に警戒を引き上げる。

「それは、辛いね」

同情を色濃く滲ませた声音に、胡散臭さは増すばかり。

「良かったら、手伝おうか？」

何気ない動きで少年は一步踏み出し、俺の円の中にすりと入り込む。その瞬間、身体が強張った。

圧倒的な力の差を感じてしまったのだ。棒を構えようとするも、上手く手に力が入らない。足が勝手に震え出す。完全に身体が鈍っていた。この三年間、自分よりも強い者が現れなかったことに胡座をかいていた。そんな情けない自分に舌打ちをもらす。

「詳しい話を聞くから、俺達のアジトに行こうよ」

口許は笑みながら、明らかに目が語っていた。ついてこなければ殺す、と。

ゆっくりと身体のを抜く。抵抗を試みようとするちっぽけな自尊心を、生きる為だと宥めてやる。

「分かった」

けれど、せめてもの意地で少年を睨み付けた。

「良かった」

ふわりと表情を弛ませる様は、此方の怒気を全く考慮していないことがありありと分かる。むしろ面白がっているのでは、と勘繰りたくなる程だ。

「じゃあちよっと頼みがあるんだけど」

そう言いながら少年は俺を通り越し、暗闇に声をかける。

「パク」

反射的に振り向いた。少年に背を見せるなど愚かな行為だと分かっていたが、彼ほどの力の持ち主ならば正面からでも敵わないのだから今更だ。それよりも、彼以外の存在に気付けなかったことに衝撃を受けた。

暗闇から、一つの影が進み出る。白いワンピースが満月の光を受けてその姿を浮かび上がらせていた。

「団長」

よく通る声。出てきたのは背もそんなに変わらない女の子だった。やはり綺麗なオーラを纏っている。

知らず冷や汗が出てきた。この子もそうだし、まだ建物内で暴れている恐らく複数人もそれなりの実力の持ち主だろう。少女だけなら多分倒せるが、仲間がいることを考えれば絶対に敵に回したくない。というのに、退路を塞がれているから逃げられない。

「彼女はパクノダ。足を挫いてしまったから、君に運んでもらいたいんだ」

不可解な台詞に眉をしかめる。が、意味を問う前に批難の声を上げたのは少女だった。

「団長！ 最初からそのつもりで!？」

女のわめき声ほど耳に煩いものはない。アリスは別だけれど。遠慮なく不快感を示す為に耳を塞げば、睨み付けられた。

「パク」

静かな低い声。それだけで少女は顔を歪めながらも大人しくなっ

た。如実に感じられる力関係。

「分かったわ」

嫌々という感じに溜め息を吐きながら、少女は右足を若干引き摺りながら寄ってきた。両手は空。きつと此方に与えられた人質、と捉えて良いのだろう。随分と気前の良いことだ。

全てが黒髪の少年の思い通りに進むのは癪に障るが、他に選択肢はない。仕方なく少女に近寄り、遠慮なくワンピースの上から手を這わせる。

「ちよつと」

不快げな声に答える気はない。後ろの少年に咎める様子はないから、このくらいは許されているのだろう。

案の定、左の太股と背中に固い感触。一応振り返り、許可を求めらる。

「武器、没収しても良い？」

愉しげな笑みを浮かべながら観察していたらしい少年は頷き、少女へと促した。

「パク」

心底嫌そうに顔を歪ませながらも、彼女は自分から武器を取り出した。服の内から現れたのは二丁の拳銃。

「じゃあ少し預かる」

手渡された時、初めてその顔を正面から目にした。  
透き通るような白い肌。切れ長の瞳に、高い鼻。可愛くはないが、  
妙に印象的な顔立ちだ。

「何？」

ついじろじろ眺めてしまったせいで更なる不快感を煽ってしまったようだ。別に構わないんだけど。

少しだけ悩んで銃を胸の内側部分にあるポケットに入れ、棒を背負い直してから少女を右肩に担ぎ上げた。これなら左手を使えるから何かあった時に少女を殺せる。

そう考えながらも、多分少女が俺の手の内にある間は、少年は手出ししないだろうという確信はあった。根拠は、先程の少年の涙だ。仲間が死んで泣いた少年は、恐らく仲間の少女を悪戯に裏切ったりはしない。

そこまで考えて、苦笑いがもれる。少年の言葉を鵜呑みにしていた自分に、嘘かもしれない可能性に、今更気付いた。

けれども大人しくされるがまま抱き上げられた少女は、抵抗する様子もない。少年を信用しているのか。それとも見た感じは俺より弱そうだけれど、切り札でも持っているのだろうか。

「行こうか」

声に思考が引き戻される。少年に視線を向ければ、真っ直ぐでいて底知れない光を湛えた瞳とぶつかった。

途端に先程までの考えが霧散する。少年の意図は分からない。けれども、この場で一番の強者は彼だ。結局俺が出来ることなんて、少女に殺されないよう警戒する、その程度だ。不意について少女を使い逃走する、のは少々厳しい。

「早く行きなさいよ」

背中の方から聞こえた声に、覚悟を決めた。今は従う。けれど絶対に生き残ってやる、と。

それから風を切るように疾走する少年の少し後ろにぴったりついたのだが。

「なあ、あんたの空いてる片手でこいつを担げば良かったんじゃないのか？」

少年は大事そうに左腕で抱えた箱を見て、それからちらりと俺を振り返った。

「だって、君は両手が空いているだろう？」

理屈が通っているようで、答えになっていない。反論しようと思いを開きかけたが、いつの間にか速度を落とし真横に並んだ少年が先に言葉を発する。

「そついえば、君の名前は？ 俺はクロク。そつちがパクノダ」

軽快な口調に、人当たりの良い笑顔。考える前に答えは出ていた。

「ヘンデス」

誰にも本名を明かす気はなかった。次に俺の名を呼ぶのは、アリスが良かったから。



## 邂逅（後書き）

蜘蛛編では捏造設定多いので、一話ずつあとがきに明記していきます

邂逅の捏造設定

旅団結成してすぐ一人死んだことに 原作には初期メンバーの詳細なし

少年期クロクの外面口調を捏造

## 勧誘

結構な速度で路地を走り抜け、時折建物の上を飛び越えながらも、クロ口と名乗った少年は次々と質問を放ってきた。

探しものは何なのか。誰か師事している人間がいるのか。どうでも良いような家族構成から年齢まで。

歳くらいは本当のところを答えたが、後は全て適当に流した。試しに此方から質問を放ってみれば、クロ口はあっさりと全てに答えてくれる。

歳は俺と同じ十三歳。幻影旅団という名の盗賊団で団長と呼ばれる立場にあること。盗賊団のメンバーは全部で十二人。全員が同年代で念使い。発足したてなので、まだ盗賊団の名は売れていない。そして今日は、死んだ仲間が欲しがっていた物を盗る為に全員で襲撃を仕掛けた、と。

「因みに中身は？」

終始友好的な態度に、警戒しながらも話が弾んでしまう。クロ口は此方にちらりと視線をやって笑いながら答えた。

「人魚の肉」

すぐに前へと視線を戻したから、表情は読めない。いや、表情を読ませない相手だから元々意味はないのだが。

ひとまず天を仰いでみたが、生憎と月は雲に隠れて心を晴らしてはくれなかった。

果たして人魚は実在するのか。何故マフィアが人魚の肉を持っているのか。そもそも人魚の肉って美味しいのか。その死んだ仲間は

どんな趣味をしていやがるのだ。

つらつらと思いを重ね、クロ口の持つ箱に視線をやる。

「外に出していたら腐らない？」

「氷入れているから大丈夫」

「そっか」

どうでもいい質問をしてしまったとは思って、時間は巻き戻らない。間抜けなやり取りに脱力してしまい、それ以上突っ込む気もなくなった。

「それに、もうすぐだから」

右手の指先で示された方に目をやれば、少し先に廃屋群が見えた。工業団地の跡地。分からないように小さく眉をしかめる。その内の一つが今の俺の寢床だったから。無事生き延びたらすぐに他の土地に行こう。そう心に決める。

それから十分もしない内に彼らの目的地に辿り着く。俺の寢床と反対側に位置していることに、少しだけ安堵した。

壊れかけた入り口の扉を、クロ口はゆっくりと開く。そして扉を片手で支えたまま、俺と視線を合わせて完璧な微笑を見せた。

「ようこそ、幻影旅団のアジトへ」

身体中の産毛が逆立った気がした。逃げられない。それをここにきて再度実感し、鼓動が速まる。この感情は恐怖ではないと言いつける。

何故だろう。こんな時に思い出してしまった。親代わりの言葉。絶対的強者と対峙する時の心得。

『逃げる』

その一、敵前逃亡。プライドより命をとること。

『逃げられない場合は、臆すな。緊張するのは仕方ない。だが、それは興奮からだ。強者と戦うことが出来る喜びからだ。そう思い込め』

その二、自己暗示。恐怖を歓喜にすり替える。

思い出して、深く息を吐き出す。視線を上げれば、悠然と佇み強者の余裕でもって此方の動きを見守る少年が目に入った。

無理だつて、そう親代わりに愚痴を吐く。だつて俺は戦うのが好きとか口が裂けても言えない。出来れば強者との戦いは遠慮したい。今まで好き勝手出来たのは、相手が弱者だったからだ。そういう卑怯な心根を、ここへきて実感した。

でもな、そう危機に萎縮する身体に言い聞かせてやる。でも、今この場を切り抜けられるかは自分次第だ。何処からも助けは来ないならば虚勢を張ろう。精一杯足掻いてやろう。脳裏に描いた妹の笑顔を現実でもう一度目にする為に。

前を向き、一步一步慎重に足を踏み出す。畏に気を付けながら。建物の中から人の気配はしないけれど、いるかもしれないという心構えはしておく。

中は外観同様寂れていた。元はマンションのホールだったのだろう。ただっ広い空間にゴミは散乱しているが、生活臭のする家具らしきものは一切ない。アジトといっても一時的なものなのだろうと容易く推測できた。

適当な端っこに少女を下ろしてやれば、耳に嫌な音が響く。振り

返れば案の定扉が閉められており、クロロが番人のように扉に寄りかかっていた。もう、逃げられない。

「電気は？」

暗いと指摘すれば、クロロは残念そうに首を振る。それは一体何を意味するのか。本当に電気が通っていないのか。それともクロロが電気を付ける隙をみて俺が逃げると思っているのか。俺の寝床も電気が通っていないから、単純に前者の可能性もある。が、真相は分からない。

一先ずいつでも人質にとれるよう少女の傍からは動かず、薄闇に浮かび上がる少年を注視した。

「何で俺を此処に連れて来たの？」

慎重に問いを発する。先程までとは違い、一言一言に注意を払う。此処は彼らの本拠地。圧倒的に不利な立場で、油断一つが命取りになる。

少年はちらりと少女に目を向けて俺の質問を無視した。

「パク。どうだった？ 問題はあったか？」

口調ががらりと変化した。親しみ易さを削ぎ落とし、冷たさが前面に出た硬質な声質。

視線を横に向ければ、少女は床に座ったまま首を振った。

「残念ながら」

「不満そうだな」

「勿論」

当事者であるはずの俺を置いて話は進む。

「外の人間は、信用出来ないわ」

しかし、少女の台詞にはつい納得してしまった。外の人間は俺を指すのだろう。俺は、信用足る人間ではない。俺が欲しいのはアリスの信用だけだ。

「信用出来なくて良いさ。欲しいものを奪い取る。それが出来ればな」

クロクの台詞に、頭の中で警鐘が鳴り響く。此処にいては、その言葉の続きを聞いてはいけない。予想出来るからこそ、先に口を開いた。

「俺、これでも忙しいんだ。その子も無事に送り届けたし、帰るよ」  
「そう焦るな」

どうやって逃げようか、視線を巡らせれば、わざとらしくクロクは視界に入ってきた。

「幻影旅団に入らないか？」

言わせてしまった、そんな後悔が頭をよぎる。髪の毛をぐしゃぐしゃにかき混ぜて苛立ちを発散させたい、なんていう欲求を何とか押し込めて真顔でクロクを見据える。

「何で？」

意味が分からなかった。クロクより圧倒的に弱い俺を勧誘する意

味が見出だせない。

「お前、最近噂のマフィア狩りだろう？」

ついに人称が君からお前に変わってしまった。本性を隠すことを止めたらしいクロロの言葉に、元々目を付けられていたのだと悟る。

「へえ。そんな噂があるんだ」

せめてもの抵抗ですつとぼけてみた。実際、証拠はないはずだった。襲撃した先では皆殺し。目撃者も共犯者である情報屋も全て殺した。親代わりの教え通り。アリスに迷惑かけたら駄目だから。ただ、既に噂になってのことだけは知っていた。

「ああ。因みに正確にはマフィアじゃないな。襲撃を受けたのは全てマフィアの末端、人身売買に関わっている組織だ。まあそんなことはどうでもいいか。ヘンデス、さっき言った通り俺はお前の助けになれるかもしれない。お前の探し物は何だ？」

言ってから、クロロは持ち込まれたのだろう雑多に溢れた物の中から手近な木箱を選んで座った。敵意が無いことを示す為か、圧倒的優位にあることを余裕でもって示す為か、足を組み合わせる。そして、さあどう答えるのだと面白がるような視線を俺に向けた。見上げられているはずなのに、まるで遙か高みから全てを見透かされているような圧迫感に、拳を握り締め堪える。身を削り取られそうな緊迫感がそこにはあった。

「俺は」

先程は曖昧に濁した答えを、口の中で準備する。身体中の血が沸

騰したかのように興奮しているのは、クロロへの恐怖故か。それともアリスを不遇へ追いやった親代わりや人身売買組織の連中に対する怒り故か。

「売られた妹を探している」

これを口に出すのは何回目になるのだろう。もう数えることさえ忘れてしまった。偉そうに立ちはだかる連中に、そして見せしめ後は一転泣き叫び無様に許しを乞う連中に同じ問いを繰り返し、返ってくるのは決まって同じ言葉。

『知らない』

『覚えてない』

沸き上がる憤りを、ありありと思い出せる。人間を使い捨てにする連中に、慈悲など必要なかった。

「分かった」

真っ赤な過去に占拠された視界が、黒に切り替わる。薄闇の奥、クロロの視線が俺を真っ直ぐ射抜く。

「一緒に探そう」

空耳ではないのか、まず疑った。まじまじと見詰めるが、底を見せない黒い瞳は揺るがない。言葉のない空間に、喉をならした音がいやに響いた。

「ははっ」

堪えきれず吹き出した想いを音にして出せば、それは笑い声となつて空気を伝播する。痙攣する腹を両手で押さえてやる。横に座る少女から訝しげな視線を受けるが、笑いを抑える気は更々無かつた。とてつもなく滑稽だつた。全てが滑稽でたまらなかつた。

「三年だ」

笑いの波が途切れるのを待ち、腹の底から声を絞り出す。

「三年掛けたつて何も分からなかつた。あんたは一体何を手伝つてくれる？」

考え得る手は全て打つた。次こそは、次こそは、そう言い聞かせて必死に自分を鼓舞して孤独に耐えてきた。アリスは既に何処にもいないのではないか、そもそもその存在すら寂しさが作り出した幻想ではないのだろうか、そんな不安に襲われもした。だつてアリスを知っているのは、もう俺しかないんだ。それでも、疑いながらも、アリスを探さずにはいられなかつた。彼女と交わした約束しか今の俺には残されていないのだから。

けれども滑稽だつたのだ。ちつぽけな子供の妄想もどきを、あの日の大人のように冗談とみなさなかつたクロロが。俺の言葉を受け入れ、あまつさえ救いの手を差し伸べようとしているクロロが。

「俺達なら出来る」

「嘘つき」

確かにクロロは強いかもしれない。けれども結局はちつぽけな盗賊団に出来ることなどたかが知れている。世界を知らない故だろう、自信に満ちた同い年の少年が堪らなく滑稽だつた。

けれども一番滑稽だつたのは。

「仲間になれ、ヘンデス。そしたら助けてやる」

絶対に畏だと直感が働いているにも関わらず、その手を取りたくなっている自分が、心揺れている自分が、一番滑稽だ。

マフィアを襲撃するのはアリスの為だから構わない。人を殺すことも、もう躊躇わない。けれど、独りきりは寂しい。何処で情報が洩れるか分からないからあまり人と関わらない三年だった。他人など期待してはいけなさと己のみを頼りに気を張り詰めていた三年だった。それでも、アリスは未だ見つからない。

クロ口の真つ直ぐでいて厳しい視線を痛い程に感じる。俺はいつもこうだ。重要な時に限って答えを急かされる。考える時間を与えてもらえない。それで答えて結局後悔することになる。分かっているけれど、今回も観念するしかなかった。

「断ったら俺はどうなるの？」

「マフィアにつきだして金をもらおう」

本気が脅し文句か区別は付かない。ただ、俺の存在に懸賞金がかけられていることは確かだった。

肺の空気を吐き出し、新鮮な空気を取り込む。埃まみれでちっとも気は晴れない。

「ヘンデスだ。短い間だと思っけど、宜しく」

寂しい。確かに寂しいけれど、心まで預ける気はなかった。それ故偽名を押し通す。アリスを見付けるまでは、独りきりで良い。それがこの短い時間に出た結論。それまでクロ口を利用してやる。生き抜く為に屈してやる。

そこに、横槍が入った。

「団長。ヘンデスじゃない。こいつの名前、ルークよ」

今まで沈黙を保っていた少女が唐突に放った言葉に、思考が固まる。

「そうか。他には？」

「団長の読み通り後ろ盾はなし。本当に一人ね。武術と念を教えた親代わりはもう死んでいるわ」

当然のように交わされる話についていけない。

何故知っている？ 疑問符が頭を支配する中、呆然と眺めていた少女が不意に此方を向いた。オーラを纏うその姿に、答えが頭に浮かぶ。念能力。全ての小さな疑問が一つに繋がっていく。少女を俺に運ばせ、此処に辿り着くまで様々な質問を放ってきたクロコ。恐らく接触が少女の念の発動条件。質問に正直に答えさせるような操作系の念能力ではない。むしろ、質問の答えを読み取る、その心を読み取るような能力。

少女は俺に向けて嘲るように口端を持ち上げた。

「可愛い妹さん。アリスっていうのよね。親代わりに売られちゃうなんて可哀想」

頭に血が昇った。何も考えられなかった。小さく息を吐き出しながら、何度も繰り返された動作をなぞるように手が最小限の動きで棒を引き抜く。目は少女を捉えたまま、床を蹴り付け上から脳天目掛けて棒を振り下ろした。

## 勧誘（後書き）

### 捏造設定

ククロロが13歳の頃に幻影旅団結成したことに 原作で描写なし

ここではククロロ

他人の質問でもパクノダの能力が有効であると捏造 原作ではパクノダ自身の質問でなければならぬような描写

## 入団

少女はじつと目を開いたまま俺の顔を見詰めていた。動じる様子は欠片もない。

風が生まれる。金属音が鳴り響き、遅れて俺の目はそれを捉えた。中華風の服を着た小柄な少年。細い両の瞳はこれ以上ない程に釣り上がり、此方をぎりぎらとした憎しみでもって睨み付けている。

「馬鹿力ね」

神経質そうな声のあと、愉しげに笑う。

「でもウボオーより弱いよ」

「あつたりめえだろう!」

又しても新たな声。背を向けていた入り口に蠢く強者の気配。多過ぎる。何人だ?

「お帰りなさい。皆無事?」

「無事だけど。何? 侵入者?」

足に、腕に、力をこめて正面の男を力任せに叩き潰そうとした時だった。

「いや、新入りだ」

クロコの声に反応し、間近にある細い目が愉悦に笑む。瞬間、右にずれたと思っただけ棒を左に流された。崩された体勢に、迫りくる

何か。咄嗟に床を蹴り、後ろに飛び退いて棒で何かを弾き飛ばす。が、次々にそれは襲いくる。一撃一撃は軽いのに、目が追い付かない程に速い。

「はあ？ 何言ってるんだよ、団長」

「私も聞いてない。どういうこと？」

「ああ。今言った」

避けきれない小振りのナイフは、小さな切り傷を確実に刻んでくる。もし毒が塗られていたら、もしくは傷を作ること発動する念能力だったら既に俺は負けている。分かっているが、息もつかせないような攻撃に、防御で手一杯だ。

「蜘蛛の手足は12本だ。足りなくなれば補充する」

「団長……」

「ちょっと待てよ。メンバー増やすのはまあ良いとしてだ。そいつは何者なんだよ。流星街の奴じゃねえだろ？」

「ルークだ」

「そうじゃなくてだな」

速さを武器にしている相手に勝つ方法は二つ。相手の足を止めさせる、または相手の速さを上回る。後者は無理だ。たとえ棒を捨てても純粋な肉体の速さじゃ敵わない。となると選択肢は一つしかない。

防御に徹しながら、淡々と隙を伺う。

「噂のマフィア狩り、でしょ。まさかこんなに若いとは思わなかったな。俺の情報網にもなかなか掴まらなかったし。ね、クロロ。今回は俺のお手柄じゃない？」

「シャルは黙ってな」

「つてかおめえ知ってたのか？」

「まあね。団長に調べるって言われてたし」

「そもそもあいつ強いのか？ フェイに殺られそうだけど」

額を切られ、血が目にかすった。

「全然よ。団長。こいつ殺して良いね？」

金属音と共に、ナイフで棒を受け止める。今しかない。ほんの僅か、相手だけに分かるよう力を抜く。少年は勝利を確信し、にたりと笑った。

「ああ。ここで殺られるようなら要らない」

両手から右手に棒を持ちかえ、迫るナイフを避けるように片膝を床に落とし、上体を屈める。髪をこっそり切られたが、気にしない。右腕を大きく振るうのと同時に、左手にオーラを集める。

足払いをかけられた少年は、軽やかに空に飛んだ。1mの棒が届かない安全圏へ。足場のない、速さを生かせない空間へ。

「こんな所で死ぬるか」

右手の棒を手放す寸前、左の掌からオーラの固まりが噴出する。

それは忽ち物質を形造った。細く長いそれは、ぐんぐん伸びる。

俺が普段背負っている棒はオーラで覆っているが、それだけだ。念能力の発ではない。勿論ただの棒で大概の相手は殺れる。だが、それが効かない相手。特に念能力者相手の場合は、俺も発を使う。始めに手持ちの棒を使うのは、油断を誘う為だ。間合いを勘違いさせる為。

少年が飛び上がるのと同時に、形を成したオーラの棒は少年を追

うように一直線に伸びていく。1 mを越えて。

「甘いね」

少年は空中で体勢を変え、胸を突くはずだったオーラの棒は空を突いた。ひらひらとした服の中から取り出したのだろう、黒光りした刃物が頭上が飛んでくる。避けようとすれば避けられるそれをそのままに、具現化した棒にオーラを集中させた。

確かに相手は速い。目で追えない。けれどこの伸縮する棒、そのままの名前だが如意棒を操作するだけなら速さに追い付ける自信があった。相手の動きが見えないならば、予測出来る動きをさせてそれに対応すれば良い。

少年は崩れた体勢のまま、正面に突き出された如意棒を蹴って後ろに飛ばうとした。俺の予想通りに。

1 mちよつと、少年の小さな身体分だけ如意棒を縮ませる。足場のなくなった少年の身体は更に横へと倒れる形で安定を失った。

左手に握り締めた如意棒をほんの少し傾ける。左肩に、右脇腹に、先程投げられた刃物が突き刺さった。更に少年は闘志を失わず、くないのような物を投げてくる。でも、これで終わり。

勢いを付けて如意棒を伸ばした。少年の腹目掛けて。何処までも伸びるそれは、壁に少年を突き刺したところで消滅する。

小さく息を吐いたところで、遅れて痛みが襲ってきた。ふと視線を落とせば左手の甲にくないが突き刺さっている。この衝撃で如意棒を落としてしまったらしい。俺は放出系と相性が悪いらしく、身体との接触が断たれればすぐに如意棒は消滅してしまう。今後の課題だな、と思いつつ身体に刺さった物を一つ一つ抜いていった。

しんと静まりかえった空間で、未だ興奮はさめない。ぐるりと辺りに視線を巡らせ、いつの間にか増えている少年少女の中に目的の人物を見付ける。もう、彼女しか視界に入らなかった。

「お前の能力面白えな！」

「次は俺とやるっぜ」

「ちよっと。まだ話は終わってないよ」

掛けられる声も全て聞き流す。水平に上げた左手に再びオーラを集中させる。

「あんた、ルークだっけ？ 団員同士のマジ切れ禁止だよ」

近付いてきた少女が強引に視界に割り入ってきた。仕方なく視線を合わせれば睨み付けられる。

「退いてくれる？」

眉をしかめながらも、動く気配のない少女。

「クロロ。よく分からないけどさ、俺はパクっていう女を殺したいだけなんだ」

瞬間、凄まじい量の殺気が向けられる。けれど感覚が麻痺してしまったかのように、何も感じなかった。

可哀想？ アリスが？ 俺が？ 売られちゃったから？ どうせあんたらにとっては他人事だろうよ。どんな感想もったって構わない。だからって言われて良い気がしないのは当然だろう？

「パク」

クロロの呼び掛けにすつと少女は立ち上がった。俺の前に立ちはだかる少女の肩を叩き、後ろに退かせた。

「有難う、マチ。大丈夫よ」

いつでも援護出来るようにだろう、武器らしき糸を握り締めたま  
ま後ろに下がった少女の鋭い視線は無視する。

パク何とかという名の少女は、俺をじっと見詰めたまま口を開い  
た。

「団長の命令だから謝るわ。ごめんなさい」

そのまま颯爽と身を翻す少女。怪我を負った足を引き摺りなが  
らも真つ直ぐ歩き、元の場所にさっさと座り込む。

「今の、謝罪？」

頭を掻きながら、クロクを流し見る。

「ああ。謝罪だな」

「そっか」

あまりにも堂々とした中身の無い謝罪に、呆気にとられてしまっ  
た。未だ怒りは完全に取り払われてはいない。けれども、殺意は消  
えていた。

ゆっくりと左手を下ろす。くるりと振り返り、先程の攻防の最中  
手放した棒を取りに行った。

「ねえ、団長。さっきの話、本気？」

「俺は良いと思うけど」

「シャルは黙ってな」

背後で交わされる論争に口を挟む必要は感じられなかった。むし

る良い機会だと思い、じつと聞き耳を立てる。この盗賊団が仲間割れしているのなら、俺にとって都合が良い。別に入りたくて入ると決めた訳ではないのだし。

埃にまみれてしまった棒を右手で拾い、上着の裾で汚れを拭いた。多少荒い扱いをしても壊れない丈夫な棒だ。親代わりは随分と奮発してあつらえてくれたらしい。

「流星街の人間でないと駄目か？　俺達は一体何の為にあそこを出た？」

嫌な予感。棒を背負い直し、振り返れば輪の中心にクロロがいた。低い静かな声に、皆が注目している。一、二、と数えてみればクロロの他には十人。壁の傍でへたっている少年を入れれば十一人で盗賊団のメンバーが勢ぞろい。先程騒がしかった連中全員が、団長であるクロロの声に耳を傾けている。

どうやら期待は裏切られたようだ。

「ちっぽけな街に満足出来なくなったからだろう？　違うか？　ノブナガ」

「その通りだ、団長」

クロロがいる限りこの集団で仲間割れは有り得ない、それをまざまざと見せつけられる。

「俺達は得体の知れない鼠一匹増えたくらいでどうにかなるような集団か？　答える、マチ」

「違う」

少女の即答に、満足そうに頷くクロロ。大した自信だと白けた目で眺める俺を、クロロは真っ直ぐ見詰めてきた。

「あいつはルーク。見ての通り念も使える。血縁者は一人。売られた妹を探しているらしい。シャル、手伝ってやれ」

「オーケー」

一人の少年が此方を見て人なつっこそうな笑みを浮かべた。クロロの笑みとは違うがこれまた裏のありそうな奴だ、と要注意人物として頭に刻み付ける。こいつらを信用なんか、絶対にしない。

「今から新たな旅団のメンバーだ。アーティー、旅団入りの儀式を」

両手を広げてクロロが歓迎の意を示した時だった。瓦礫の崩れる音が広い空間に響く。

視線をやれば、先程ぶつ飛ばした少年が闘志を通り越して憎悪を宿した視線でもって睨み付けてきた。

「まだね」

膨れ上がるオーラに身体が縮み上がる。無理だ、と悟ってしまった。今のこいつには勝てない。

「クロロ。俺、今団員になったんだよな？ 団員同士のマジ切れ禁止じゃなかったの？」

ついさっき少女に言われた台詞にすがってみる。返って来たのは含み笑い。何か言えよ、と心中で懇願しながらも目は小柄な少年から離せない。彼は此方に音もなく近付いてくる。いつ飛び掛かられるのかと、鼓動が速まる。

そして彼が動く、と流れる空気の変化から察し、左手から如意棒を具現化した時だった。

「フェイ、喧嘩にしておけ。出来ないなら、分かっているな？」

交差するクロロと少年の視線。言葉は無かった。いつ爆発するか分からない緊張感だけがどんどん膨れ上がっていく。

「チツ」

予想は出来たことだが、少年が舌打ちと共にくりりと踵を返したことに安堵する。そのまま少年少女の輪から少し離れた場所に座り込んだ少年は、苛々と爪を噛んでいた。

「だっせえの」

「煩いよ」

「止めなよ」

また一悶着おきそうな面々を置いて進み出て来たのは、似つかわしくない大きさの木箱を携えた一人の子供だった。だぶだぶの作業服は様々な色のペンキで彩られている。ピンク色の髪で覆われ、目許は見えない。

「座って」

淡々とした声音で指示され、思わずクロロを見た。

「団員の証に刺青を入れるだけだ」

何でもないことのようにさらりと放たれた言葉に溜め息を吐き出す。

刺青って、そんなマフィアでもないのに。着実に行っただけいな

い方向へと突き進んでいる気がする。今すぐ時間を遡れたら絶対にあんな所にこの顔を出さなかったのに、その後悔するも全てが遅い。そもそもマフィア狩り、いや人身売買組織中心に襲撃をしていることが知られていたのだ。遅かれ早かれ出会っていたのだろう。この邂逅は偶然ではない。クロロによって仕組まれた必然なのだ。

観念して子供の前に座り込む。無造作に服をむしりとられて、上半身裸にされた。

「背中に入れるから」

物静かな声と共にその作業は始まった。

## 入団（後書き）

ルーク的能力 伸縮する棒 ニョイボウ

あらすじに書いた通り原作キャラと被りそうです。きっと原作では格好良い能力名が付くでしょう。

以下捏造設定

初の団員補充ぶらす流星街以外の人間ということ、団員の態度厳しめ 原作では緩い

初期メンバーの捏造 アーティールについては次話で

## 刺青

「まずっ」

「これ本当に人魚の肉かよ」

眼前では宴会が繰り広げられていた。本日のお目当てだったのだろう、人魚の肉を中心に。

「ルークだっけか。お前も食うか？」

やけにでかい男に爽やかな笑みで勧められたが、首を横に振って遠慮する。口から飛び出しそうな文句を、傍らに置いた棒を握り締めて何とか堪えた。

今この瞬間もじりじりした痛みが背に走る。何を彫っているのか不安で振り返ろうとすれば、意外に強い力で上半身を固定される。つまりは今現在刺青を入れられている最中の俺の前だというのに、無邪気にはしゃぐのは無神経ではないのか。俺の置かれた状況を理解した上で誘っているのならば、唯の考え無しの馬鹿なのか。そもそも俺は警戒されていたんじゃないやなかったのか。

不満渦巻く胸中を、男は全く察してくれなかった。目の前にどっしり腰を下ろし、歯を見せて笑う。

「俺はウボオーギンだ。宜しくな、ルーク」

言つたり手を取られ、馬鹿力で強引に振られた。あまりの勢いに上半身がぶれて肩甲骨辺りに何かが刺さった感触。

「あー！」

後ろから不平の声が上がるが、むしろ俺が叫びたい。

「邪魔するならどっか行つて」

幼さを残しながら殺気を漂わせた声にも、ウボオーギンと名乗った男は動じなかった。

「わりいな、アーティイー」

からからと笑いながら謝罪した男の右腕が音もなく動いた。耳が風の音を捉える。水平に上げた状態で静止した右手に握られているのは刺青を入れる時に使うのだろう、先に尖った刃物がついた短い棒のようなもの。

アーティイーか。俺が背を預けている子供が放つたのか。今更ながら後悔を一つ息にして表明する。ここにいたらいつ殺されるか分からない。殺し合いではなく単なる喧嘩で致命傷を負いそうだ。

やはりというべきか、今のやり取りは喧嘩にも満たない単なるじやれ合いだったようだ。ウボオーギンはそのがたいに似つかわしい大きな掌で捕獲した刃物を弄び、アーティイーは黙々と作業に戻る。

あっさりとした幕引きに、実際に被害を受けた俺にも謝れと言いきびれた。

「で、だ。お前、あとで俺と遊ばねえ？」

流石に刺青を彫る作業の邪魔をする気はないのか、大男は少し距離を取って話しかけてくる。

厄介そうな奴に興味を持たれたことに辟易した。こいつは恐らく戦いそのものを好んでいる。しかも見た限りかなり鍛えていて武器も持っていない。肉弾戦が主なのだろう。まともにやりあつたら棒

どころか如意棒もへし折られそうだ。オーラで具現化した如意棒は、俺のイメージに影響を受ける。故に、俺が折れるとイメージしてしまえば、即座に消滅する。昔親代わりとの訓練中、散々経験した。どうやって断ろうか頭を悩ませていたところに、新たな声がかかった。

「何話してるんだ？」

軽やかな口調につられて視線を上げ、すぐに目の前の大男に戻す。関わりたくない。

「俺はシャルナーク。宜しく」

上体を屈めて無理矢理視線を合わせてきた少年、シャルナークは先程同様朗らかな笑みを浮かべている。胡散臭いことこの上ない。非友好的な態度で無視したにも関わらず、彼は強引に大男の隣に座り込んできた。理解出来ない、色々と。

「あのさ、さつきと随分態度違うわない？」

鬱陶しさが全面に出た声になった。不思議そうに目を見合わせる二人を睨み付ける。

「俺は信用出来ないんだろう？」

大男といい、この少年といい、何故構ってくるのか。放っておいてくれて俺は構わない。

「まあな」

大男は頬を掻きながら正直に同意を示した。

「ま、でも俺は喧嘩できりゃそれで良いからな！」

即座に視線を隣の少年に移す。大男は恐らく話が通じない類の人間だ。

視線でその心情を察したのか、彼は苦笑をもらした。

「俺は元々反対してないよ。それに団長が君のこと気に入ってるから」

少年はどこまでも胡散臭い奴だった。

「どこが？」

クロロは一番信用ならない奴だと確信している。目付きの悪い小柄な少年に俺の殺害許可を与えたことはしっかり記憶に残っていた。

「いつか団長に聞いてみたら？」

はぐらかされた、とすぐに悟る。きつとクロロに尋ねても答えはくれないだろう。クロロは、分かり辛い。他者に理解されることを拒んでいるかのようだ。その癖他者の全てを理解しているかのような態度だから気に食わない。

「じゃ」

少年は身を乗り出してきた。話が変わったことを空気で感じ、嫌々ながら視線を合わせる。

「一応団長にも言われたから調べてみようと思っただけど」

記憶を掘り起こし、自然と眉間に力が入った。悟られないよう俯いたが、効果があつたかは分からない。

クロロがアリスのことを調べると命じた。つまり、この少年が盗賊団の情報源ということだ。それは俺のことを調べ、この状況を意図的に作り出した元凶が少年であることも意味している。正直に言えば、気に食わない。

「その前に一つ。俺のことはどこまで調べたの？」

しかし、俺の感情よりもアリスとの約束の方が優先されるのは当然のことだ。冷静に、そう言い聞かせて相手の情報収集能力を見極める。

「恐らく若い念使いで一人で行動してるってことかな。あとは一見神出鬼没にみえるけど、二年前からは規則性が発見できたからそれで今回も予想出来た」

深く嘆息する。己の行動を反省するしかなかった。

自分でも、ある程度のヒントを与えていることは理解していた。まず第一に人身売買組織しか狙っていないこと。次に国をまたいで行動していること。始めの一年は唯一の手がかりだった住所のある国を中心に荒らしていた。が、そこでマフィアを敵に回してからは二年間の逃亡生活中転々とした土地を遡るように動いている。俺にはよく分からないが、親代わりが選んだそれらの土地に何らかの規則性があつたのだろう。危険性に気付いてはいたが、基本的に人身売買組織はその地域に根付いており、国どころか大陸を変えれば追つては来ないだろうと楽観視していた。

それらの理由から後者は理解出来る。けれど、前者は理解出来な

かった。

「若い念使いで一人で行動してるっていうのはどこから？」

「組織にしては情報が少なすぎる。これで単独か極めて少人数だと推測した。次に全滅した組織に念使いがいた事例が数件。このことから念使いって分かる。でも念使いもしくはそれなりの実力者で、ここ数年裏にもぐっている者、人身売買組織に恨みを持つ者は出てこなかった。だから、まだ表立って活躍したことのない若い人」

俺達みたいなね、と人差し指を突き付けて自慢気に話を締める少年に、一つ突っ込む。

「で、何で複数犯説は消えたの？」

極めて重要な論点だ。彼らが必要としていた人数は一人。よって複数犯だと候補から消えたはずなのだ。

彼は振り返り、輪を作るメンバーの一人を指さした。

「マチがさ、一人だって。マチの勘はよく当たるんだ」

名前に反応して此方に視線をやった少女は、すぐに興味を失ったらしく肉を頬張る作業に戻る。

パクとかいう少女をかばっていたのがマチというらしい。勘が鋭く、そして俺の敵だ、と認識する。そのよく働くらしい勘のせいで俺は巻き込まれたのだ。

「それで、俺の能力は信用出来そう？」

一人静かに敵愾心をもやしていたところ、出し抜けにぶつけられた疑問に虚を突かれた。恐らく間抜け面を晒していたことだろう。

一瞬でも油断した自分を苦々しく思いながら歯を噛み締める。

此方の思惑を全て見透かされるのは、酷く不快だ。まるで親代わりと話しているような気分になるから。今回もそう。彼を試していたことを見透かされ、尚且つ理解した上で丁寧に説明してやったのだと少年は余裕を見せつけてきた。やはり、気に食わない。けれど、確かに能力はあるのだ。それは認めなければ、俺がクロ口に屈した意味がない。

表情を引き締めて、俺は語った。アリスのことを。

相手の表情の変化は実に分かり易いものだった。始めはにこやかに、そして徐々に呆れに変わり、最後は再び笑顔に。

「あははっ。馬鹿だ！ 馬鹿がいる！」

遠慮という言葉を知らないらしい。眦に涙まで溜めながら床を叩き笑い転げる少年を、俺は笑えなかった。

「なあ、つまりどういう事だ？」

同じ説明を聞いていたにも関わらず不思議そうに頭を傾げる大男に、傍らの少年は分かりやすく話を要約してくれた。

「つまり、アリスっていうルーク少年の妹が売られてしまいました。ルーク少年は売られた店を知って探しに行きました。けれどアリスなんていう名前の子供は見付かりません。それもそのはず。元々逃亡生活を送っていたので、妹は名前も容姿も変えていたのです。ルーク少年がその事に気付いたのは、店を破壊してからでした。全ては遅く、手懸かりも自分の手で消してしまっていました」

「そりゃ馬鹿だな」

しみじみ頷く大男を睨み付ける。自分の愚かさを理解している分、むしろ笑い飛ばして欲しい。

「で、どうなの？」

「何が？」

「探せるの？」

声に陰が混じる。

少年は本日一番の満面の笑みを見せた。

「1000万ジェニー」

「は？」

「前金で」

輝く前歯が憎たらしい。右手で額を押さえ、その真意を確認する。

「情報料を取るって解釈して良い？」

「勿論」

清々しい程の即答だった。当然のことを聞くなと云わんばかりの明朗な答えだった。

落ち込む自分が苛立たしい。仲間といっても、無条件に協力し合う関係である必要はない。むしろこのくらいの距離があつた方が都合は良い。いや、そうであるべきだ。金銭が発生した方が弱味を一方的に掴まれずに済む。仲良しこよしの関係なんか、こっちだって望んでいないのだから。

頭を軽く振って、気分を切り替える。

「分かった」

「終わったよ」

了承の言葉と重なるように後ろから掛かった終了の合図。どんな刺青が彫られてしまったか確認しようと首を捻ったが、やはり背中のは上手く見られない。後で鏡に写して確認しようと思いつき、服を手に取った時だった。

「クロロ。条件は団長の命令厳守で良かった？」

道具をしまいながら呑気な声で問いを投げる子供に、クロロは宴の輪からのんびりと答えを返す。

「ああ。充分だ」

ぞくつと背筋に悪寒が走った。丁度刺青を入れられた辺りから、ひんやりとした悪意を感じ取ってしまう。

思わず見やった先、刺青を入れた張本人である子供は、俺を見上げて口許を綻ばせた。

「気を付けてね。団長の命令に逆らったら、お兄さん死んじゃうから」

「クロロ！ あんた最初っからそのつもりで！」

大声を張り上げたところに、横から何かが投げつけられて反射的に受け取った。

情報屋の少年は笑顔を崩さないまま、俺に投げた携帯を指さす。

「旅団の活動がある時はそれに連絡するから。あと携帯代の20万ジエニーもちゃんと振り込んでおいてよ。振り込み先はシャルナークの所に登録してある。1000万ジエニーも用意でき次第振り込み宜しく」

衝動のまま力を籠めた掌の中で、携帯は形を保っていた。どうやらある程度乱暴な扱いをしても壊れない仕様らしい。

頭に血が昇って目眩がする。これ程の怒りは久しぶりだ。殺意とはまた違った、純粹に自分が虚仮にされたことへの怒り。親代わりといった頃よく味わった感情の波に流されるがまま、子供へと向き直った。

「お前の能力だよな？」

子供は幼い仕草で首をことごと一回、下に落とす。

「詳しくは秘密。でも僕の決めたルールを破ったら、蜘蛛がお兄さんを食い殺す」

淡々とした口調で紡ぐ子供は、前髪の奥からじつと此方の様子を伺っていた。少し離れた場所で固まる団員達からの視線も痛い程に感じる。

薄く、長く、息を吐き出した。アリスの為だ。アリスの居場所を突き止める為に必要なことだ。短慮は身を滅ぼす。つらつらと自らを戒める文句を頭に浮かべ、携帯を握り締める。そしてゆっくりと息を吸い込んだ。

「クロロの命令を聞けば、問題ないっていうこと？」

再び子供は頷く。

「分かった。じゃあ何かあったら携帯に連絡して。俺は帰る」

早く一人になりたかった。この場にいたらどんな醜態を晒すか分

からなかった。

俯いたまま早足で扉まで急ぐ。

「待つて」

静かな制止の声に、怒りを押さえ込みながらゆっくりと振り向いた。無表情で向き直った先には白いワンピースを着た少女。彼女は右手を上げて掌を上に乗せ、突き出している。

「私の銃、返して」

別に謝罪を求めている訳じゃない。けれども、此方の怒りを完全に無視されたことにまた苛立ちながら銃を取り出し、少女に投げ付けた。

足早に辿り着いた寢床で、まず行ったのは背中の確認だった。服を脱ぎ、備え付けの所々欠けた鏡に背を向け、首だけで振り返る。

蜘蛛だった。背中一面を覆うような蜘蛛の真ん中には4の数字が入れている。

ふと思いつく。あの子供は最後何と言ったか。

『ルールを破ったら、蜘蛛がお兄さんを食い殺す』

会話の中で何回か耳にしたキーワードである蜘蛛にどんな意味があるのか分からない。けれどあの台詞に出てきた蜘蛛は、確実に俺の背にある刺青を指すのだろうと理解出来てしまった。

身体の奥底からこみ上げる衝動のまま、鏡に拳を叩き込む。木っ端微塵に割れた硝子が飛び散り、視界から蜘蛛の刺青が消えたことに少しだけ胸のざわつきが収まった。けれどもこの身体が毒を含んでしまった事実が変わりはないことくらいは理解している。

「アリスに会いたい。会いたい。会う。絶対に見つけてみせる。約束は守らなきゃ」

自らに確認するように一頻り思いついた言葉を口に出し、漸く落ち着きを取り戻すことができた。

そう、決して今日この日起こったことは悪いことばかりではない。情報屋の少年という大きな手がかりを得ることが出来たのだから。

## 刺青（後書き）

拍手ボタン設置しました。一言頂ければ嬉しいです。

以下捏造設定

刺青関連の捏造 原作ではシンボルの意味のみ

アーティーは絵画関係呪い屋の設定 蜘蛛のデザインも彼が決めた  
ことになりました

## 初めての1

「お？ 来たのか新入り。早えな」

三ヶ月鳴らなかつた携帯にメールが届いたのが二週間前のこと。集合場所として指定された国まで飛行船で一週間はかかる国にいた俺は、指示された日の三日前にきちんと辿り着いた。そして到着早々放られたのはそんな気楽な声かけだった。

「命令には絶対服従って決めたのはそつちじゃなかった？」

前回連れ込まれた場所より若干小さめの廃屋に揃っていたのは三人。その内の一人、言葉を交わしたことのある情報屋の少年に向けて苛立ち隠さず話しかければ、爽やかな笑みで流される。

「『暇な奴』って指定があれば、暇な時だけ参加で良いよ」

「じゃさよなら」

あまりの軽い返答に、四日間行くべきか迷った自分が馬鹿馬鹿しくなった。

メールを受け取ってからまず検討したのは、俺は暇であるのか、という事案について。つまり、やるべき事があるかないか。これはあると言えるだろう。情報屋の少年に支払う金を用意しなくてはならない。が、これが案外難しかった。盗むことには慣れていない。けれど俺は盗品の流通ルートに関してあまりにも無知だ。親代わりには教わらなかつた。生活に必要な最低限の物しか盗まないといって拒否したのは俺だ。だから食料品や家に保管してある小金しか盗まなかつた。今まではそれで充分だった。

では、真面目に働いて稼ぐか。考えてすぐに否定する。まず、恐らく俺は戸籍を持っていない。そして未成年だ。まともには働ける訳がない。たとえ働けても稼ぎはごく僅かだ。1000万ジエニーという大金を稼ぐまでにどれだけの時間を要するか。現実的ではない。比較検討した結果、道徳観を考慮するのは今更だということ。早さを重視し、盗みを繰り返すことにした。今までよりも裕福な家を狙い、金庫を寢床に持ち帰り、壊して中身を取り出す。場所を移しながら二ヶ月で五件程犯行を繰り返し、止めた。普通に考えれば分かることだが、金庫の中身は全てが現金ではなく宝石や俺にはその価値がよく分からない代物だったからだ。盗品の流通ルートに精通している人物に心当たりはあるものの、信用して良いのか未だ判断がつかない為、目ぼしい物だけ荷物に入れてある。

その後の一ヶ月は、今まで通り小金を貯めているような家を狙って盗みを繰り返した。現金での稼ぎは50万ジエニー。普通に稼ぐよりは確実に早い。目標までは程遠い。

そんな生活をしている中、送られてきたメール。正直な気持ち、一生連絡が来なくても構わなかった。けれど来てしまったからには考えなくてはならない。そして暇ではないと結論を出した。小金を稼ぐのに忙しい上、移動にも金がかかる。

それでも足を運んだのは、荷物を占拠する行き場のなくなった盗品の存在と背中に存在する枷を意識してのこと。暇の定義が彼らと違い、命令違反とみなされて殺されるのは勘弁だ。

そんな経緯の末、嫌々着いてみればなんと緩い枷だと判明すれば、帰りたくなるのも当然だろう。

「待てよ。折角時間があるんだからちよっくら遊ぼうぜ」

後ろから近づく気配に、一步横にずれる。予想はしていたが、相手は肩を掴もうとしたのだ。ろう手の行き場を失い、此方を睨み付けてきた。こめかみをひくつかせている辺り、随分と切れ易い印象を

受ける。

「悪いけど、遊んでる暇はないんだ。三日後また来るよ」

ここまで来たからには、今更ばつくれても良いことは少ないだろう。幻影旅団の実力を知れる上、彼らの持つ独自の盗品の流通ルートを探るため参加は決めたが、親交を深める気は更々無い。後ろで上がる罵声は無視してそのまま廃屋を離れた。

その日の寝床を見付けようと少し離れた地区を散策し、ちょうど良い公園を見付けたのは既に日も落ちた頃合。現在節約生活中故、宿を取る気はない。廃屋に潜り込めば雨風は防げるが、条件の合う地区に旅団の集合場所があるため、気分的に嫌だった。

住宅街の近くで昼間は利用者が多いのか、きちんと清掃がされているらしい。本日のベッドと決めたベンチはさほど汚れもない。もう夜も更けていることもあり人気もなく、誰か来たら気配で気付くだろうと早速横になって瞼を閉じる。長い時間の移動で疲れていたのか、眠りの気配は実にあっさりと身体を飲み込んだ。

一時間経つただろうか。耳に心地好い虫の鳴き声に突然混じってきた人の気配に浅い睡眠から覚醒する。ゆつくりと警戒しながら身を起こせば、人工の明かりに照らされていたせいか、すぐに相手は此方に気付いてしまった。

「だっ誰？」

高く頼りない声に、警戒を緩める。

「怪しい者だけど。君は？ こんな夜中に一人は危ないよ」

人の気配が薄いこの空間は、何かあった時に気付かれにくい。そ

んな心配から出た言葉に、少女は一瞬目を丸くし、そして小さく笑った。その瞬間、目尻から涙が溢れ落ちるのをじっと眺める。

「変なの。貴方が危ない人じゃないなら、私は大丈夫だわ」

距離を置いたまま立ちつくす彼女を、ベンチに座ったまま見上げた。街灯の光に照らされた少女をゆっくりと眺め、美しい少女だと知る。金髪碧眼の愛らしい顔立ちが、ではない。此方を真つ直ぐ見詰める瞳が涙で潤んでいるのにも関わらず、その視線に意思の強さが込められていることが、好ましかった。

「怪しいけれど、危なくはないかな？」

柔らかくみえるよう口許を綻ばせる。少しだけ彼女と言葉を交わしたかった。その涙の訳を、聞いてみたかった。

同年代だろう少女は、それでも警戒を解かず、溢れる涙をそのままに少しだけ悩むように首を傾げた。が、すぐに思い直したように視線を上げ、此方を指さす。

「良いわ。それで、怪しいけど危なくない貴方はいつまで泣いている女の子を突っ立たせておくの？」

急に強気な口調になった少女に苦笑をもらしながら、荷物を背負って立ち上がり空間を譲ってやる。毛布代わりに使っていた上着はベンチの上に敷き、三歩分距離を取る。

「どつぞ、お嬢さん」

片手で促せば、満足したように頷き腰を下ろす少女。

不思議と礼も言わないその傲慢さを微笑ましく見守れる自分がい

る。少し考えて、すぐに納得した。弱い子が強気な態度を取っていると、その虚勢が可愛らしいものに思えてくるんだ。アリスのように。いや、アリスは強いしもっと可愛かったけれど。

「で、貴方はどうして此処に？ 見慣れない顔だけれどこの辺に住んでいるの？ 家出？」

強引に袖で涙を拭いながら毅然と問いかける少女こそが家出なんだろうな、と予想しながら慣れた答えを返した。

「ヘンデス。ハンター目指して武者修行中なんだ。それで、お金が無くて野宿してる」

親代わりに仕込まれた嘘だ。なんでもこの世界にはハンターという社会的地位の高い職があり、ハンター志望といえば大概の不審な行動は見逃してくれるとのこと。例えば俺のような餓鬼が凶器となりうるでかい棒を背負っていても、咎められることはない。

案の定、少女もすんなりと信じてくれた。

「へえ。私と同年くらいなのに凄いのね」

大抵の人の反応と同様、その視線には羨望がたつぷりと含まれている。一体ハンターがどんなものなのか、一般常識に疎い俺は分からないが、凄い職業らしい。

「ねえ、私もハンターになれるかな？」

無理矢理声を弾ませる少女に曖昧な笑みを返した。涙の気配が薄れたのは嬉しいが、如何せん俺も詳細は知らない。ただ一つ、分かること。

左腕を後ろにやり、一瞬にして棒を振り下ろし、腕が水平になつたところでぴたりと止める。ちょうど、少女の目の鼻と先に棒の先がきた。風圧で金の髪がふわりと持ち上がる。

「へ？」

何が起こつたのか理解出来なかつたらしい。一拍置いて棒を避けるようにベンチの端まで後ずさつた。

「ちよつと！ 危ないじゃない！」

「無理じゃないかな。少なくとも現時点では」

すぐに棒を背負い直し、答えを出す。分かつてはいたけれど、反応が遅すぎだ。

「何が？」

険も露な声で問い返す少女に、苦笑をもらしながら一步下がって答えた。再び警戒されてしまったらしい。

「ハンターになるの。このくらい、すぐに対応出来なきゃ無理だよ」  
漸く話を通じたのか、少女は自分から取った距離を詰めて座り直した。そして俯き、ぽつりと漏らす。

「分かっているわよ、そんなの。言ってみただけじゃない。何よ。夢を見るのも駄目なの？ 皆していたいけな少女を苛めてそんなに楽しいの？」

鼻を小さく鳴らしたのは再び涙の波が押し寄せているからだろう。

軽い一言が彼女の心を傷付けたのだと知る。

小さく縮こまる姿に良心を刺激された訳ではない。けれど、無性に優しくしてやりたくなつた。考えてしまったのだ。もし、アリスがこんな風に一人泣いていたら。辛い目に合っていたら。傍にいる人、誰でも良いからアリスに優しくして欲しい。

「慰めても良いかな？」

けれど、これが唯の自己満足だつていうことをよく知っていたから、お伺いをたててみた。許可をもらわなくては不審さが倍増する。少女はきよとんと此方を大きな瞳で見返し、ぱちぱちと瞬きを繰り返した。次いで、意地の悪い笑みを見せる。

「良いわよ」

やれるもんならやってみなさいと言いた気な態度に、少しだけ気分が盛り下がった。恥じらつてくれとまでは言わないが、アリスの素直さと可憐さを少しだけ見習つて欲しい。

許可が出たため空いた距離を詰め、目の前に跪く。そして少し上に位置する頭に手を伸ばした。

自分から言い出しておいて難だが、慰めの手段なんて頭を撫でるくらいしか思い付かない。アリス相手なら抱き締めて髪に頬にキスしながら大丈夫と繰り返すのだが、流星に初対面の女の子にそのままですると、下手したら通報される。

少女は目を瞑り、じつと大人しくされるがままで。何となく、こういう行為に慣れている印象を受ける。他人からの愛情表現を、当然のこととして日常的に受けているような。

「ハンターになるのが絶対に無理とは言わない」

撫でる手をそのままに、口を動かす。少女はゆっくりと目を開け、此方を碧い瞳でじっと見詰めてきた。

「だけど、すごく大変なんだ。それこそ一生懸けたってなれないくらい」

さっきからやる気が削がれたままなので、適当な言葉で宥めにかかると。

「君が本気でハンターになりたいのなら、助言できるかもしれない。だけど、そうじゃないなら俺は無理だと言うことしか出来ない」

お互いの視線が交差する。見詰め合うこと数秒、先に反らしたのは少女だった。

「貴方って意地悪」

そっぽを向きながら溢された呟きに、頭に置いていた手を戻した。もう大丈夫だろう、きつと。

少女はじつと離れていく手を追いかけて、そして小さく鼻を鳴らした。これは恐らく嫌な類の反応だ。案の定少女は両手を腰に当て、上から見下してくる。

「貴方、随分女の子の扱いに慣れているのね。ハンターになる武者修行じゃなくて、旅の途中で女の子漁っているだけなんじゃないの？」

随分な言いぐさだ。恐らくこれが地の性格なのだろう。友達いかに違いない。

心の中でそんな悪態をつきながら、表面上は薄く笑みを作る。

「やあ」

妹がいるから気難しい女の子の扱いは慣れていると答えれば話は簡単なだけけれど、告げる気はなかった。アリスの情報に関しては警戒してもし過ぎることはないのだから。

少女は望む答えでなかったからか、此方を睨み付けてくる。さっきまで泣いていたのに、感情の波が激しいことだ。そういえば、と思いつく。

「何で泣いてたの？」

これを聞こうと思って少女にベンチを譲ったのだった。別に聞けなくても構わないが、という軽い気持ちで問いかければ、少女は袈裟に溜め息を吐き出す。

「普通は説教の前にそれを聞くでしょう？」

「気に障ったなら謝るよ」

「謝って」

「ごめんなさい」

言われるがままに謝ったというのに、再びあからさまに溜め息を吐かれてしまった。どこまでも面倒臭い女の子だ。

「もうどうでも良くなっちゃった。それに、貴方みたいにしっかり夢を実現させようと頑張っている人には言えないわ」

思わず吹き出しそうになるのを寸でのところで堪える。少女の中で一体俺はどんな人物になっているのだろうか。

少女は言葉の通り満足したのか立ち上がり、お尻の辺りを手では

たく。俺の上着はそこまで汚くないというのに、失礼な女の子だ。

「貴方、いつまで此処にいるの？」

「さあ。三日くらいかな」

旅団の用事が終わったらすぐに離れるつもりで答えれば、少女は花が綻ぶように笑った。

「そう。またね、ヘンデス」

出し抜けに偽名を呼ばれ、今更なことを思い出した。踵を返す少女の背中に声をかける。

「君の名前は？」

計算したかのような滑らかな動きでくるりと回った彼女は、しかもっ面で舌を出した。幼いとも媚びを売っているとも取れるその様は、やはり甘えることに慣れている。

「さっきの訂正するわ。女の子の扱いに慣れているっていうの。それは可愛い女の子に会ったら一番初めに聞くべきことよ！」

けれど、あまりに清々しく愛でてくれと全身で叫ぶ態度に、もう不快感は起きない。そういう子なのだと言期間に学んだ。

「覚えておくよ」

自然にもれた苦笑に少女も嬉しそうに笑う。

「マリアよ。お休みなさい、ヘンデス」

「お休みなさい、マリア。良い夢を」

少しだけ不安を抱いていたのだが、流石に初対面の男を家に呼ぶ気はないらしい。ハンター志望で野宿だと告げれば、時折家に泊めてくれようとすると親切な人もいたけれど、それはあまりにも愚かな行為だ。年齢的に幼いとはいえ、武器を持っている初対面の人物の言葉を信用すべきではない。マリアがその程度の警戒心を持っていることに安心する。

「マリア、か」

面白い女の子だった。この三日の間だけなら、偽りの存在としてなら、また会いたいと思える程に。

けれど、次の日も、その次の日も、彼女は公園に来なかった。

## 初めての2

三日ぶりに足を踏み入れた廃屋には、七人の少年少女が揃っていた。

「遅かったな」

その中でも一際存在感を放つ少年、クロロに言葉を返す必要性は感じられない。恐らく三日前に遭遇した三人から俺の参加と近くに来ていたことは報告を受けているだろう。白々しいやり取りをするつもりはなかった。

殺気に似た視線を一つ感じながら、彼らから少し離れた所に腰を下ろす。

「今日の獲物はカマントーネの涙だ」

しんと静まりかえる空間で、一人早鐘のように鼓動が速まるのを感じる。

まずい。何のことだかさっぱり分からない。世間の常識に疎すぎるのはこういう時に不利だ。涙というからにはきつと小さい物なのだろう。カマントーネは固有名詞の響きであるから関係ないはずだ。大丈夫だ。獲物の正体が分からなくても、小さい物に狙いを定めればきつと何とかなる。

何気なく胸に掌を当てて鼓動を収めようとしたちようどその時、一人が間拔けな声を上げた。

「何だ？ その何とかの泣っているのは」

心臓の辺りを思わず掴んだ。鳴るな、鼓動。そう念じながら声の主を注視する。同類がいたことへの安堵よりも、無知をさらけ出した少年への反応の方が恐ろしかった。

「宝石よ、宝石。知らないの？ フィンクス」

やけに露出の多い格好をした大人びた少女がからかうように笑う。周りの数人が同調するように頷いたり囁し立てる。

予想はしていたが、知っている振りをしようと当面の方針が決まった。

「うるせえよコノミ！」

「フィンクスの方がうるさいって」

「んだとっ」

「説明を続けて良いか？」

落ち着いた声音で場の主導権をいとも簡単に取り戻したクロロが、朗々とした声で続ける。

「カマントーネの涙は透明な小粒の宝石だ。暗闇の中光にあてると十二色に輝くらしい。古ヌムルア王国が滅ぶ際最後の姫カマントーネが流した涙が水晶に落ち、それが十二色に発光したとされる逸話が残っている。後世その水晶で作られたのがカマントーネの涙という訳だ。現在の技術で分析した結果、石の成分は水晶のみ。何故十二色に輝くかは謎のままだ」

訳知り顔で平静を保っていたが、最後ちらりと此方に視線をやるクロロが憎い。俺の無知はどうやら彼には見透かされていたようだ。

「一週間前からヘンランブルグ美術館で限定公開されている。警備

も特別厳しいらしいな、シャルナーク？」

クロロに話を振られたのは情報屋の少年だった。すくっと立ち上がり、周りに視線をやりながら声を響かせる。

「今回特別に雇われた警備は二十人。内三人が念使い」

知らず身が震えた。念を使えるか使えないか、それは事の正否を大きく左右する。俺がこの二年間出会った念使いはいずれも大した能力者ではなかったが、複数揃われればどうなったか分からない。もし今回三人の念能力者とかち合ったら、その誰もが俺より強かったら。

クロロという絶対的強者に出会ったことで、俺は臆病になっていた。親代わりや暗殺者の少年のように、決して敵わない強者がいるという当たり前の事実を、思い出してしまった。

唇を噛み切つてしまい、血の錆び付いた味が口内に広がる。臭いに気付かれないよう唇を引き結び、どろりとした血を飲み込む。

嫌だ。まだ死ねない。

「三組に分けるぞ。俺とマチとコノミはお宝探し。ルークとフィンクスは正面から入って陽動。シャルナークとフランクリンは此処で留守番だ」

呼ばれた名に反応し、視線をあげる。フィンクスという名に、嫌な予感が働いた。先程出た名前。俺と同じ、無知の少年。そして入った時からひしひしと伝わる殺意の元。

「団長。悪いがこいつとは組めねえ」

両目をつり上げ、こめかみをひきつかせる姿に既視感を覚えた。

何処で見たのだろうと記憶を遡り、数拍遅れて答えに辿り着く。

「ああ。三日前の」

切れ易い印象を抱いた少年だ。

俺の声に七つの視線が集まる。何かやったのかと訝しげなクロロには肩をすくめてみせた。説明する程のことではない。

「まだ根に持ってるのかよ、フィン」

「ああ？ 文句あるのか？」

宥めようとした巨大な男に喧嘩を売る様は正にチンピラだ。

「三日前会った時にルークがフィックスを無視したんだ」

慣れているのか、情報屋の少年がクロロに説明するのを他の奴らは白けた表情で聞き流している。

「フィックス、お前はルークと行動しろ」

全てを聞き終えたクロロは呆れを隠さず、決定事項としてそれを口にした。渋々といいつた様子で切れ易い少年は巨男の服を掴んでいた手を離す。

「ルークも良いな？」

念押しするクロロに、黙って頷く。元々俺に拒否権なんて与えていないくせに、そんな不満は大人ぶって飲み込んでみせた。それに理解していたから。獲物の実物を知らない二人を組ませて陽動にしたってというクロロの思惑を、下手につついて表に出したくない。絶

対に笑われる。

「行くぞ」

落ち着いた声音でかかった号令に、戦意満々で奇声を返す奴。沈黙を保ちながらも腹の底から沸き上がる歓喜をそのまま笑みにしてみせる奴。反応はそれぞれだが、一様に高まる興奮の中、俺だけが冷やかな視線でそれを眺めていた。場違いだよな、と他人事のように感じながら。

情報屋の少年が調べたのだろう内部の詳細な地図と共に、夜の襲撃時間に遅れなければ構わないと軽い調子で送り出された。その拘束の緩さが逆に怖い。

離れている間に俺が裏切って美術館に幻影旅団のことを知らせれば、全てが終わることを彼らは理解しているのだろうか。アリスのことがあるから裏切らないと思っっているのか、それとも裏切っても問題ないと思われているのか。

そんな事を考えながら美術館の下見に行つて、その後少し考えてから足を向けたのは最初の集合場所だった。扉を開ければ、三日前と同じように三人の視線が集まる。最も顔ぶれは一人変わっていたが。

「あれ？ あんたルークだよな」

新たな人物は床に手を付きながら此方に声をかけてきた。違和感を覚え、凝をすれば少女の手元、床にオーラでできた奇妙な模様が浮かんでいる。恐らく彼女の念能力なのだろう。距離を取りつつ適当に言葉を返す。

「背中刺青見せようか？」

これ以上ない本人の証もないだろう。四番は俺しかいないはず、と考えてからそういえば番号は何を示しているのだろうと疑問に思った。しかしそれを口にする前に少女は作業を中断し、此方に向き直る。

「疑ってる訳じゃないけどちょっと意外。あんた、私達のこと嫌ってるでしょう？ 出来るなら同じ空気吸いたくないって思ってる」

少女の決め付けに、自然と眉が寄る。不快だった。決め付けられたことではなく、此方の本心をわざわざ口に出されたことが。勿論敵意は伝わっているだろう、それは構わない。けれども言葉にされてそれを肯定することは勇気がいる。嫌いだと、相手に告げる行為はひどく幼いと反発する自分がいる。

「何してたの？」

無理矢理に話を反らせば、少女は声をあげて笑った。そして悪戯っぽく微笑む。

「下準備。で、ルークは何しに来たの？」

詳しい能力を明かす気はないらしい。ただ見当は付いていた。恐らく彼女は放出系、そして空間を繋げる能力者だろう。見た限りあまり強くはなさそうだ。記憶を読む少女と同じくらいのはず。そんな彼女がお宝探索班に組み込まれた理由は、能力が探索か移動に特化しているから。探索ならば今此処で下準備をする必要はない。彼女の役割が運び屋ならば、留守番役が必要なのも納得できる。

もし彼女の能力が探索に特化していたのならアリスの居場所を調べられたのに、そんな自分勝手だと分かりきっている落胆を抱きな

がら、視線を移した。情報屋の少年が自分を指差しながら小首を傾げたので頷いてやる。

「盗品売りさばいてるのは、あんた？」

この一言で全てを理解したらしい。少年は晴れやかな笑みと共に五本の指をぴんと立てた。

「五割」

「高過ぎる」

盗品の売買の仲介だけで五割持つていかれるのは有り得ないだろう。相場は分からないが、精々二割程度であつて欲しい。

「でもさ、ルークはツテないんだろ？ で、目立ちたくもない。そのくせ金は欲しい」

しかめっ面を作つてはいるが、その裏では良いカモが飛び込んできたと絶対にほくそ笑んでいるに違いない。そして俺は、分かつていてもカモにならざるを得ない。自力でアリスを探し出せず、宝石を金に変える能力もないのだから。

深く息を吐き、肩にかけたバッグから戦利品の袋を取り出した。

「五割で良いから。ただ、いくらになつたかは報告して」

たとえ報告させても、きっと俺はその報告自体を信じられないだろう。それでも、彼に預けなければ袋の中身は無価値のままだ。

少年は袋を大事そうに抱え、嬉しそうに微笑む。

「了解」

その心底嬉しそうな姿に、ひどく腹が立った。

情報屋の少年に与えられた苛立ちを抱えたまま、日が落ちた頃集  
合場所へと向かう。美術館の近くにある森林公園と名のつく林の一  
角。大木に背を預けた少年は此方に気付くと分かりやすく舌打ちを  
してくれた。

「遅え」

「それは悪かった」

告げられた時間よりは早いのが、面倒臭いので謝っておく。そんな  
大人の対応をしてやったというのに、少年は再び舌打ちしながら鋭  
い目付きで睨み付けてきた。

「ムカつくんだよ、てめえ」

その理不尽な悪意に、悟ってしまう。きっとどんな反応を返して  
も彼は俺を気に入らない。俺の存在そのものを認めていないのだか  
ら。

少年と距離を保ちながら、腕を組む。殺気に反応して手が勝手に  
棒を振るうのを防ぐ為だ。まだこいつを害してはいけない。そんな  
理性の働きの基づく一種の防衛行為。そうしなければならぬ程に、  
動揺していた。

俺は、悪意に弱い。家族といた時はぬくぬくと守られていた。親  
代わりは厳しい上に殺したい程の所業をしてくれたが、俺の存在自  
体は認めてくれていた。その後は独りきり。つまり、集団に属し、  
その中で排斥されることに慣れていない。だからこそ、簡単に煽ら  
れる。

「あっそう」

賢い答えでないことを知っていた。予想通り、簡単な挑発に易々と少年はのってくる。

「それは喧嘩を売られてるって解釈して良いんだよな」

拳を作り、ごきごきと関節を鳴らして威嚇する様を眺めている内に、却って興奮がさめてしまった。

幼稚過ぎるだろう、こいつ。同じところまで墮ちたら絶対にクロ口に馬鹿にされる。そんな冷静な思考がやっと働く。

敵意の固まりを眺めながら、すっかり血が固まった唇のかさぶたを舐めた。ひりひりとした痛みを覚えつつ、どンドン思考は冴えていく。

別に良いじゃないか。敵意を持たれようと、排斥されようと、俺の目的には関係ない。彼らと仲良くなる必要は何処にもない。今はただ、敵を倒すことだけに集中すれば良い。そして目の前にいる少年は、仲間ではないけれど今は敵でもない。

「そろそろ時間だ。行こうか」

「はあ？」

あっさりと背を向けたことに不満の声が上がるも、ここで喧嘩を買われては困るのだ。少なくともクロ口には使えろと判断してもらわなければ、アリスへの距離が遠退いてしまう。

「やる気ないなら此処にいたら？ 俺一人で陽動係やるし」

思ってもいないことを口に出す。一人で念能力者のいる集団に突っ込むなんて、今はしたくない。少し前までは迷わず人身売買組織

に乗り込めていたのに。やはりアリスの手掛かりが中々掴めず自棄になっていたのだらう。でも今は違う。金さえあればアリスを見付けられるんだ。手掛かりを得た途端、危険から遠ざかりたくなっている自分がいる。だから、この少年を盾にしよう。俺が生き残る為に。

「それとも、勝負する？」

わざとらしくゆっくり振り返れば、怪訝な視線とぶつかる。人差し指を美術館に向けて、口角を持ち上げる。

「どっちが多く警備を仕留めるか、競う？」

反吐が出そうな台詞だった。人の生死を弄ぶ、罪を罪とも思わない思考が前提になければ、こんな発想出て来ない。人身売買組織の人達を殺すことに戸惑いなんて生まれなかった。だって、彼らは悪だ。では、これから殺す人達はどうか。悪ではない。彼らはただ警備として雇われただけだ。そんな彼らの命を勝負の対象にするなんて、狂っている。それでも、ちくりと胸に走る痛みを、未だ残っていたらしい善意が主張する躊躇いを、綺麗さっぱり無視して少年に笑いかけた。アリスの為なら、どんな最低なことでもやってやる。

「良いぜ」

そう言って喉で笑い出す少年。此方に向けられた悪意に変わりはない。けれど、晴れやかな笑みがそれに加わった。

「まあ絶対俺が勝つから勝負にはならないけどな。あっ、俺が勝つたらお前謝れよ」

そうして意気軒昂と美術館へと歩み始める。  
狂っている。彼も、そしてきつと俺も。

## 初めての2（後書き）

次回更新は一週間後くらいを予定

捏造設定

お宝関係の記述は全て捏造

旅団の少女コノミは初期メンバーの捏造 運び屋設定

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5511w/>

---

悪役だと知らなかった

2011年12月13日21時24分発行